
穢翼のユースティア その後

皆無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

穢翼のユースティア その後

【Nコード】

N3688U

【作者名】

皆無

【あらすじ】

「穢翼のユースティア」の後日談としてのお話です。上記作品を購入してから読んでください。読んでから購入してください。でもうれしいです。けど意味はわからないと思います。

オフィシャルのお話を大事にしてください。
世界観が崩れてしまったら読まないでください。

ようこそようこそ

第一章 それぞれ

第一章 それぞれ

ノーヴアス・アイテルが浮遊都市ではなくなった日、つまり真の地上へ降り立った奇跡の日。そして一人の尊い天使が消えた日。その新たな時代の節目の話である。

この奇跡の日から数日、人は大きく2種類に分かれていた。1つは精神的な意味でも自分という足場が崩れ、ただ茫然と時間を流す者。そしてもう1つは新たな未来として現実を受け入れ、進もうとする者。人間の多くは前者であつた。

最期の大崩落をきつかけに動いた暴動、それは生きる為のものではなかった。ただ失った現実から目を反らす為の逃避。きっとその暴動の末に国王軍から勝利を得たとしても暴動に参加した多くの者にはなんの意味もないものになっただろう。そういった人々は、ただ奇跡を受けても進むべき道がわからずに佇むのみであつた。人々が失ったものはあまりに大きく、無秩序だった。家、家族、友人、恋人、思い出の地、敵、財産……数えるときりがない。それほど多くのものを全ての人が失った。逃避というものが人として当然の精神状態なのだろう。

だが一方で前へ進むものも少なくともいる。史実を知ってしまった者、信念の下に自らを奮い立たせる者、責任を背負おうとしている者、信頼できるものに付き従おうとする者、理由は様々だが未来へ進むことを選んだ者達はいた。

カームはちょうどこの狭間にいた。初めて愛した女を失い、最期まで愛そうとした者も失った。そういった意味では前者の逃避する

人間に属するはずだった。だが彼には信頼してくれる仲間がおり、また全ての事実を知った唯一の人間でもあった。それが後者として、未来へ進まなければいけない人間として、中途半端な存在に至らしめた。

奇跡の日から5日が経った。多くの事態を飲み込めない者は混乱しながらも既に暴れる力を失っていた。交戦中だった反乱軍と国王軍が、状況を理解するために互いに直ぐに休戦を求めたのも自然のことだった。誰を失い、何が起きたのか、誰もわからない。昨日互いに背を庇い合って戦った仲間はまだ生があるか、自分たちの指揮を執っていた者が何を考えているかもわからない。そのような状況では文字通り「休む」ということができる精々のことだった。

このノーヴァス・アイテルで最も奇跡を知っている者はカイク・アストレアという青年一人だった。カイクに近しい者はカイクに事実を訪ねようとした。しかし、カイクに近しく、また天使・ユーステイア・アストレアを知っている者はそれ以上、カイクにかける言葉が見つからなかった。彼・彼女らはただカイクから口を開いてくるのを辛抱強く待つのみだった。それは決して容易いことではないが、カイクのことを知っている者は彼の心の傷の深さを感じている。計り知れないものではあるが、確かに感じている。彼は自分の命・ノーヴァス・アイテルと一人の少女を天秤にかけた。そしてその結果、一人の少女を選び、だが皮肉にも全く逆の答えを得た。本来ならば責められるものかもしれないが、それは全くなかった。それは恐らくカイクという人徳、そしてティアという少女の仁徳によるものだろう。だから彼の周りの者は待つ、そして見守ることしかできなかった。苦しい葛藤の中、再び自分の足で立ち上がる時までを。

国王軍の中心、リシア・ド・ノーヴァス・ユーリイは情報収集にあたっていた。その情報というのは天使や奇跡についてではない。民

の生存や生活についてだった。自分の不甲斐ない力に怒りを感じながらもやらなければならぬ立場にいる自覚はあった。被災状況を確認し、動ける兵には城の物資を自軍・反乱軍の隔てなく行き渡るように指揮していた。普段ならば保身に身を固め、情報の攪乱・隠蔽する貴族もこの状況下では惜しみなく自身にある情報を国王に提供した。それは彼女の力によるものとは言い難いが、その情報を活かして多くの民の安全へと繋げたのは紛れもなくこの幼さも残る王の成せるものだった。

そしてそのリシアを支えた者としてフィオネ・シルヴァリアの姿がある。彼女は軍の統制を任せ、リアルな国の状況の報告・適切な物資の配分を自分の力を惜しむことなく発揮していた。本来、彼女の職務は軍人としての役人であり、相手を倒す・制することである。しかし彼女は羽狩りと呼ばれる防疫局強制執行部の信頼も厚く、その姿から国王直属の兵もそれを認め、円滑にことを進めることに一役かっていた。

反乱軍の奇跡の聖女イレヌ、コレット・アナスタシアも反乱軍に癒しを与えるために力を発揮した。元々は反乱軍の多くに信仰心などない。なぜなら彼らは不条理の中で生かされている者であって、神や天使に縋っても意味がないと分かっているからだ。しかし死んだはずの聖女イレヌの復活、そして浮遊都市が無事に新しい世界に降り立ったこと、それらの奇跡から彼らは神や天使の存在を考えようになった。その人々の信仰心を優しく包み込み、安らぎを与えるために彼女の存在は大きかった。全くの迷いのない彼女の信仰心は間違いではなかったのだ。

そして再び聖女となったコレットを支えたのはラヴィリアだった。昔のような聖女・付き人としてではなく、弱さを持つ妹としてコレットを守った。まだ大崩落によって大切なものを失った者はそれについてコレットを罵ることもあった。それは、聖女としては決して受け入れなければならぬ辛いものだった。しかしそれを和らげて

くれていたのはラヴィリアだった。この時間はラヴィリアがコレットにとってかけがえのない大切な存在であることを再度自覚できた時にもなった。

一人の優秀な医者、エリス・フロラリアは人を選ばずに治療をしていた。いや、選ばずというと語弊がある。国王軍・反乱軍を問うようなことはせず、ただただ助かる見込みのある重症患者を優先的に治療を施してきた。勿論、金で優先的に診てもらおうとする貴族もいた。しかしそのような者には無愛想な毒舌で舐め、軽蔑の目を向けるだけで彼女の動きを変えることはなかった。今、自分は最も必要とされている存在であるということを自覚できる能力はあったし、周りもそれを認めている。けど今は「人を助ける」という言葉のみを原動力としてどの医者よりも多くの命を救った。

奇跡からの5日間、カイルはただ元ルキウス・デイス・ミレイユの屋敷だった一室に横たわるだけの日々を過ごしていた。怪我はない。腕や足を失ったはずだが、ティアの最後の奇跡で全ての身体の傷は癒えた。しかし精神は相反するかのように疲弊しきっていた。自分の部屋の方が休めると思ったが、反乱中に起きた崩落で牢獄までうまく辿りつくことができなかった。いや、行こうと思えば行けるほどの力は彼にはあったが、その力を使う気にはなれず、近場のルキウスの部屋に一人で居た。

主のいない屋敷は静かだった。1階へ降りれば遠くから国王軍が働く声も聞こえるが、2階に居れば静寂に包まれることができた。食料も最低限のものを口にし、可能な限り睡眠に時間を使った。起きているとそこには思考が生まれ、そして苦痛を感じる。それを避けるためにとにかく眠った。努力したことと言えば睡眠の為にワインを口にすることくらいであった。

彼は分かっていた。最愛の人、ティアが残してくれたこの世界と

この命。このままにはいけない。最期にエリスが、ルキウスが教えてくれた「選択をする」ということをしなければならないということを。分かっているが身体も精神も言うことを聞いてくれない。「選択」というものは精神を大きく使う。世界とティアを天秤にかけ、ティアを選べたのも自分の命をかけることができたからだ。自分の命をエネルギーに変えて初めてできた「選択」だった。今は命をかけることもできないほど憔悴しきっていた。

しかし彼は決めていた。5日間だけ自分に時間を許そうと。それ以上は世界を救ったティアの為には許されない。さらには自分を氣遣い、休ませてくれている大切な人々の為にも立ち上がらないといけない。そしてその5日間は過ぎようとしていた。

第二章 立ち上がり

第二章 立ち上がり

日付が変わる頃、つまり奇跡の日から6日目。既にカイムは目を覚ましていた。自分で決めたりミット、5日間は終わった。今日からこの瞬間から動かなければならない。ベッドから身を起こし、腰掛ける。そして目を閉じて頭を抱える。これから自分のすべきこと、「選択」をしなければならぬことを考えた。無駄な5日間を終え、彼は切り替えた。

日が地平線に昇る頃、カイムはルキウスの屋敷を出た。浮遊都市だった頃よりも日が昇るのが早くなったのは気のせいではないだろう。あの奇跡は時間すらも狂わせた。カイムは真っ直ぐに王城を目指す。まずは自分の知る事実を伝える。これは何より先にしなくてはならないことで、これからすべきことの為に必要なことだった。もっと具体的に言えば仲間に協力を仰ぐことだ。自分一人の力には限界がある。すべき為の手段として仲間は必要だった。

最もカイム自身は気付いていない。仲間を求める理由は手段の為だけでないことを。心の隙間を、傷を癒す助けを求めていることを知るのとはそう先のことではない。

王城の門扉の前には見覚えのある姿があった。フィオネだ。彼女はカイムと目が合い、驚きで目を丸める。

フィオネ

「カイル…その…大丈夫か？」

カイル

「ああ。心配かけた。問題ない。それよりリシアに会いたい。まだ寝てるか？」

フィオネ

「リシア様は寝る間も惜しんで事にあたっていらっしやる。仮眠は先程取られたばかりなので、謁見は可能だろう。」

カイル

「そうか…」

自分はただ現実から逃げ、眠り続けていたのにまだ幼い王は文字通り尽きるまで働いている。この現実を受け止めなければならない。

カイル

「フィオネも少し時間を貰えるか？」

フィオネ

「これから軍にリシア様の命令を伝令するところだ。だがカイルが来たんだ、リシア様のところまで案内する位の時間はある。」

カイル

「そうか、とりあえず頼む」

二人はどのような顔をすれば良いか分からず、戸惑った表情で沈黙が包む。黙り込んだ時間のまま城内に入り階段を上がる。

近衛兵

「フィオネ殿！先程出ていかれたばかりでどうされましたか！？」

沈黙を壊したのは見かけた事のある兵士、その無駄にでかい声だった

た。

この声は元々だろうか。カイムは、この兵士の馬鹿でかい声は「自分の存在はここにある」と言う存在主張の一つではないかと考えた。と、同時にそんな哲学的な事を考える新しい自分に気付いた。これも奇跡のおかげか…考えることが増えた。

フィオネ

「リシア様に火急の知らせがあります。扉を開けてください」
近衛兵

「フィオネ殿はともかくその方は…まさかカイム殿！」

どうやらこの男もこちらを覚えていたらしい。

フィオネ

「リシア様にはカイムが登城された折には第一に迎える様に承っている。頼む」

近衛兵

「はっ！！直ぐに！」

扉が開くと直ぐにリシアの姿があった。なにやら忙しく汚れた兵士と会話をしている。しかし直ぐにカイムとフィオネの姿を認めた。

リシア

「そなたの働きは大義であった。礼は後にさせてくれ。急用じゃ」

汚れた兵士は大袈裟なほどに頭を下げ、直ぐに退場する。すれ違ったその兵士の眼には牢獄ではみない輝きに近いものがあった。どこかで見たような眼だった。

リシア

「何をしておる。早くこちらへ！」

フィオネの時はカイムを見て隠さずに驚きを見せた。しかしこの一
国の王はそんなものは見せずにまるで昨日からの再会のようにカイ
ムを呼びつけた。これも王の器の一つ、か。カイムはそう感じとれ
た。

カイム

「待たせた」

リシア

「全くだ。自覚があるなら行動で見せてみよ。フィオネ、御苦労だ
った」

カイム

「行動か…。それに値するか分からないが、とりあえず頼みがある」

リシア

「王にあつていきなり頼みか。無礼もいいところだ。して頼みとは
？」

リシアは言葉に反してやはり嬉しそうである。先ほど見せた王の威
厳というのは片鱗のもの。王という前にお年頃の女の子ということ
だ。その女の子には今どれだけのものが背負われているのだろうか。

カイム

「2つある。1つはこの紙に書いてある者をここに集めてほしい。
2つ目は会議室を貸してくれ。大会議室ではなく、10人程度の小
会議室がいい」

リシア

「ふむ…分かった。おっ、しっかり私も入っているな。ではあと4

人か。フィオネ、悪いが頼まれてくれるか」

フィオネ

「御意。しかし伝令がまだ終わっておりませんので…」

リシア

「それは副騎士団長に伝えて人集めを優先してくれ」

フィオネ

「了解しました」

リシア

「それとこの紙にはフィオネの名前も入っている。人を集めたらそなたも来いよ」

フィオネ

「えっ…はい」

突然、先ほどの近衛兵が謁見の間に躍り出た。

近衛兵

「失礼します！反乱者が城で暴れようとしています！なんでも国王を出せと…情報ですと反乱軍の指揮を執っていた男かと！」

リシア

「ジークといった者が…数は何人だ！？」

近衛兵

「その男1人であります！」

リシア

「1人？…どうやら国を潰しにきたのではないようだな。ここへ通せ」

近衛兵

「しかし…」

リシア

「良い。いざとなればカームもある。ただ話をしに来たのだろう。フィオネ、迎えにいつてくれないか」

フィオネ

「はい、かしこまりました」

いつもの背をピンつと伸ばした美しい佇まいのまま、フィオネは喧噪の扉へ向かう。カイムは心で一番の難問が向こうから来たことを悟った。今日一番の修羅場は朝一番からとはな・・

カイム

「もう分かっていると思うが、今日は集まった者に俺の知っている全てを話したいと思う。当然国政にも関わることだ。止めるか？」
リシア

「止める気はない。全ての民は事実を知る権利がある。過去のような隠しだったことはしてはならない。だがこの集まり、随分と偏っているように思えるが？」

カイム

「当然だ。全て俺とティアの知り合いだ。俺は会議をしに来たわけじゃない。伝えに来ただけだ」

リシア

「なるほど…ではこのラヴィリアという者も…」

その時、扉は乱暴に開かれた。そして逸らすことなく真っ直ぐに男がカイムを見た。男の名はジークフリード・グラード。清廉された顔立ちながらも組織のボス。牢獄という地獄を仕切っていた者。その男は何を考えているかも読めない表情でカイムをジッと見ていた。さて、どう切りだすか

ジーク

「よう、随分長期休暇もらってたみたいだな。休み明けで悪いがちょっと面貸してくれないか」

にやりとした表情でカイル・リシアに近づいてくる。今まで組織の顔として城で暴れていたのだろう。そんなものを微塵に感じさせないオーラ、余裕とも見える微笑で歩いてくる。

カイル

「いや、こっちが貸してほしい。ちょうど呼びに行ってもらうところだった」

ジーク

「呼びに？ ほう… そのための登城か。よかった、嫉妬しちゃったよ。お目覚めのご挨拶が俺じゃなくてそのお嬢さんで」

カイル

「やはり見ていたか」

ジーク

「ああ。貴重な部下を一人、ルキウス卿の屋敷を張らせてた。で、そちらからのご挨拶は何用で？」

カイル

「それは揃ってから話す。それまで待っていてくれ」

ジーク

「…」

堅いとも和らいだともいえない空気。形容できないこの空気を破ったのはやはりリシアだった。

リシア

「ジークか。私もいろいろそなたに話したいことはある。謝罪も含めてな。けど今はまずカイルの話聞いてからにしないか」

ジーク

「王女様にお名前を覚えていただけたとは光栄の極まりです」

リシア

「そなたの目的は私の首だろう。そのような男に光栄とは… すま

ないが皮肉にしか聞こえん」

ジーク

「伝えたいものは伝わったようで。国王とは俺の中で牢獄を造った無能の象徴かと思っていたので意外でした」

カイル

「おい、やめろ。リシア、会議室に通してくれ。俺とジークは先でそこで待つ。リシアもみんなが集まったら会議室にきてくれ」

リシア

「…わかった。人を呼ぶ。少し待ってくれ」

そう言っリシアは席を立ち、先ほどの近衛兵に召使を呼ぶように伝える。リシアとジーク。リシアはともかくジークとしては明らかに殺意をもつて数日前には殺そうとしていた立場だ。そう簡単に和解などなるはずもない。

ジークの考える牢獄の元凶にリシアはどれだけ関わっていると言えるのだろうか。この少女にはまだ戴冠も早い。本来ならば国を周ってまだまだ国政というものを勉強する年齢。真の元凶とも言えるギルバルト・デイス・バルシュタインはもういない。リシアの手でその野望を打ち砕き、本当の民の為の国政が行われようとしていた。まさにリシアの働きによって正の方向へ国が動き出そうとしたときだった。しかし時間はあまりにも短かった。その動き出す前に反乱が起きてしまった。全ては終わったこと。それが事実でも現実はありませんにも無慈悲だ。

直ぐに召使の女性が現れた。先を促され、カイルとジークは無言で後に行く。

第三章 事実

第三章 事実

- - - - - Another View -

???

「調査隊か…完全にハズレくじだな」

???

「黙って今まで仕事をしてれば生きるに事欠かないのにな」

???

「浮遊都市が落ちなかったら、の話だろ」

笑顔の青年

「みんなやる気ないなあゝ折角のお仕事、楽しもうよ」

???

「やる気あるのは隊長さんだけ。面倒は勘弁してくれな」

笑顔の青年

「未知の冒険、ワクワクするじゃん！僕は直ぐにでも行きたいなあ」

???

「隊長…今回、上から全ての権限を隊長に与えるって話で来てるんだ。空気読んでくれよ？」

笑顔の青年

「分かってるって！行きたくない人は無理して行かなくてもいいよ」

♪現地調査以外にもお仕事はあるからね」

???

「本当ですか！？では私は監視でも」

俺も私もと声があがる。誰も現地調査という最も危険な仕事はし

たくない。クズは要らない。やる気がない奴がいても足を引っ張られる。無理も出来ない。無能は嫌いだ。逆に俺の意志について来れる奴ならどんな奴でも歓迎だ。組織の人間でも少女でも悪魔でも。さっさとゴミを片付けて動きたい。面倒事が多すぎる。

…死ねばいいのに。

- - - - - Another View End - - - - -

会議室は紫煙に包まれていた。ジークの愛用の葉巻から出た煙は消えることなく部屋に充満している。煙とは本来、出ると同時に直ぐに消えるものだと思う。しかし狭い空間の中で同じ煙が存在していると中々消えない。

人の心と同じ。少し出たものであれば直ぐに消えていた。最初、俺はティアを殺そうとした。正確には組織の頭・ジークに渡すはずだった。つまりそれは直ぐに死へとつながる。あの時、ティアを直ぐに突き放していたらどうなっていたのだろうか。想像でしかならないが、恐らくこのノーヴァス・アイテルは混沌とした地上へ落下し、全ての生命が絶命していただろう。彼女は天使で死ぬことはなかった。しかし彼女の母、初代イレヌの力はもう無くなっていた。それによりこの浮遊都市は…

少なくとも今のうちに自分の頭の中にティアが埋め尽くされることはなかった。直ぐに消していれば。けど今は自分の脳内がこの部屋の煙のようにティアでいっぱいになっている。触ることのできない煙。幻のように。後悔しない選択をしたつもりだった。けどそれは不可能だった。彼女に、ティアに後悔しない選択をさせるためには。

ジーク

「お前、だいぶ変わったな」

カイル

「そうか。どう、変わった？」

ジーク

「上手くは言えん。ただ殺し屋をやっていたナイフのようなお前はもういないな。」

カイル

「それは悪くなったってことか？」

ジーク

「さあな。だから上手くは言えない。ナイフだからこそそのカイルだとは思いつし、ナイフで終わるだけでないのもカイルだと思う。結局変わった気はするが、何が変わったかはわからねえ」

カイル

「そうか…」

ジーク

「だが自分の足で立ってるようだ。前と違ってな」

カイル

「…」

ジーク

「でもあと数日お休みしていたら目覚めのキスを届けにいったのにな。残念だ。」

カイル

「目覚めのキス？ジークの拳のことか」

ジーク

「違う違う。美しいお姫様だよ」

カイル

「ジークにそんな優しさがあるとは思えないが」

ジーク

「お姫様の名前はオズっていうんだけどな」

カイル

「…笑えない」

本当にオズが起こしに来るとしたら前回の鞭打ち6回では済まないだろう。あの男はベストコレクションを並べて容赦なく俺を殺るだろう。信頼関係があればこそその不触金鎖。それが崩れればオズは迷いなくジークの命令通り俺にあらゆる苦痛をくれただろう。五体満足にはならない。施しは止血と最低限の水と食料。ずっとギリギリ生きる境界線に立たせて。

ジーク

「まあ、お姫様のキスには及ばないけどよ。それでも飲めよ」

そういつて火酒をよこす。数日の猶予前のお目覚めのご褒美ということか。

カイル

「悪いな。今は飲めない。話すことが終わったらいただくとする」

そこで扉を叩く音。ジークの「入れ」の一言で扉が開かれる。そこには紙に書いた人間、5人がいた。部屋には俺とジーク、そしてエリス、フィオネ、リシア、コレット、ラヴィの7人が揃った。真っ先に口を開いたのはコレットだった。

コレット

「カイル！今まで何を休んでいたんですか。皆があなたを必要としているときに！」

ラヴィリア

「こら。コレット！カイル様の気持ち分かるって言ってたでしょ。そのような責めるような言葉はよくありません。」

エリス

「…カイル…怪我は？」

カイル

「心配かけてすまない。怪我はない。突然呼び出してすまなかった」
ジーク

「おいおい。ここは最高級娼館か？カイルも物好きだな」

フィオネ

「リシア様に向かって…」

リシア

「よい、フィオネ。話の本質を見失うと戻るのが面倒だ。流すのだ。さつそくで悪いんだがカイル。話を始めてくれないか。この時を全ての民が待っているのだな」

カイル

「ああ…さつきも言ったが、国政に関わることも含めて俺の目で見たことを全て話す。問題ないか」

リシア

「同じことを言わすな。もう隠し事は必要ない」

ジーク

「よく言うな」

カイル

「ジークも頼む。喧嘩を売らないでくれ」

ジーク

「ああ、わかったわかった」

カイル

「最初に言っておきたい。これから話す事実はそれぞれにとって辛いものになる。この場は会議ではない。離れても構わない。数分待つ」

だが、誰もこの場を去ろうとする者は現れなかった。カイルは全てを話す覚悟を決めた。この中で最も事情が呑み込めていないのはフィオネとエリスだろう。その2人にも伝わるように事態の最初から

話した。ノーヴァス・アイテルが聖女イレヌの力で浮いていた訳ではないこと。初代聖女イレヌが天使となり、ノーヴァス・アイテルを浮かせていたこと。羽狩りが行われたのは執政公の研究によるものであること。大崩落は執政公の故意的なものであること。まずは全員がリシアと同等の状況把握ができる位置まで一気に話した。思い思いのところでそれぞれがやはり信じられないと声を漏らした。初代イレヌの存在とその待遇を聞いてはやはりコレットが最も堪えた。自らは心からの信仰をしていた。きっとその信仰心は初代イレヌの心にも響くほどの敬虔なものだろう。だがそのコレットの純粋な信仰心とは逆の心が天使の心を曇らせ、絶望させ、天使に世界の破壊という選択をさせた。きっと初代イレヌも今のコレットのような存在だったに違いない。ではコレットが初代イレヌのように鎖で繋がれたまま何百年も時を過ごしたら？その時出す答えは初代イレヌという天使と同じものだろうか。

羽狩りの目的が治癒や住民の安全確保のためではなく、人体実験の為に知ったフィオネは唇を噛みしめ、泣いていた。最初は家柄の為にだったかもしれない。次は誇り高い家族のためかもしれない。住民の為に日々口にしていたことにも偽りはないだろう。ただただ真っ直ぐに自分の信じた道を疑うことなく、人の為に尽くした女性。だが事実は人の為ではなく、一人の私欲による実験の為にだった。声を押し殺して涙する彼女にかかる慰める言葉は誰も持ち合わせてはいなかった。

大崩落が人為的なものであるという事実は全ての人間を驚愕させた。中でもジークの怒りは凄まじく、あの冷静な男も机を蹴り、力イムを殴りつけ、リシアにも罵声を浴びせた。冷静になるまで殴られながらもカイムは押さえつけ、ようやく静かになった。だが誰もジークに非難の目を向けるものはいなかった。当然の怒りだ。人は祈りを怠った「イレヌ」という生贄のせいにして落ち着きを保っていた。イレヌが生贄という事実だけでも狂うほどの恐怖なのに、それが一人の欲深い男のせいで大崩落が行われていたとなると、理

性は保てない。ましてや牢獄の王。牢獄では残虐非道の行いをしていてもそれは規律の為。牢獄人の様々苦しみは誰よりもしっかりと目に焼き付けていた。この感情が最も分かるものはカイクしかない。だからこそジークはカイクにあたることができ、カイクによつて冷静さを取り戻せた。

カイク

「ここまでではリシアも知っている。もつとも知ったのは俺と同じでつい最近だ。リシアには責められるだけの時間はなかったと俺が保証する」

皆がそれぞれの感情を抱え、どうすればいいのか分からなくなっていた。

カイク

「ここからは俺しか知らないことを話す。少し休憩しよう。またこの場を離れたくなったものが居ても止めない。責めない」

誰も何も話さない。唯一の言動は皆を気遣い、リシアが召使に茶を用意させただけ。当の本人も知っていたとはいえ、やはり恐ろしい事実を目の前に突きつけられると身震いをした。悪魔となったギルバルトをここまで放っておいてしまったことにはやはり責任は感じる。自分は王だ。幼かったなど言い訳が通用するはずがない。

エリスは相も変わらず、古井戸のような瞳を空にぶかぶかさせていた。何か考え事をしているようにも見え、考えていないようにも見える。だが不快感をまとうているのは間違いないだろう。長い付き合いのカイクでなくても話の内容が内容だ、それくらいは分かる。多くの怪我人を生み出した元凶について、ジークに劣るとも言

えない感傷はあるだろう。医者には常に死が纏わりつく。助かる命の為には放置しないといけない助からない命もある。その助からない命から懇願の声をかけられても一人でも多くの者を救うためには耳を塞がなくてはいけない。場合によっては安楽死も必要になる。そういった残酷な選択を何度も自分に強いてきたのは一人の狂人によるものだ。いや狂人ではなく、ただのひと、か。

ラヴィリアも恐怖している一人だった。自分は特別な存在ではない。武力も権力もない。信仰心ならばコレットに負けないだけのものが自分にあるという自負があるとはいえ、コレットの立場は救世主様。最も一般的な庶民の立場。庶民と違うところがあるとすれば、それは信頼できる仲間だろう。コレットは勿論、娼館の娼婦達にも良くしてもらってる。その信頼関係があるかないか、それによってやはり力なく横たわっている現在の多くの民と同じになっただろう。この事実を多くの人が受け入れるためには自分は何ができるだろうか。あまりに自分の存在・力が弱い。恐怖の中にそういった悲しみもある。

ジーク

「おい、カイル。やっぱ火酒返せ」

カイル

「これはご褒美じゃなかったのか？」

ジーク

「火酒も今一番飲みたがってるやつに呑まれたいにきまつてる。あとでやるから今よこせ」

リシア

「酒ならば王宮にもある。それを出そう」

ジーク

「上質の酒は牢獄民には合わない」

リシア

「そうか…そうだった『牢獄民』といった分類も消さなければなら
ジーク

「よく言っぜ。国が造った仕組みだろ」

カイル

「だからよせ。そろそろ続きを話す。いいか？」

それぞれがそれぞれらしい態度で肯定を示す。これからの話の悪役は俺か。今まで散々ギルバルトを元凶としたが、これからの凶は俺になる。それを受け止めるくらいの覚悟は朝に済ませた。問題はそんな俺にここにいる者達は力を貸してくれるかということだ。

第三章 事実（後書き）

今、第五章の途中まで書きました。

本当はこれを二話位で済まそうとしてたんですが…

やはりキャラクタ全員を生かそうとすると難しいですね。もっとも自分の腕で生きているとは言い切れませんが…

自分で生み出したキャラクタではないので、尚更難しいです。

毎回、それぞれの立場に頭を切り替えて考えてます。

趣味の読書の代わりに書く側を試してみました。が難しいですね。

自己満足作品とはいえ、人に見られるもの。校閲してキャラクタのイメージが変わらないように吟味しています…

変わってしまったらこの作品は読まないでください。オフィシャル作品の話・イメージを大切にしてください。

第四章 自責

第四章 自責

カイル

「まず初めに、それぞれがどこまで知っているか知りたい。反乱軍・国王軍と分かれてしまったが、双方に独自の情報はあるのか」

リシア

「それはこれから話し合いの場を設けて交換したいと思っておる。まずはカイルの話が先だ」

コレット

「そうですね？ 私たちは獣のような女性については何も知りませんが…それはこれからカイルさんがお話ししてくださることでですか？」

カイル

「獣のような女性…」

コレットの言葉で明らかにフィオネが反応した。リシア以外皆がフィオネを見る。

フィオネ

「すまない…隠しだてはしたくないが今はカイルだけ話す」

ジーク

「この場に及んで内緒話か」

フィオネ

「申し訳ない。個人的な理由でまだ話す気持ちの整理ができていないんだ」

カイル

「俺からも頼む、ジーク。どうやら俺の知らない話のようだ」

ジークはチツッと舌打ちをし、フィオネはカームに近づき片膝をつく。唇が近づいてくる。真っ白で蒼白な顔をしていたフィオネに対し、カームは不覚にも「綺麗だ」と思ってしまった。そんなことを考えているうちにフィオネはそつと耳打ちしてきた。一言だった。

フィオネ

「恐らくシステイナ殿が兄と同じに…」

カームは直ぐに理解した。システイナ・アイル。リキウスに忠誠を誓い、恐らく慕っていた女だ。その真っ直ぐさはフィオネに似たものがある。その彼女がリキウスの為にあのガウ・ルゲイラと同じになっても不思議ではない。フィオネはそのまま下を向き、自席に戻って行った。

カーム

「システイナはどうなった」

フィオネ

「彼女は死んだ。数十人掛かりでやっとで止められた。命までは救えなかった」

カーム

「そうか…」

あの薬、福音を使っただけ、どの道彼女は永くはなかっただろう。ルキウスの死を見なかっただけ幸せな最期だったのかもしれない。いや、彼女はルキウスの右腕、それ以上の存在だった。ルキウスの死も感じていたのだろう。

カーム

「システイナというのはルキウス卿の忠実な副官。これからの話にも繋がる」

ジーク

「ではお嬢さんの隠し事とは？」

カイル

「それは本当にフィオネの個人的なことだ。これからの話としては必要ない情報と思ってくれていい」

最もフィオネの兄は黒羽にされてしまい、多くのジークの部下を殺した。精神錯乱状態であつたとはいえ、その事実がジークに入ればフィオネは忽ち目の敵にされてしまうだろう。無用な騒動は控えなくてはならない。

カイル

「今まで元凶はギルバルトと話していたが、これからの話では俺だ。恨まれてもこの場で殺されても仕方がない。けど最後まで話を聞いてほしい」

皆が各々の反応を示す。あのギルバルト、狂人とこの信頼している青年が同じ。その一言は衝撃を与えるも、なんの実感もないものだった。

カイルは続けて話した。まずは福音のこと。黒羽、ガウ、システイナと3人が服用したものは天使から実験で採取した福音と呼ばれるもの。それは普通に飲めば即、死に繋がるが、実験で成功したものは人間とは思えない力を得ることができ。最も命と引き換えだが、そしてルキウスが自分の兄であることを話した。そのルキウスは少しでも多くの命を助けるために自らの手で崩落を起こして人々を殺めたこと。そしてそのルキウスにくつつくだけの人形のような自分がいたことも晒した。「これからの浮遊都市」には初代イレエヌのような生贄にティアを捧げなければいけなかった。必要不可欠な現

実であり、またそれを拒めが全ての人間が死ぬ。そうした状況の中、それを『選択』もせずにルキウスの言葉にただ首を振って自分を納得させていた。

しかしやはりティアを見捨てることはできなかった。自分の命よりも、全ての人間の命よりも…つまりここに居る信頼できる仲間よりも一人の少女を選んだ。世界が終ることも分かりつつ、そうなるように『選択』した事実を告げた。彼女を、ティアを愛していたから。その『選択』によって「兄ではない」ルキウスと殺し合い、結果殺したことも告げた。

そしてティアも初代イレートの言葉によって一度は人間の滅びを願ってしまったという告白も皆に伝えた。だが最後はやはりティアらしいティアに戻った。自らを犠牲にして浮遊都市の下にうごめく不浄なものの浄化をし、このノーヴァス・アイテルを落下ではなく、無事にこの地へ着陸させた。エリスに教えられたように、カイムは自分自身が後悔しない『選択』をした。そしてそのカイムの姿をみてティアはティア自身が後悔しない選択、つまり「愛した人に生きていてほしい」という選択をした。その結果が今の世界だ。皮肉なことに、カイムが愛した人が後悔しない選択をすることは、カイム自身後悔する選択をすることになった。最もカイムには選択の余地もなく、ティアが一方的にした選択だが…思えば彼女の最初で最後のカイムを困らせるほどの我儘だった。いや、困るといったレベルではないが。

ジーク

「つまりお前は女に溺れて全員皆殺しを選んだわけだ」

カイム

「…ああ」

ジーク

「…やっぱり変わったな、お前」

ジークはひとり言のようにポツリと言った。

エリス

「…小動物のくせに」

コレット

「…そのような事実の上で反乱を起こした訳ではありません。その事実の上でまた信仰を考えねばなりませんね…最も事実を隠していたのは国王側だとは思いますが」

やはりコレットとリシアも対立構造にある。殺し合いをした軍と反乱軍のトップだ。ジーク同様、簡単に消える因縁ではない。

ラヴィリア

「ではコレット。貴方がカйм様と同じ事実を知っていたら、貴方は何ができましたか？」

コレット

「それは…」

ラヴィリア

「天使様を救えば世界が滅びる。その現実の前に身を置いても国王様を責められますか？」

コレットは黙ってしまった。ここに居るのは人間。普通ならばこの事実の前ではギルバルトのように天使からエネルギーを供給して都市を浮遊させようとするだろう。豪悪な狂人とされたギルバルトと同じ行動。そして今や理性の悪魔とされてしまったルキウスの「選択」を誰も責めることはできない。なぜなら同じ人間だから。

ジーク

「で、俺らはお前を処刑すればいいのか？国を滅ぼそうとした罪人

として」

カイル

「それを望むなら避けられないのかも知れない。だが抵抗はする」

ジーク

「一度捨てた命にしがみつくなのか？お前らしくない…」

カイル

「やりたいことがある」

エリス

「小動物に造られた世界の平和？」

カイル

「そんな大それたことじゃない」

エリス

「じゃあなに？私たちに話して更に生きようとする。つまり私たちににかしと？」

カイル

「命令する立場にない自覚はある」

ジーク

「待て。何勝手に生きること前提にやりたいことなんてぬかしてやる。お前も組織にいた人間だ、落とし前という言葉は知っているだろう」

カイル

「分かっている。だが俺は殺そうとしてきた人間には抵抗する。殺す」

カイルとジークは刹那、睨み合う。互いに命を掛けて過ごした友人だからこそこできる睨み合い。心地よいものではないが、重要なものだった。そして決して答えを誤ってはならない瞬間。

カイル

「落とし前も分かるが、返礼の重要性も頭なら分かるだろう」

ジーク

「返礼？結果的に俺が世界を救ったってか。随分厚かましくなったな」

コレット

「違います。カイクさんが仰りたいのは天使様への感謝です。そうですね？」

カイク

「ああ。義を欠いた組織は潰れる」

ジーク

「ふんつ。上層に行ってから言葉が上手くなったな」

エリス

「…それで？小動物へのご褒美、考えているんでしょう？」

カイク

「ご褒美とは言わない。ただティアの救ったこの世界を知りたい」
リシア

「その言い方だと考えはあるようだな」

カイク

「ああ…」

ここから自分の技量が試される。みんな協力してくれるか。ジークとエリスが心配だ。後はリシアが国政と鑑みて協力してくれるか。フィオネは立場上ではリシアと同じ道になるだろう。コレットとラヴィは大丈夫だと思うが…

第五章　これから

第五章　これから

- - -
- - Another View - - -
- - - - -

???

「隊長、どうでした？」

笑顔の青年

「やっぱり大目玉だったよー。なんで調査隊の現地調査員がお前だ
けなんだって」

???

「だよなあ」

???

「やっぱり俺らも現地入りか…」

笑顔の青年

「それは大丈夫だよ！僕は上の言う事なんて聞かないから。現地は
僕だけでいいよ」

青年は楽しそうに今にでも鼻歌を口ずさみそんな雰囲気だ。とて
も上からお咎めを受けたようには見えない。

青年は想う。どうして無能の下について縛られなければいけない
？どうしてやりたい事をやらせてはくれない？命令するだけの人間
にはやる能力がないか、その気概がないかのどちらかだ。そんな人
間の指図は受けない。

???

「さっすが隊長！その懐の深さは噂通りですね。 ”無底の器”の異名は伊達じゃない！」

”無底の器”か…俺の事を精々頑張つて褒めた異名だ。影で何を言われてるか分かつてる。”無知の特攻隊員”、”食い散らかし”、”墓荒らし”どれもロクなものではない。最も陰口とは人が全力を使う事の一つだ。もっと酷い「異名」は自分の耳に入っていないのだろう。

???

「でもリアン、本当にそれで調査をやつていけるのか？公表では可能な限り人員を投入したことになるが…」

リアン、そう呼ばれた笑顔の青年は返した

リアン

「大丈夫♪大丈夫♪公表したのは上の人間だから。嘘が暴露て痛いのは自分達だからね」♪僕みたいに現地調査をやリたがる奴なんて代わりいないから！安心してよ」

???

「流石だな。その若さで隊長だもんな。有能だよ、お前は」

能力で決められた立場じゃない。やりたがったのは自分だけ、やらせようとした人間はあらゆる姑息な手を使って避けただけ。それで決まった立ち位置だ。

リアン

「それでも暫くは動けないあゝ準備に時間結構かかりそうだし。早く散歩行きたいからみんなよろしくね」

それぞれが気だるそうな返事を返す。本当に面倒臭い。まあ、後の面倒を減らす為に準備は必要か。本当に早くここを出たい。死ねばいいのに。

「俺がしたいこと、頼みたいことは2つある。1つはこの大地の調査だ」

ロシア

なるほど、この点ではロシアとの協働は望めそうだ。危険すらある現地調査には当然軍を投入する。そこにフィオネがいる可能性も低くはない。

「食糧不足？聞いてねえぞ」

リシア

「すまない。早々に話し合いの場を設けて協力を仰ごうとしてたところだ」

ジーク

「配給が減ってきたんで、てっきりまた牢獄作りかと思ってたんだかな」

リシア

「もうそのような事はさせない。誰にも…」

ジーク

「いつまで王のつもりだ？国の無能さが証明されたんだ、王族も滅ぶべきだろ」

カイル

「ジーク、その考えは改めて欲しい。リシアはまだ戴冠したばかりだ。チャンスをあげて欲しい」

ジーク

「情だけじゃ組織はまとまんないんだよ！無能がのさばるとまた国がイカれる」

カイル

「確かに鼻屑目かもしれないが、リシアは無能ではない」

ジーク

「チッ！」

エリス

「政治の話は後にしてくれない？うんざりすることはもう嫌なのよね…」

部屋に沈黙が満ちるその前にコレットが口を開いた。

コレット

「私も天使様が導いて下さったこの世界に興味があります」
ラヴィリア

「そうですね。カイル様の目的と国の目的、教会との目的は全て一致すると思います。ここは互いに協力し合うのはいかがでしょうか？」

エリス

「宗教家は役に立たない」

コレット

「なんですって？」

ラヴィリア

「コレット抑えて。エリスさんの仰る通り、出来ることを考えないと行けません」

エリス

「分かっているじゃない。外に出ても邪魔なの。死体処理は受け付けないわよ」

カイル

「頼むから言い争いはやめてくれ」

コレットは納得いかに紅く膨れたまま無理に口を閉じた。エリスも何もなかったかのようにまたブーツと視線を宙に浮かせた。

リシア

「ともかくこの件は政治も絡む。この後の反乱軍含めた話し合いの場まで具体的な答えは待って貰えぬか？」

カイル

「ああ。分かっている。」

リシア

「カイルは頼みは2つと言ったな？もう一つはなんだ？」

カイル

「それは…」

少し間をおいて部屋の空気が静まるのを待った。

カイル

「羽化病について知りたい」

フィオネ

「羽化病！？」

カイル

「ああ。羽根付きが人体実験に使われたのは事実だ。そこで福音が作られたのも分かった。けど何故発症するのか、最期にどうなるのか、それはまだ分からない。勘でしかないが、天使とは無関係でない気がする」

フィオネ

「私も知りたい！羽根付きがどういう存在なのか、本当に伝染するものか知りたい。償いとしても…」

真っ直ぐ、瞳の奥で涙を見せながらも強い決心と共にカイルを見つめた。本当に彼女は洗練された剣のような心だ。曇り無く真っ直ぐした芯。

リシア

「確かにな…このまま意味も分からず羽根付きを隔離するのもな…」

ジーク

「おい、羽根付きどころじゃねえだろ。このままじゃ普通の奴も飢えて死ぬ。構ってられるか」

リシア

「ジークの言う事も一理ある。人体実験なぞ当然やめるとしても伝染の可能性がある以上、隔離保護を直ぐにやめるのは優先度としては高くない」

コレット

「貴方はまだ馬鹿なことを繰り返されるおつもりですか？羽根は天使様の象徴。天使様の御子かもしれません」

ジーク

「天使つてのは随分子作りが上手いんだな。娼館に来られたら商売あがったりだ」

コレット

「ジークさん、発言には気をつけてください。私達は天使様に生かされてるんですよ！」

ジーク

「イかすことならうちの娼婦の方が上手いな。なんなら男娼やろうか？」

カイル

「やめろ、ジーク」

ジーク

「分かった分かった。外部調査はともかく、そっちの馬鹿げた話はお断りだ。最もビジネスならまた考えるが」

カイル

「分かってる。2つの事、全てをみんなに押し付けるつもりはない。ただ可能なら協力してほしい」

外部調査ならジークやリシア、羽根付きについてはフィオネやエリス、コレット、ラヴィになら信頼出来ると考えて話した。協力するか判断はそれぞれに任せるしかない。皆考えこみ、再び沈黙に包まれる。

エリスやラヴィのような特別な地位に居ないものでも力になってくれれば心強い。それどころか医者と天使を崇める者。どちらも羽根付きについて知るにはこの上ない人材だ。コレットの再び天使の夢を見るという望みを懸ける訳ではないが、最も初代イレエに近い存在だと感じる。この3人には是非羽根付きについて調べて欲しい。最も伝染・死病の可能性も否定出来ない以上、危険な事に関わらせてしまうことになるが…

ジーク、リシアは外部調査については専門とも言える。むしろ互

いの利害が一致して一つの目的に臨むのは、今後の関係に喜ばしい結果を残せるのではないか、と言う期待も生まれる。リシアの言うように食糧不足も懸念される以上、リシアは動く。ただ問題は国王軍と反乱軍という立場により、2人の溝が深くなり更なる争いの懸念もある。一筋縄ではいかないだろう。

フィオネならどちらの件にも対応出来る。未知の外部調査としてならその剣の妙技を、羽根付きについては並々成らぬ気概はやはり心強い。彼女は一夜の侮辱から近づいた距離が一気に離れてしまった。しかし時間が流れる中で、彼女の俺に対する態度が軟化してるのは間違いないだろう。皆、協力してくれるかは分らない。けど手を差し伸べて貰えるなら俺も全力でその気持ちに答えようと思う。ティアが残してくれた命、ティアの残した世界の為に使って尽きるのなら構わない。きつとこの道で命を落としてもティアならぶりぶりしながらも許してくれるだろう。

カーム

「俺の話、頼みは以上だ。どちらの件も危険で難しいことだ。考えた上で…可能なら協力してほしい」

エリス

「カームはこれからどうするの？」

カーム

「俺の力1人では今は何も出来ない。今は国王軍と反乱軍の話し合いの結果を待つ」

リシア

「そうだな。ジーク、今日はもう日が暮れてきた。明日の朝に会議でどうだ？」

ジーク

「ああ。早い方がいい。もっとも会議なんて洒落たことないがそれは大目にみてくれ」

リシア

「一刻も争う。こちらで貴族を集める。国王側、反乱側の意見が共に生きるように半々になるように考慮しよう」

ジーク

「そうだな。そうならなきゃこっちは力に訴えるしかない」

明日、この国の方向が決まる。反乱軍の強い憎しみにより国が滅びるのか。それとも貴族に踊らされてまた牢獄が造り上げられるのか。その会議の方向を決めるのはリシア、コレット、ジークの3人になるのだろう。今回のこの場は良い方向へ進む作用があったのだろうか。逆に悪方向へ進むとなれば自分の責任でもある。自分の目的も難しくなる。

リシア

「カイルも当然出席するだろう？カイルなら中立として良い働きができると思う」

カイル

「いや、参加しない。確かに中立である自負はある。けど俺が伝えられることは、伝えるべきものへ伝えた。もう仕事がない」

リシア

「そうか…」

コレット

「こちらは私とラヴィリア、ジークさんが参加します。よろしいですな？」

ジーク

「ああ。俺もあんたらを救世主にした人間だ。発言権もあるだろうよ」

ラヴィリア

「私ですか？私は何も…」

リシア

「こちらはフィオネを参加させる。最も現地を見ている者としてな
フィオネ

「私ですか！？しかしそのような場合は慣れておりませんので…」

リシア

「慣れなどいらぬ。むしろそういった慣習は排除して会議を行う」

カイク

「俺からの推薦なんだが、エリスを参加させてくれないか。俺以上の中立として、戦場を見たものとして役に立つ」

エリス

「えっ…私？…面倒…」

リシア

「確かに。エリス、是非参加してくれ」

エリス

「…国王に言われたからじゃないわ。カイクが言うなら…その代わり、責任はカイクがとってね」

カイク

「責任をとれて…どうとればいい？」

エリス

「一か月、私が首輪付けて飼う」

カイク

「…」

ラヴィリア

「…かわいい…」

シーンとした。空気は少しずつ和らいでいた。それは楽しくて和らいでいったものではない。あまりにも堅く、苦しい話だった。その防衛として場は自然と和む方向へ流れて行った。人の無意識は分からない。くだらないことだったり、非情なことだったり。無意識の中で様々なことを考え、動いている。意識している時間と無意識、どちらが長いのだろうか。少なくとも無意識というのは人が生きる

ための防衛機能を持つ。その防衛が他者に惨い窮地に追いやることもあるが。

それぞれが自分のすべきことを考え、帰路についた。

最も帰路といってもフィオネには軍の指揮が、エリスには診断が、コレットとラヴィリアには信仰が、リシアには国政が、ジークには統制が、様々な仕事が待っている。例えば日が落ちてても。

カームは今自分だけができることがないと思った。人に頼んでおきながら

カーム

「ナイフでも仕入れるか」

次への準備だけは欠かしてはならない。

スピンオフ？ (栞) (前書き)

これはただのしおりで、後日にこのお話を書きます。

スピンオフ？（栞）

このお話は第五章・第六章間の話です。

スピンオフ？ 世界の実状

- - - 注意 - - -

- - -

ネタばれになりますので、内容は後に記載する

「スピンオフ？ 世界の実状」

に記載します。

通常は順次章毎にお読みください。

ネタを知った上でお読みいただきたい場合は、「スピンオフ？ 世

界の実状」をご覧ください。

- - -
- - -
- - -

第六章 都市

第六章 都市

今日か…国の在り方、方向が問われ、決まる日。まだどうなるかは分からない。貴族は今までが今までだ。保身に走るだろう。保身の為に今まで縋っていたギルバルトもルキウスももういない。また新たな有能な政治家がこれを機に生まれるのだろうか。それともティアの願いは虚しく、愚かな過去を繰り返すのか。

考え方は兎も角、自分の知っている中での有能者はリシアとジークのみ。その2人の正面からの衝突事だけは避けて欲しい。

朝、カームはまたルキウスの屋敷を出た。そしてなるべくノーヴ・アス・アイテルと外郭大地との境目を歩くようにした。下層の昔自分と兄が居た地、ルキウスとよく話をしていたあの場所へついた。

最初の大崩落が起きる前には自分の家が、その後はそこには空があった。そして今は遠くに草原が広がっている。高さは城以上、とてもここからは降りられない。その広がる草原からは不吉さも、また未来も感じられない。本当に漠然とした広さがあるのみだった。外殻大地では植物は生きて行けたようだ。では動物は？人間は？一瞬、メルトが生きている奇跡を考えた。しかしそれはないだろう。動物は分からないが、人間はあの不浄なものに殺されている。浮遊都市だった頃、この外殻大地には不浄なもので満ちていた。とても生きていると言う樂觀的観測は出来ない。ティアが起こした奇跡は大きすぎた。奇跡をこれ以上に欲張るとは…我ながらに強欲だ。

少し都市の中心へ向えば関所に行ける。反乱が起きた時、最も反

乱軍が勢力があつた時に集中的に狙われた場所。最も荒れた場所だろう。中心に向かい、遠目で関所をみる。入り口はとても形になってはいないが、建物としてはなんとか保っている。さも当然のように牢獄のような転がる人間は居た。牢獄が広がったと表現すればいいのか。まだ処理しきれしていない死体がカラスと犬の餌になっていた。飢えは着々と悪化しているようだ。あのカラスと犬もまた人間に喰われるのだろう。そうすれば間接的にも共食い。まさに地獄だ。

都市中心部から引き返し、再び外殻大地の方へ向かう。ノーヴァス・アイテルを沿うように牢獄へ向かうとなると、ジークを護衛して通ったあの道を使う事になる。

だがあの細道は崩落の衝撃のせいか、もう既になくなっていた。牢獄へは行けないが、都合よく外殻大地への瓦礫の階段となっていた。足場が危険で脆い事には変わりはない。意を決し、慎重にその階段を歩くことにした。

随分と時間はかかったが、暫くして外殻大地に足をつけることができた。ここが本当の世界、そして最下層であつた牢獄よりも下にある地。周りを見渡す。広々した草原が相も変わらず広がる。しかし視線の方向を変えれば遠くに岩場や森も見える。森があると言う事は食糧を得る可能性は非常に高くなる。動物もあり得る。リシアが食糧不足解消という視点で調査隊を派遣するならこちら、東側と言ふ事になるだろうか。

ここがティアが与えてくれた地…

想うところは再現なくあつたが、目的の為に都市の牢獄部へ向かつた。牢獄へ行く目的は3つあつた。1つはナイフの調達。しかしこれは下層で済んでしまった。こんな時期に商売をしている遅い奴はいなかった。ましてや武器。そこら中に転がっている。比較的綺麗なもので且つ自分に合ったナイフを選んで拾ってきた。牢獄に

着く前に満足いく品が揃った。

2つ目は火酒を買う為だ。ルキウスの屋敷にも俺の為にいくつか用意してあったが足りない。仕事をする上では火酒は欠かせない。

3つ目は安否・状況確認。絶望の可能性が高い以上、そこに転がっている人間同様、目を瞑りたかった。しかし昨日自分に頼んだ仲間はこれを持ち越えた。話が終わり、場が簡単な近況報告になったとき、如何に自分が腐っていたか痛感した。ジークがお姫様を送ろうとしたのも当然だ。頼む立場にある以上、自らの目でこの都市を確認しなければならない。

十分な用心をしたみま、都市の周りをぐるりと歩く。新しい世界の歩みは時間の流れを忘れさせた。どの位時間が経ったか分からない。しかし無事に何事もなく、恐らく日が最も高い所であろう時間帯に、牢獄へ？がる道を見つけた。その道は先程と打って変わって作られたかのように歩きやすい階段だった。と言っても瓦礫の積み重ねだが、意志をもって作られたかのような。そして上へ、牢獄についた所で不思議に納得をした。この道はメルトの酒場があった場所。天使の奇跡にしては小さいものだが、メルトの気遣いらしい、可愛い奇跡だった。

直ぐにリリウムに向かう。メルトの酒場とリリウムは近く、心の準備が出来ないままに着いてしまった。深く考えず、戸を開ける。開けたと同時に人影とぶつかりそうになる。

リサ

「わぁ！！」

リサだった。まずリサは無事だった。

リサ

「あつ！かいむゝ！！」

能天気な所はこの時でも変わらず、こちらもふつと気が抜ける。

カイム

「無事だったようだな」

リサ

「元気！元気！あたしの取り柄だもーん」

カイム

「それで何をやってるんだ？」

リサ

「ボスの命令でお医者さん！お医者さんって包帯まくだけじゃないんだねー！」

医者か…流石にこの生気ない都市の状況では勃つものも勃たないか。この状況化で娼婦に通常通り接待させるほどジークは馬鹿じゃない。

カイム

「オズはジークと一緒にだろう。クローディアとアイリスは？」

リサ

「クロねえはいないよ」

いない？

いない…

そこへアイリスが上から起きて来た

アイリス

「……不能野郎が勃つてる……」

カイル

「アイリス！クローディアは！？」

アイリス

「……いった……」

クローディアが死んだ？この3人娘のうち、1人でも生きていれば3人生きていると思っていた。だからリサの顔を見た時、どこかに安堵していた。

…クローディア

リサ

「もしもし？」

カイル

「……」

リサ

「あの…やっぱりカイル勘違いしちゃってる？」

カイル

「…えっ…」

リサ

「クロねえは元気だよ！今はボスと一緒に会議に出てるよ！聞いてなかった？」

カイル

「か…いぎ？」

リサ

「うん。オズさんと一緒に副官代わりだって。クロねえは頭いいし、貴族の弱みも知ってるからだってー」

カイル

「アイリス！」

アイリス

「…だから行った」

アイリスはくすりと笑う

アイリス

「…やっぱり不能野郎」

これ以上この場に居るのが面倒になりそのままリリウムを出た。
後ろから追いかけてくるリサの大声を無視して。

火酒はかなり高かった。酒場にも酒がない為、問屋に行ったがかなりの値段を吹っかけられた。やはり反乱が起きてから酒は作られていないらしい。しかも問屋の言うには最近では医療用アルコールの代わりにも使われ始めていてるようだ。このままでは酒も無くなるのは時間の問題だろう。

無事、牢獄での用は済んだ。取り敢えずは下層へと歩み始めた時、
見覚えのある背中が見えた。

- - -
- - E r i s S i d e V i e w - - -
- - -

今日、最後の患者。それは助からない患者。崩落によって落ちたであろう瓦礫はこの患者に容赦なく降りかかったようだ。出血も少なく、頭部への致命的な怪我はなかった。しかし内臓まで異物が刺さり、腐食していた。食み出た臓器は褐色して乾燥している。あの日から既に6日間。助からない者は既に旅立っており、この患者は永

らえた方だった。今日の死者は彼をいれて2人…

青年になりかけの男

「頼む…たす…」

エリス

「よく聞いて。貴方はもう助からない。腐食した腸はもう戻らないの。殺菌も無意味。受け入れて」

青年になりかけの男

「た…た…」

エリス

「ここに腐食金鎖特性の猛毒がある。これを吞めば楽になるわ。ここに置いておく。使うかは貴方が決めて」

一気に伝えることを伝え、毒を置き、直ぐに簡易診療所を出る。

何度味わっても最悪。私も彼も何も悪くはない。だが私はもう多くの死者から呪いを受けた。死にゆく者は何を恨めばいいか分からない。だから最期に目の前の私に呪いをかける。これも医者の仕事なのか。

カイル

「エリス！」

少し歩いた所で呼び止められた。聞き慣れた声。心地良さも感じる。呪われたばかりだから尚更清廉に感じる。

エリス

「…カイル？何してるの？」

カイル

「エリスこそ何をしてるんだ？もう会議は終わったのか？」

エリス

「ああ…あれ。面倒だから辞めた」

カイル

「…そうか」

エリス

「面倒だから辞めた、それだけ。でもこんな所で逢えるなんて運命ね」

カイル

「…ああ、そうだな」

エリス

「あら？いつもみたいに否定しないの？」

カイル

「心では否定してる」

彼のこういう隙が嫌。まだ自分が彼を求めているのが分かる。

エリス

「死体はいっぱいあるから実験して頭も専門にしようかしら」

カイル

「やめろ、患者が増える」

私は死ぬつもりだった。あの崩落と暴動中、私は勝手気ままに歩いていた。生きようとする意志はなかった。だからそんな私はこのまま死ぬものだと思ってた。そのため、遣り残しがないように急いで彼から自分を買った。それで終わり。そのはずだった。

運が良かったのだろう。怪我もせずはまだ生きている。意味もなく。多くみて来た患者の中には途轍もない生きる力というものを感じさせる人もいた。さっきの患者もそうだ。普通はもっと早く死ぬものだが、生きる。けど、それでも最後に彼は死んだ。そして死ぬ気だった私はまだ生きている。何も法則なんてない。

エリス

「それでカイムは何してるの？」

カイム

「酒とナイフと…後は様子を見る」

エリス

「ふーん…」

カイム

「昨日の事、考えてくれたか？」

羽根付きの治療のことだろう。当然考えた。答えは簡単だった。やることもない。死ぬのも構わない。なら暇を潰すつもりで彼になる。死も構わないから力になる。

エリス

「別に」

カイム

「そうか」

カイムの困った顔は好きだ。命令してもらった為に困らせたことがあった。怒らせる為に。けど、そんな理由がなくなっても困らせない。カイムが好きだから

エリス

「家に帰るの？ご飯作るうか？」

カイム

「いや、まだ上層でやりたいことがある。そのままルキウス邸に泊まる」

エリス

「そ…好きね、高いところ」

カイム

「俺は大崩落を味わった人間だが？悪いがもう行く。今度答えを聞かせてくれ。断りでも構わない」

エリス

「…うん」

そういつてカイムは身軽に瓦礫を越え、直ぐに見えなくなった。こつやつていつか本当に突然消えるのだろつ。そんな気がした。

- - -
- E r i s S i d e V i e w E n d - - -
- - -

関所を通り、正規のルートで真つ直ぐ城に向かう。もう下層や上層に乞食が居ることには慣れた。元下層民と思われる者はまだどこか恥じらいが見える。ここも牢獄のようになるのか、それは今日の会議次第だろつ。

城に入つて既に歩き慣れた通路を歩く。奇跡が起こる少し前は良く歩いていた通路。そしてティアに会うべきか葛藤した通路。2、3人の兵士とすれ違い、頭を下げられる。みんな覚えているようだ。大きな扉を開け、また外に出る。前にここに来た時はこの道の先に塔があつた。あの時はただただ間に合うように、ティアの事で頭がいっぱいになって走つた。

元塔だつた瓦礫の山に着く。不思議なことにルキウスの剣は瓦礫に埋もれることなく、おかげで直ぐに見つかった。その剣を地面がむき出した地に突き刺す。遺体はあるだろつか。不思議とない、と思つた。

カイム

「怒られるとは思ったが、勝手に部屋を漁らせてもらった」

ブローチを取り出し、剣にかける。

カーム

「俺の代わりに謝ってくれ。雨の日の友に」

そして酒をかけた。

ルキウスの酒の好みは知らない。だから牢獄の味、俺の好きな火酒がいいと思った。兄には上質のワインは似合わない。

少し感傷に浸り、再度瓦礫に向かう。ティアの遺体が無いことくらいは分かる。けど何か形見でも、できたらあの時喜んでくれた首飾りがあつたら。そういった想いで探すだけ探したかった。

夢中になって瓦礫の山を崩していた。もう完全に日は落ちていた。気づけば身体はもうガタガタに疲れていた。また時間をみつけてくる、そう心に呟いて城へ戻った。

今日の会議の結果が知リたかった。リシアはまだ起きているだろうか。すれ違った兵士にリシアについて聞いた

近衛兵

「リシア様は現在仮眠を取られております。お急ぎの御用件でしょうか」

カーム

「いや、いい。リシアから話が聞きたかった。明日また出直す」

近衛兵

「出したら早い時間の方がよろしいでしょう。会議はまた明日に続くとのことでしたから」

カーム

「そうか。分かった。ありがとう」

仮眠、か。本当にろくに休まずに政務に力を注いでいる。とても年下とは思えない。はつきりと尊敬できると言い切れる。尊敬？確かに間違いなくしている。けどそれだけじゃない。女としても…

疲れた。さすがに肉体労働は堪える。早く帰って寝よう。

第七章 会議

第七章 会議

朝、軽く身支度をして直ぐに登城する。やはりリシアが睡眠を削って職務に臨んでいるのに、自分ばかりのんびりと休む気にはなれない。

城の中は朝だというのに慌ただしかった。何かあったのかもしれない。会議が一日で終わらなかったのなら当然と言えば当然かもしれない。見知った兵士が直ぐに近づいて来た。

近衛兵

「カイクさん。お待ちしていました。リシア国王陛下からお手紙をお預かりしております。どうぞ」

そういつて兵士は一礼し、直ぐに定位置に戻って行った。手紙は簡単なメモの様なものだった。

リシアの手紙

「少し立て込んでいて面会は難しい。すまない。昨日の会議についてはラヴィリアに聞いて欲しい。彼女は本日の会議には参加しない。」

なるほど。早急にこちらに会議の内容を伝えようとしてくれる意思を感じる。とにかくラヴィの所へ向かうのが第一のようだ。カイクは入ったばかりの城を後にする。

- - - - -

- - Lavria Side View - - - - -

汚い少年

「姉ちゃん、お腹すいた。死にそう。食べ物くれよ。もう何日も食べないんだ」

ラヴィリア

「ごめんなさい。これは貴方にはだめなの。広場で配給してるからそちらからいただいてね」

汚いの少年

「もう、歩けないよ。頂戴」

ラヴィリア

「貴方は頑張ってる。それは天使様も見えて下さるわ。けど貴方よりも苦しい人もいっぱいいるの。貴方は歩ける。だから広場でもらって、ね？」

言い終わるか否かのうち、少年は懷からナイフを取り出し、斬りかかりにくる。だがそのナイフも直ぐに宙に浮いた。

フィオネ

「動けるようだな。広場へ行ってくれ」

汚い少年

「クソ、死ね」

そう言つて少年は路地裏に逃げ出した。

ラヴィリア

「ありがとうございます。フィオネさん。助かりました」
フィオネ

「いや、手伝ってもらっているのはこっちだ。礼はいらない。しかもう少し用心しないと手遅れになるぞ？」

ラヴィリア

「はい…ご迷惑にならないよう、気をつけます」

私は少しでも役にたっているのだろうか。昨日、フィオネさんに配給の手伝いを申し出た。最初は危険であること、報酬を出せない事を理由に断われた。しかし私は無理を言って手伝いの許可をいただいた。配給というのは食糧が抜かれる可能性がある以上、信用されないとしてもさせてもらえない。だからフィオネさんが受け入れてくださった時は本当に嬉しかった。

でもやはり現実には優しくはない。天使様の御言葉を少しでも多くの人に伝えたいと思っても皆受け入れてくれない。罵られる事がほとんどだった。こんなにも大きな天使様の奇跡を目の当たりにしているのに、人々にはまだ信仰の気持ちは生まれてくれない…焦ってしまう。でも先ずは信じてもらえる様に皆様の代わりに私が信じなければ。それが私の出した答え。

フィオネ

「私達の担当はもう少し奥だ。危険な所でもあるから本当に用心してくれ」

ラヴィリア

「はい」

配給は広場で行われる。そこに人々は集まり施しを受ける。配給する者は相手の腕の焼印を確かめる。一日に何度も配給を受けようとする者の対処として2、3日で消える軽い焼印が使われる。今日の焼印がない事を確認し、今日の記号を焼印する。そして配給する。その繰り返しである。

動けない者の為に食糧の配布も行っている。それが今のラヴィリ

アとフィオネの仕事である。危険な場へ行く事も多い為、本来ならば腕に覚えがある者が担当することになっている。ラヴィリアは自らフィオネの荷物持ちを願いでた。迷ったフィオネも昨日見せられた彼女の頑固さから直ぐに受け入れた。荷物がなければ身軽になれる。そういった意味では彼女は戦力ともなれる。

配布者は全く歩けない者以外の配布は避けるように言われている。代わりに広場で配給をしていることを伝える。これらの仕組みは全て国王リシアが考えたものだ。

ラヴィリア

「本日の配給分は半分になりました。この分ですとこの区域の方には行き届きそうですね」

フィオネ

「そうだな。しかし足りなくなる日も遠くはない。その時の配給を与える者の峻別を行うことを考えると頭が痛いな…」

ラヴィリア

「そうですね…食糧を与える者、与えない者。天使様のお力もない私達にはその選択は荷が重すぎます」

人影がサツと現れ、フィオネは直ぐに構えた。しかし直ぐに緊を解いた。

フィオネ

「カイクか…驚かすな」

カイク

「勝手に驚いたんだろ。それより搜したぞ」

フィオネ

「私に何か用か？」

カイク

「いや、フィオネでも構わないんだが」

そう言ってリシアの手紙を見せる。

フィオネ

「なるほど。わかった。ラヴィリア殿、カイルに付き合ってくれ」

ラヴィリア

「はい？どのようなご用件で…」

そう言いかけたラヴィリアにフィオネは手紙を渡す。

カイル

「フィオネならここが牢獄の危険な場所だということ位分かってる
だろ？腕が立つフィオネは兎も角、ラヴィまで連れ出すのはどうい
うことだ」

カイルの言葉が耳に入り、慌てて説明する。

ラヴィリア

「違います！私が無理を行って連れて来て頂いたのです。フィオネ
さんは悪くありません。」

カイル

「ラヴィはいいから手紙を読め」

ラヴィリア

「しかし…はい。」

手紙には昨日の会議の内容をカイル様にお伝えする旨が書いてあ
った。そうだ、リシア様はなるべく早く動くようにと仰っていた。
私1人では難しいけどカイル様となら…

ラヴィリア

「お手紙、拝見しました。しかしまだお仕事が…」
フィオネ

「どちらが優先度が高いか分かるだろう。おかげで荷物がずいぶん軽くなった。礼を言う」

ラヴィリア

「そんな！私何も…」

カイル

「ラヴィ、いくぞ。フィオネも気をつけてな」

フィオネ

「ああ。カイルもな」

そう言っただけでカイル様に強引に連れ出されてしまった。『報告とは言えカイル様と2人になれるのは嬉しい。いつ振りだろう。』

ラヴィリア

「あの…どちらへ参るのですか？」

カイル

「ラヴィの家でいいか？酒場で話す内容じゃないし、俺の家は客を入れる状態にない」

ラヴィリア

「はい、構いませんが…コレットは会議ですよ？」

カイル

「それはそうだろう。それがどうした」

ラヴィリア

「いえ、何も…」

そうは言っても意識してしまう。カイル様と家で2人つきり。教会の一室で2人とは違う気がする…

直ぐに家についた。少し不審な動きを交えながらラヴィリアは鍵を開ける。質素だが綺麗な部屋が見える。部屋に入るとラヴィリア

はカームに席を勧め、すぐにお茶を用意した。そしてラヴィリアも席についたのを見計らってカームは直ぐに尋ねた。

カーム

「早速だが、会議の結果を教えてくれ」

ラヴィリア

「はい。ですがどこから話せばいいか…」

カーム

「ではラヴィ、コレット、リシア、ジークの処分について教えてくれ」

ラヴィ

「は、はい。まず私は何も問題にもされませんでしたよ」

聞くとリシアもジークもやはり矢面には立たされたが、お咎めなしのことだった。国王側の貴族はジークの危険性を訴えたが、反乱軍側全員が反対。それにリシアも反対に着いたことで、不問とされた。リシアも同様に反乱軍から無能さを指摘され、処刑を訴えられたが、貴族とジークの反対で免れた。しかし全面的な改革を約束させられた。後にリシアに聞けば、自分の処刑に貴族が反対したのは今の自分の地位が揺るぎ兼ねないからだという。信頼ではなく、保身での不問にやはり肩を落とした。最も危なかったのはコレットだという。死を偽ったことに加え、その後偽りの救世主まで演じている。反乱軍側からも非難の声がでた。しかしここをリシアとジークが協力して不問に導いたという。かなり強引な方法をとったようだが、2人が協力してコレットを助けたようだ。

カーム

「そうか。とりあえずあの2人が協力し合えたのは大きいな。その他にどんな事が議題にあがった？」

ラヴィリア

「やはり一番大きな議題は食糧不足でした。後はこの外郭大地についてどうするか…他にも農園の外殻大地開拓などもいろいろと上がりましたが、一番は外殻大地への食糧調達の検討でした」

リシアが一部の貴族に準備させていた事もあり、今日にも第一弾が出発するらしい。カイルが眺めたように東の森を目指し、食糧になる物の収穫を第一にした調査だった。その後、順次北、西、南と方角を変えて調査にでることだった。そしてリシアの頭にはカイルも調査要員として入っているらしい。自分から言ったことだから何も問題はないが、しっかりと働かせるところがどこかリシアらしい。

ラヴィリア

「それとただの噂なんですけど…何人もの方から大きな鳥を見たという報告があるようです」

カイル

「鳥？」

ラヴィリア

「はい。かなり遠くでもはっきり見えたのでそれなりの大きさだと真っ白で真っ直ぐ北へ飛んで行ったようです。噂とは言え新しい世界ですから。何があるか分かりませんね」

カイル

「確かにな。本当なら新しい世界に動物がいるということになる。それ次第で大きく変わる」

ラヴィリア

「そうですね」

カイル

「他に議題は？」

ラヴィリア

「決まった議題は以上です。あとこれはリシア様から直接承ったお

カ
イ
ム

「そうか。ならこれから見に行く」

ラヴェリア

「私もお供してもよろしいでしょうか？」

カ
イ
ム

「協力してくれるのか？」

ラヴィリア

「お力になれるかは分かりません。ですが、カイク様にも御子様にもいつも助けられました。出来ることはなんでもしたいのです」

私は少し前まで羽化病にかかっていた。発症したのはもう少し前だが、自分で自分の羽根を切り落として隠していた。少しでもコレットの付き人である為に。コレットに教会の破門を言い渡された時、私はいつもと変わらずに自分の羽根を切り落とした。しかしいつもより大きくなつた事もあり、出血が酷く、死も覚悟した。それを救つてくれたのはカイム様と御子様。お二人には返しきれない感謝がある。私の微弱な力も求めて下さるのなら何も考える必要はない。けれど本当のことを言えば感謝の気持ちだけではじゃない。親愛の気持ち……私は確かにカイム様をお慕いしている。

ラヴィリア

「治癒院の場所は聞いております。ご案内します」

-	-	-
-	-	-
-	L	-
-	a	-
-	v	-
-	r	-
-	i	-
-	a	-
-	-	-
-	S	-
-	i	-
-	d	-
-	e	-
-	-	-
-	V	-
-	i	-
-	e	-
-	w	-
-	-	-
-	E	-
-	n	-
-	d	-
-	-	-
-	-	-
-	-	-
-	-	-
-	-	-

第八章 治癒院

第八章 治癒院

茶を飲み干し、ラヴィの家を出る。そしてそのまま真っ直ぐと下層にある治癒院を目指した。関所の前の広場に目をやる。本日の配給は終わったようで、片付けている。配給所の近くには強奪されないように配備された軍人が多く見かける。

治癒院はノーヴァス・アイテルの端に位置していた。都市が浮遊していた頃、治癒院の奥側は空だったに違いない。恐らく羽根付きが逃げないよう、牢屋としての機能を果たす為に敢えてこんな危険な場所に建てたのだろう。だが外観は下層一般宅よりも綺麗だ。

見なりが整った兵士

「申し訳ありません。ここは治癒院になっておりまして、一般の方は危険な為、立ち入りできません」

ラヴィリア

「私はリシア様から立ち入りを許可されたラヴィリアと申します。

こちらはカйм様。同様に許可を頂いています」

見なりが整った兵士

「確かに二人のお名前はお聞きしています。どうぞ、お通りください」

カйм

「少し聞きたい。あんたはこの門を任されて長いのか？」

見なりが整った兵士

「1年程になります」

カйм

「ここを通れる者はどのような者だ？」

見なりが整った兵士

「以前までは羽化病治療を行う医者、それと元執政官の研究員の方々だけです。防疫執行部の者も中には入れない様、指示をされていました。今ではロシア様の許可がある者数名が出入りしています」

カーム

「そうか。ありがとう」

当然と言えば当然の答え。この男はここが牢屋であることも知らないのかもしれない。当時、内情を知っていたのはギルバルトとその配下の研究医者のみか。研究員、即ち城の塔でティアを研究していたものは皆崩れ落ちた瓦礫の下敷きになっていた。ティアのアクセサリを探した時もいくつか死体はでてきた。

カーム

「いくぞ、ラヴィ」

ラヴィリア

「はい。では失礼します」

律儀に兵士に頭を下げてラヴィは駆け足で追いかけてきた。入ると真っ白な綺麗な通路になっていて、直ぐ垂直に左右に道が別れていた。

ラヴィリア

「中也綺麗ですね」

カーム

「どうかな」

別れた道を意味も無く右を選ぶ。すると直ぐに扉がある。振り返ると左の道も同様に扉になっていた。開けると案の定、腐臭が鼻をついた。傍のラヴィは「うつ」と小さな呻き声をあげる。ここまでの外観は外から覗かれても実情を分らないようにする為。扉は臭いを防ぐ為の蓋。徹底した隠蔽だ。

少し道を行くとすぐ両側が檻になっており、多くの人影が見えた。確認の為に近づこうとすると大きな声が聞こえた。

柄の悪い医服の男

「おい、お前。何の用で来た？」

カーム

「国王の命で調査に来た」

柄の悪い医服の男

「また国王かよ。今まで放ったらかしたくせによ」

ビクビクしていたラヴィリアは意を決し前に出る

ラヴィリア

「あの！お聞きしたいんですが：こちらでどの位働いていらっしゃるんですか？その：感染しないんですか？」

柄の悪い医服の男

「ああ？知らねえ。もう2年になるが羽根なんて生えてこねえよ」
カーム

「あんたは看守か？」

柄の悪い医服の男

「お前、面白いこというな！そつだよ、俺は元死刑囚の看守だよ。死んでもいい人間さ」

充分予測出来た人材だった。研究員ならまだ金で作れただろう。

しかし看守となれば付きっ切りだ、誰もやりたがらない。そうなれば無理矢理やらせるしかない。人材としては死刑囚が一番手っ取り早いだろう。

柄の悪い医服の男

「けど死ぬ覚悟決めりゃここは天国さ。女はやりたいやつやれるし、暇になれば適当に殴れる。殺さず死なれない程度に餌やってりや食いつぱぐれることもねえしな」

下卑た顔でラヴィリアをジトリとみる。ラヴィリアはコレットがいなければきつとこの男の玩具にされただろう。身震いした。

柄の悪い医服の男

「けど最近はそのも禁止されてな、お前らみたいのが抜き打ちで検査しやがる。もう羽根付きと遊べねえよ」

この男は地震は知ってるだろうが、浮遊都市が降りたことは知らないんじゃないだろうか。いい御身分もリシアが本格的に関わるまでだな。その後は遅れて予定通りになるだろう。死刑執行に

カーム

「羽根付きと話がしたい。ここに比較的長くてお前の玩具になってないやつと合わせてくれ」

柄の悪い医服の男

「やつぱりお前も検査かよ。その女は不細工だから弄ってねえよ。殴るなら男の方が面白いしな」

そう言つて束の中から1つ、鍵を渡す。

柄の悪い医服の男

「鍵は出入口に落としといてくれ」

一言そう言つて奥へ戻っていく。自分の告白が死刑に近づく事になること知らぬ阿呆か。それとももう死ぬ覚悟は出来てるのか。

牢の扉に鍵穴に差し込み、捻る。冷たい音が響く。牢屋にはベツトも手洗いもない。4人の羽根付きがいるが、1人以外反応を示さない。その1人がさっきの男が言っていた「不細工」なんだろう。さっきと打って変わりラヴィリアは積極的に前に出てきた。

ラヴィリア

「カーム様。私に話をさせてください」

カーム

「分かった。その代わり5分が出る」

ラヴィリアは最初は困り顔になったが、5分の意味が分かり頷く。感染を心配している。

ラヴィリア

「初めまして。私はラヴィリアと申します。少しお話していただけますか」

不細工と言われた女

「あ…貴方は…何をしに…」

ラヴィリア

「羽化病について調査に来ました。貴方がここにいる間、天使様がいらして世界が変わったんですよ。もう大丈夫。もっとここは良くなるわ」

不細工と言われた女

「ほ…んとう…ですか？」

ラヴィリア

「はい。ですから少しお話を聞かせてください。ここにきてどの位になるのですか？」

不細工と言われた女

「わか…らない」

ラヴィリア

「ではここに来る前、羽化病に感染するようなことをした覚えはありますか」

不細工と言われた女

「わか…らない」

ラヴィリア

「ではここで感染したお医者様などは…」

カーム

「もういい。いくぞ」

ラヴィリア

「まだ5分経っていません。もう少しお話をさせてください」
カーム

「無駄だ」

そう言つてカームはさつさと牢屋から出てしまふ。そうすればラヴィリアはやむ得ず付いてくることが分かつていたからだ。

カーム

「今日は様子見だ。一回りして直ぐに帰ろつ」

ラヴィリア

「はい…」

充分な警戒をして奥へと進む。先ほどの看守の様子では突然襲つてくるとは考え難いが、ここには自然と警戒させてしまふ空気があつた。羽根付きの緊張感が伝わってくるのだらう。ここにはそれ程絶望感を抱えた羽根付きで溢れている。さして歩かないうちに看守室らしき一室があつた。窓から中を覗くと、汚い事には変わりはないが、生活感は何うことが出来る。3人の看守が居て、中の1人は先程の看守だつた。再度話を聞こうかとも考えたが、あの話し振りで はまともに相手をしてはくれないだろ。2年もここに居た男が感染について「知らねえ」と答えた。それ以上の情報は望めないだらう。一室を通り過ぎるとまた通路の両側に檻が続く。檻の中にはどこも乾いた血がこびりついていた。奥から声が聞こえた。叫び声だ。用心したまま声の方へと進む。ラヴィリアをそつと見たが僅か震えていた。

羽根の小さな少年

「出してくれ！ここから出してくれ！頼む、助けて！」

変わり無く続いた檻の1つに絶望に叫ぶ少年がいた。涙を流す力とまだマシな肉付きを見るとこの日が浅いようだ。

カイク

「…ここにはいつから入ってる？」

叫ぶ事に夢中で気配を殺していたカイクに気づかなかった少年はビクリとする。

羽根の小さな少年

「あ…あんたは…」

カイク

「見ての通り看守じゃない。それよりここにはいつから入ってるんだ？」

羽根の小さな少年

「助けてくれ！殺される！俺をここから出してくれ」

ラヴィリア

「落ち着いてください。大丈夫。貴方には天使様がいる、守ってください。だから貴方は生きているのですよ。安心してください」

羽根の小さな少年

「天使…じゃあやっぱり本当にこの都市は落ちたんだな？」

カイク

「質問しているのはこっちだ。いつからここにいる？」

羽根の小さな少年

「分からない。ここには時間なんてないし、暫く気を失ってた。ただここに運ばれる時に空が昇って行くのをみた。多分都市が落ちた

時だと思っ」

じゃあ奇跡の日か。有益な情報はもってないな。さっさと行こう

カイル

「そうか。いくぞ、ラヴィ」

ラヴィリア

「少し待ってください！…貴方はもう大丈夫。貴方の見た奇跡の日から羽化病罹患者への接し方が変わったの。だから貴方の思うような怖い事はないの。心、静かに」

カイルは諦めてラヴィリアの気が済むのを待つ事にした。天使の存在を認めても信仰心はカイルに持ち合わせていない。ただ協力してくれる仲間の意志は尊重すべきと判断した。

羽根の小さな少年

「心、静かに…」

ラヴィリア

「そうです。貴方にはまだ未来があるの。だからその未来の為に天使様に祈ってください」

羽根の小さな少年

「祈る…」

ラヴィリア

「そう。助けくれたから天使様に祈るのではないのです。祈る者が天使様に救われるのです。来る未来の為に祈りを捧げてください」

羽根の小さな少年

「…祈るってどうすればいいの？」

ラヴィリア

「特別な事はありません。感謝の気持ちを持てばいいのです」

羽根の小さな少年

「感謝：分かった、やってみるよ」

カイル

「もついいだろ？行くぞ」

ラヴィリア

「はい、すみません。：私達は貴方を見捨てない。絶対に。だから待ってて」

そういったラヴィリアの手を引き無理やり場を離れた。また道を進むが階段と曲がり角があるだけだ。階段を使わずに道なりに進むと再度出入りに出た。どうやら通路が輪になる単純な作りなのだろう。その作りはまさに牢獄を前提として作られたものだった。複雑な構造は脱走者の隠れ場を提供することになる。

鍵を約束通り道の真ん中に落としておく。外に出ると日は完全に沈み、大雨になっていた。隣のラヴィを見るとまさにこの空のような表情があった。

カイル

「俺も今日は自分の家に帰る。家まで送ってく」

ラヴィリア

「あ：はい。ありがとうございます」

カイル

「さすがに外套はないな。濡れる事になるが、風邪ひくなよ」

ラヴィリア

「はい」

カイル

「そんな顔するな。あの叫んでた奴はあの中で一番幸せだ。そしてあそこにいる羽根付きも今までの羽根付きに比べれば幸せだ」

ラヴィリア

「いいえ、それは違いますよ、カイル様。一番幸せなのは御子様に救って戴いた私です。ですから私はあそこにいる方々を少しでも救いたいのです」

カイル

「そうか…そうだな。今のラヴィならできる」

ラヴィは崩れた瓦礫に何度つまづきながら必死に着いてくる。道の途中には相も変わらず人がゴロゴロ転がっている。暗闇で見えないが、この中の1つが死体であっても不思議ではない。以前の様な物取りから襲われることはなくなったようだが、今度は精神が狂った者が襲ってくるケースが増えていると聞く。命を考えずに襲ってくる分、こっちの方がたちが悪い。だが何事もなくラヴィの家に着いた。家からは光が漏れている。

カイル

「ラヴィ、着いたぞ。早く身体拭け」

ラヴィリア

「ありがとうございます。カイル様も是非寄って身体を温めてください。コレットも帰ってるようですし」

カイル

「身体拭いてもまた濡れる。さっさと帰る」

突然、ドアが開く

コレット

「やはりカイクでしたか！2人で雨にうたれて…早く入りなさい」
カイク

「お、おい」

有無も言わずに部屋の中へ引っ張られる。ラヴィリアはくすりと笑い、後から着いてくる。

第九章 信仰

第九章 信仰

朝起きると、いい匂いがした。机から顔を剥がすと目の前にラヴィの後ろ姿があつた。食事の用意をしているようだ。目を覚ますと食事が用意されている。それはエリスにしる、ティアにしる、当たり前の日々だったことがある。今も他の人に比べて充分幸せなのかも知れない。けど目を覚ました時のどこか心が温かくなる感覚を久しく思いだすと、あの時の方が幸せだったのかもしれない。例えば命がいつ失つてもおかしくない牢獄でも。気づいたラヴィはこちらを向く。そして申し訳なさそうな表情で言う。

ラヴィリア

「すいません。起こしてしまいましたか」

カーム

「いや、気にしないでいい。こっちは泊めてもらった身だからな」

昨日はラヴィとコレットに言い寄られ、結局ここに泊まることになった。確かに温かいスープをもてなされ、時間も遅くなると帰るのも億劫になる。だが女2人の家に男はまずい。最近は無沙汰でもある。やはり自分が面倒を起こさないように帰ろうとしたが、その気持ちを知ってから知らずか女2人は泊まるようにしつこく食いついてくる。結局妥協として寝室ではなく調理場で眠ることで落ち着

いた。

カイル

「コレットはまだ寝ているのか？」

ラヴィリア

「いえ、コレットは寝室でまだ祈りを捧げています」

カイル

「ラヴィはいいのか？祈りは？」

ラヴィリア

「私はコレットより早く起きてもう祈りを捧げました。私には食事の用意がありますから」

カイル

「しっかりしてるな。コレットを甘やかしすぎなんじゃないか」

ラヴィリア

「ふふ。そうかもしれませんね。ではカイル様、なにかコレットにお仕事をいいつけてください」

カイル

「そうだな……」

コレット

「何を勝手なことを言っているのですか。ラヴィ！」

カイル

「コレット、もう祈りは終わったのか？」

コレット

「おはようございます、カイルさん。朝からラヴィと悪いことを考えていますね」

カイル

「いや、別に悪いことは……」

コレット

「神聖な御祈りのお邪魔をすることは天使様への冒瀆ですよ」

ラヴィリア

「コレット、カйм様は天使様に守られた方ですよ。冒瀆なんてなさりませんよ」

カйм

「まあ、天使らしくない天使だったけどな。だが祈りと関係なく家事も手伝え。聖女じゃないんだからラヴィばかりに任すなよ」

コレット

「分かっております。水汲みと買い物は私の仕事です。しっかりと分担して働いていますよ」

ラヴィリア

「コレットも朝から怒らないで。朝食の用意ができましたからいただきます」

食事はラヴィお得意の香草料理だった。自分の一番の得意料理を俺に持て成してくれたのだろう。温かい料理というものも随分と久しぶりのもので、そこにさらに共に食事する親しい存在がいる。これが幸せというもののなのだろう。いつか自分にもこういう場が当たり前に感じる日は来るのだろうか。そしてその時隣にいるのは誰なんだろうか。いや、考えるのは止そう。

食事を終え、ラヴィリアが片づけを始めた頃、コレットに話を切り出した。

カイル

「では昨日お預けをくらった会議の話聞かせてもらおうか。何故会議は予定よりも長引いた？」

コレット

「それは国の構造を見直す為です。施策等のお話はその前日に一通り終わったのですが、今後も国王主導の政治にするべきかという意見が出ました。それで一日伸びただけです」

カイル

「今まで通りロシアが国王ではないのか？」

コレット

「結果からいえば今は現状維持で落ち着きました。人々が大変な時に政争を行っている場合ではありませんからね」

話の内容としてはこうだ。一部下流といえる貴族が国王を見直し、新しい政治をすべきだと発言をした。それにより権力が弱い立場の貴族と反乱軍の一部がそれに同調し始めた。

ロシア・コレット・ジークの主張としては「今はそんなことをしている場合ではない」の一言に尽きる。だが「全面的な改革」を約束したロシアの弱みに付け込み、この話を落ちつけなければ今後の施策に影響が出る状況となった。そこでジークは会議の延期を提案（脅迫）した。

そして翌日、ロシア、コレット、ジーク、保守派貴族とそれ以外の対立として国の形の見直しが行われた。貴族を知るロシアと言葉巧みなジークが改革派を抑え込む。だが今までの国の失策、そして隠蔽等を取り上げられるとすんなりとは進まなかった。本来ならば王族も滅ぶべきと主張していたジークも痛いところを突かれた。だが最終的には、ジークが出した提案にまとまった。「数力月は現状維持。そして少しずつ権限を削り、その間に国王が人々に認められ

る結果を出さなければ一貴族に格下げ」というもの。結局一番に勝ったのはジークと言えるだろう。ジークとすればまずは安定、そして無能の排除が目的。言葉を変えても結局はその目的通りの形に落ち着くことができたのだから。

コレット

「なのでしばらくはリシアさんが国王を務めることになりそうです」
カイム

「やはりジークの勝ちか。ずっと頭はついていたジークだ、経験はリシアよりも上か」

コレット

「気になることと言えば…ジークさんの副官をされていたクローディアさんが貴族の方に耳打ちをされてから随分とスムーズに話が進みましたね」

カイム

「…ジークには強力な武器があったな」

クローディアは上層貴族の弱み（性癖）を知りつくしている。体面を重視する貴族には最も危険な剣となるだろう

カイム

「だがコレットもよくリシアの味方をする気になれたな？」

コレット

「味方という訳ではありません。リシアさんも聖教会を見直し、新しい真の信仰を行うと考えてくださったからです」

カイム

「まあ、リシアとしても今までの教会には問題を感じているだろうしな」

コレット

「それに私の処罰に関して反対してくださった御恩もあります。私は恩知らずではありません」

カイル

「感情を政治に持ち込むのはどうかと思うぞ？」

コレット

「それは…」

カイル

「無理に理由づけなくていい。ただ単にリシアの能力の能力を見直したただけだろう」

コレット

「…」

肯定である無言で答える。とりあえずは良いところに落ち着いたということか。リシアは有能だが、やはり国王とした立場の方が活きる。俺にとっても都合がいい。最も都合だけでなく、感情的にも安心したのだが。

カイル

「さてと、俺はそろそろ行くとするかな」

ラヴィリア

「カイル様は本日どちらへ行かれるのですか？」

カイル

「そうだな…城の塔にある研究室でも漁ってみるか。この前見たときは瓦礫の下にいくつか書物があったからな。資料でもあるかもしれない」

コレット

「カイクさん、貴方も教えてください。昨日、治癒院へ行かれたのでしょうか？」

カイク

「ああ。それはラヴィに聞いてくれ」

ラヴィリア

「はい。配給のお仕事があるので、その後にコレットにお話しします」

コレット

「それではだめです。今すぐに聞きたいのです。私も羽化病については知りたいと、カイクさんに協力したいと考えています。ならばカイクさんの言葉からお聞きするのは当然ではありませんか」

ラヴィリア

「コレット。またカイク様を困らせるような言い方をして」

カイク

「まあ、確かに…協力してくれるならその方が筋が通るな。分かった、付き合おう。」

ラヴィリア

「よろしいのですか、カイク様。お断りしても…」

カイク

「コレットもラヴィも貴重な戦力だ。無碍にはできない」

コレット

「ありがとうございます。では少し散歩をしながらにしましょう」

ラヴィリア

「貴方の目的はそちらではないのですか？」

コレット

「そ、そんなことはありません！さあ、早く外の空気を吸いに行きましょう」

カイク

「ふう。わかった。ラヴィも気をつけるよ」

ラヴィリア

「はい。ありがとうございます。配給が終わったらまた少し治癒院へ行ってみたいと思います」

カーム

「治癒院か。今はそう、危険なところではないと思うが、暗くなる前に帰れよ」

ラヴィリア

「はい。お気遣い、ありがとうございます」

- - -
- C o l e t t e S i d e V i e w - - -
- - -

下層にある農園まで足を伸ばした。昨日の雨が嘘のように眩しく日が草花を照らし、雨露が輝いている。天使様の御力がなくなり、以前ほどの実りはなくなったという。けれどこうしてみるだけではそれは分からない。ただ気持ちの良い風が吹き、久しぶりにお慕いしている男性と2人で居る。一度失うことを覚悟した命でまたこのような感情が芽生えるとは思わなかった。

コレット

「カームさんと二人きりというのは随分と久しいですね」
カーム

「そういえばそうだな。あの頃は聖女とチェスという異例のお仕事をもらったな」

コレット

「ではあの時、私のお相手をするというお仕事が無ければ牢獄に帰られたのですか？」

カイム

「さあな、どうだろうな」

コレット

「あの時は結局一度も勝てませんでした。ですが今なら勝てますよ。アイリスさんと練習しましたから。今なら勝てる気がします」

カイム

「アイリスか…あいつに勝ったんならさすがに危ないな」

コレット

「いえ、勝ったことはありませんけど…。今度はお仕事としてはなく、チェスの御相手をしてくださいますか」

カイム

「そうだな。落ち着いたらな」

コレット

「私は勝つまで御傍にいますよ」

カイム

「相変わらず頑固だな」

コレット

「頑固ではありません！自然の気持ちです」

また、気持ちの良い風が流れた。

カイムさんの気持ちは分かっている。今でも心の中に御子が大き

く存在していることを。私が信仰し、尊敬し、親愛の気持を持つている天使様。しかし私は自覚している。その天使様に嫉妬していることを。誰よりも深く信仰し、天使様を守らなければいけないのに、カイルさんの中からは消えてほしいと思うずるい自分がいる。御子は大切な人の為に自らの命を捧げた。それに比べて私は大切な人を独占したいという気持ちを持っている。聖職者としては許されない感情。私が真の信仰に達する為の大きな試練。苦しい。聖女イレエヌとして祈りを捧げていたあの時よりも苦しいかもしれない。

カイル

「さて、治癒院の話だったな」

コレット

「えっ、あ、はい」

カイル

「話と言っても結局何も分かってはいない。場所と中の様子が分かっただけで、羽付きが天使と繋がりがああるのかも分からない」

コレット

「まだ数日です。そんなに早く神の御心はわかりませんよ」

カイル

「神、か」

カイルは手短に昨日の出来事を話した。治癒院が下層にあること、外層は綺麗だが中身は牢獄のようになっていたこと、そしてリシアが介入して看守によって荒らされていた秩序が回復し始めたことなどである。大した話ではない。何か情報を掴んだ訳でもないのだから。

カイル

「ただ一つ、気になることがある」

コレット

「気になる、といいますと？」

カイル

「2年もの間、看守は羽化病にかかっていない」

コレット

「まさか感染しないということですか？」

カイル

「そこまでは分からない。何せ普通の病気と違って天使が関与している可能性もあるからな」

コレット

「聞きますとその看守の方はとても信仰とは程遠いようですが…苦しむ病でしたらそのような者が第一に侵されるものです」

カイル

「残念だが信心深い人間でも残酷な人間でも病はかかる。コレットが熱病に襲われた様に」

コレット

「それはそうですが…でもカイルさんも天使様が関与している特別な病気の可能性もあると仰ったではありませんか」

カイル

「それは例えだ。もし信仰無いものが罹る病気ならラヴィは説明つかないだろ？それはコレットの方が分かるんじゃないか」

確かにラヴィの信心は私が一番良く知っている。私に信仰を与えてくれたのもラヴィ。聖女を譲ってくれたのもラヴィ。そして最後まで私の信仰を信じて守ってくれたのもラヴィ。ラヴィは決して天

使様から罰を受けるような人間ではない。

カイル

「説明が悪かったな。まとめるとだ、簡単に考えられる可能性は3つ。1つは通常の病のように唾液等の体液からの感染。2つ目は天使により峻別されて罹るもの。3つ目は感染ではなく、生まれ持ったの体質。そのうちの最初の2つは怪しいと俺は睨んでる」

コレット

「つまり感染しないということですか？」

カイル

「あくまで可能性の話だ。2年も看守が罹らないことを考えるとそれが自然だ」

コレット

「しかし生まれ持ったということはやはり天使様に選ばれてということになります。何故ラヴィは選ばれて看守は選ばれなかったのですか」

カイル

「天使からは離れる。遺伝的な病というのはある」

コレット

「カイルさんは羽化病と天使様に関係があるとお考えなのですよね？」

カイル

「あくまで可能性としてな。だから結局は何も分かってないんだよ。まずは感染するものかを知りたい。それからでないとコレットにもラヴィにも協力してもらえない」

コレット

「私は私の気持ちで羽化病と天使様に繋がりがあると考えています。例えば感染するものでも私の決意は変わりません」

カイル

「ふう…頑固な聖女は面倒だな」

コレット

「面倒、ですか…」

カイル

「勘違いするな。嫌っている訳じゃない。心配しているだけだ」

分かっています。カイルさんは優しいということ。分かっています。カイルさんは私たちの身を案じてくださっていることを。それでも私は退けない。天使様と繋がりが少しでもある以上、カイルさんの御力に少しでもなれる以上は。

カイル

「結局は想像の域はでない。結論は止そう。さて、そろそろ帰るか。俺は城へ行って書物を探してくるが、コレットはこれからどうするんだ？」

コレット

「私もお手伝い致します」

カイル

「気持ちは嬉しいが、コレットには無理だ。書物探しと言っても瓦礫除去の力仕事だからな」

コレット

「そうですか…では私は牢獄に行って信仰を広げて参ります」

カイル

「そうだな。天使が存在する以上、大事な仕事だな。気をつけるよ」
コレット

第十章 東の森

第十章 東の森

今日も1日を瓦礫撤去に費やした。昨日からコレットと別れてから城の研究施設があった場所で書物を漁っていた。第一の目的は羽付きの研究に関する書類等の収集だったが、やはりティアの首飾りは探してしまふ。ティアは自分の身体と共にあの首飾りももっていたのだろうか。最初はご機嫌取りに渡したものだだったが、ここまですぐ大切にしてくれると思わなかった。思えば大切な存在として気付いてからも、気持ちの込めたものを送ったこともなかった。今となればただの後悔。どうしようにもない。

研究員の腐敗した死体と共に書類らしきものもいくつか見つかった。死体は城の兵に頼んで処理してもらい、書類はとりあえず風に飛ばないように隅に集めておいた。中身を見ても専門用語らしきものばかりでとても理解できるものではなかった。やはりエリスの協力が得られなかったのは痛い。大方、探せる範囲は探した。まだまだ瓦礫は山になっているが、とてもこれを全て一人で撤去するのは現実的ではない。1日と半分、とりあえず書類探しはここまでにして、明日からは方法を変えるか。リシアに頼んで医者か研究員を借りてこの書類の読解が無難か。

汗を拭きながら城に戻る。やはり身体には堪える仕事だ。まだリシアは起きているだろうか。そういえばここ最近、登城してもリシアと話す機会が一向にない。忙しく国王をしているようだ、頼もしく感じると同時にどこか寂しい。リシアも息抜きせずに働いてい

るのだろ。少し様子を見に行くか。

城の兵士にリシアの行方を尋ねると、謁見の間にいるとのことだった。やはり仕事らしい。とりあえず謁見の間に向かった。そしてそこにリシアは居た。何やら嬉しそうな表情をしているが、疲れも見える。

- - -
- L i c i a S i d e V i e w - - -
- - -

カイク

「リシア、まだ仕事か」

リシア

「カイク、そなたこそ探し物は見つかったのか？」

カイク

「さあ。探したものがこれかは分からないが、いくつか書類はあった。それより何かあったのか」

リシア

「少し前にな、良い知らせがあった。聞きたいか？」

カイク

「国王の顔がまたガキの顔に戻っているぞ」

リシア

「相変わらず無礼な奴だ。それより聞け！これで民も助かる」

カイク

「ほう…それは何よりの話だ。だが先ずは自分の身体を心配しろ」
リシア

「自分に構っている暇などないのだ」

カイル

「分かった分かった。とりあえずその吉報とやらを寝室で聞こうじゃないか」

リシア

「寝室って…こ、こんなときに何を考えているのだ、カイル」

カイル

「何を慌ててるんだ？体調管理は人として当たり前前の仕事。国王以前の仕事だ」

リシア

「な、なんだ、そういうことか」

慌てた自分が恥ずかしい。何を考えていたのか。カイルが現れてつい浮かれてしまったようだ。

カイル

「ほれ、行くぞ」

リシア

「しかし、まだやることが…」

カイル

「行くぞ」

この男はいつも強引だ。でも従ってしまう。他の者ならば躊躇わずに拒むところだが、やはりカイル相手ではどうもペースを乱されてしまう。まだ求めているのか、自分が国王としてではなく、一人の女として休める場所を。いろいろと考えてしまう。自分と言う個を。全ての民の父となる国王としては失格だな。

部屋に付くと直ぐにカイムは切りだしてきた。

カイム

「それでどうした？あんな子供みたいな顔で喜んで」

リシア

「子ども扱いをするな、無礼者め」

カイム

「分かった、分かった。機嫌なおしてくれ」

機嫌なんて損ねていない。気持ちが喜びで昂ぶっている。

リシア

「少し前にな、調査隊の第一弾が戻ってきた」

カイム

「本当か！随分と早いな」

リシア

「調査と言っても今回の目的は食糧調達だからな。東に見える森から食べれそうなものを採ってくるように指示していただけだ」

カイム

「そうか。それで何が分かった？」

リシア

「まず食糧だが、暫くは問題なさそうだ。見たことのない果物や木の実もあるが、ノーヴァス・アイテルにもある果物・野菜も手に入った」

カイム

「そうか。それで動物や人間はいたのか？白い鳥が飛んでいたという噂もあったようだ」

リシア

「いや、動物は一切見ていないと言っている。白い鳥も噂だからな、ここには私たちがいないのかも知れない」

カイル

「確かに。短いとは言え数日かけての調査で動物1匹も見えないならそう考えるのが自然だな」

リシア

「ノーヴァス・アイテルにいる動物を増やしていかなければ。植物があるならばそれは可能だ」

カイル

「このまま全員飢え死にだけは免れたってことか。確かに最高の吉報だ」

リシア

「そうだろうか？ 勿論このまま食糧調達で終わらせてはならない。この大地も積極的に耕して十分な蓄えをしなくてはな」

カイル

「そうだな。それでこれから調査はどうするんだ？」

リシア

「これからは補給部隊と調査隊の2つに分ける。補給部隊は東の森から食糧の調達。調査隊は文字通りこの世界を知ることが目的だ」

カイル

「そうか、調査は終わらないのか。よかった」

リシア

「東の一部分が分かったとはいえ、まだまだ分からないことが多い。そんな場所に国を構えるのは国民も気持ち悪かるう」

カイル

「そうだな。そんな気持ちの悪さから鳥なんてものが見えたのかもしれないな」

リシア

「そこでカイル、お前に頼みがある」

カイル

「突然だな」

リシア

「そうでもない。カイムにも調査隊に入って調べてほしいというだけだ。以前の話にも繋がるだろう？」

カイム

「確かにな。そのつもりではあった」

リシア

「そこで早速だが、南の調査を担当してもらいたい。北と西には既に派遣したのでな」

カイム

「構わない。いつからだ？」

リシア

「明朝だ」

カイム

「本当に急だな」

リシア

「調査隊の構成は4人。調査隊隊長はフィオネだ」

カイム

「4人か。まだ危険が消えたわけではないのに随分と少数だな」

リシア

「人は出し惜しむ気はないんだが、馬が足りなくなてな。機動力は欲しいだろう」

カイム

「そうだな。まあ4人で構わない」

リシア

「食糧も3日分は持たせよう。だからそれ以上の調査はせず戻ってきてよい。身の安全を第一にせよ」

カイム

「善処する。それよりリシア、お前はもう休め。この話は終わりだ」
リシア

「休んでなんかいられるか。私には国民全員の命が懸かっている。失った信頼を…」

カイル

「うるさい。ジークに一筆書いてやる。それを兵に届けさせる」

リシア

「手紙？なんの手紙だ」

カイル

「あいつなら無難な施策もとれるだろう。一人で背負わずに任せれるやつに任せろ。それも国王の仕事だ」

リシア

「しかし…」

カイル

「身体を壊す」

リシア

「…分かった。少し生活を見直そう」

カイル

「それでいい。監視にエリスをつけるように書いておく。あいつなら国王のリシアにも平気で毒を吐けるからな」

リシア

「信頼ないな」

カイル

「リシアは国のことになると周りが見えなくなる。誰かが止めなければいけない。俺が国を離れている間は俺の代わりに止めるやつが必要なんだよ」

リシア

「それがジークとエリスか」

カイル

「そういうことだ。紙と筆を借りるぞ。それと俺が集めた書類、国の学者に見てもらってくれ」

2人には代わりにはなれない、そう言いかけてしまった。確かにジークなら私も納得する施策を行い、エリスもしっかりと体調管理してくれるだろう。しかし疲れたこの気持ちを癒せる者はそうはいない。少なくとも今自分が知っているのはこの目の前の男だけだ。

民の為、民の為。そう言ってきたのは自分に言い聞かせる為ではないのかと最近気づく。確かに父の汚名を、国の汚名を晴らしたい。牢獄なんて無くして、人々に安心する生活をしてもらいたい。それは本心だ。けれど私が一番に求めているのはカイムとの時間だ。それを誤魔化す為の国政と言われても否定できない。国王には全ての権限がある。なのに一人の男の感情を動かすことは決してできない。権限では人の心まで侵せない。勿論侵してまでカイムというものが間違いだというのは分かっているが。

リシア

「カイム…」

カイム

「どうした？」

リシア

「少し、疲れた」

カイム

「そうか」

リシア

「休みたい」

カイム

「それでいい」

リシア

「今日は居てくれないか」

カイル

「…」

リシア

「明日からカイルはいない。今日だけは甘えてはいけなにか」

カイル

「…」

リシア

「カイル…」

カイル

「俺も疲れてる。家に帰れないほどにな」

リシア

「では…」

カイル

「手紙はここに置いておく。明日届けてくれ。おやすみ」

そう言つてカイルはそのまま机に寝てしまった。私の気持には気づいてくれただろう。そしてこれが彼の精一杯の答え。拒絶するわけでもなく、完全に受け入れてくれる訳でもない。カイルの気持ちは分からない。まだ想つていてもいいのだろうか。

リシアはそつと自分の布団をカイルにかけた

- - -
- L i c i a S i d e V i e w E n d - - -
- - -

スピノフ？
(栞)

このお話は第十章・第十一章間の話です。

スピンオフ？
エゴ

[illegible]

-
-
注意

ネタばれになりますので、内容は後に記載する

「スピノフ? エゴ」

に記載します。

通常は順次章毎にお読みください。

ネタを知った上でお読みいただきたい場合は、「スピンオフ？」エ

「ゴ」をご覧ください。

[illegible]

第十一章 旅

第十一章 旅

国を出て2日目になる夕刻だった。辺りは相変わらず平然としていて、耳には馬の吐く息、足音が聞こえるだけ。最初は未知の世界への緊張と警戒で磨り減っていった精神も、今では随分と警戒心は和らいでいた。2日間という時間の中で、全く動物に出くわすことが無かったからだ。足元が草原だったり、いつか夢で見たような…スキの広がる平原であったり、植物はそれなりの種もあるようだ。動物は全く形跡もない。やはり不浄なものによって動物、人間は殺されたのだろう。死骸も残さないように。

すると突然、前方彼方に何か見えた。そしてその時、声を張ったフィオネの声が聞こえた。

フィオネ

「前方に何か見える。気を引き締めろ！体制を強化！」

馬の位置がダイヤ状になる。フィオネが前方注視、俺が後方の確認、後の2人が両方行を確認する基本体制。油断で乱れていた体制がフィオネの一喝ですぐに形成される。

フィオネ

「全員停止」

その声に反応し、すぐに4人が集まる。

カイル

「どうした？」

フィオネ

「あれは森のようだ」

カイル

「森か。南方面では初めてだな」

フィオネ

「ああ。ちょうど食糧から見て今日が引き際だった。しかしあそこで調達出来ればまだ先に行ける。」

カイル

「確かに。行くか？」

フィオネは3人の表情を確認し、考える。隊長を任されてる以上、部下の命を第一に考えているのだろう。ここで慎重に一考するところか。フィオネらしい。

フィオネ

「進もう。但し今日は森から充分に離れた位置で停泊にしよう」

カイル

「妥当だな」

フィオネ

「あと半分の距離まで進み、今日の調査は終了とする」

隣の2人は「了解」とはつきりとした口調で返す。この2人が、フィオネの判断に誤りがないと信頼しているのはもう分かっている。そしてその期待にフィオネも充分応えているだろう。

カイル

「ではもう少し馬には頑張ってもらおうか」

フィオネ

「そうだな。行こう」

- - -
- F i o n e S i d e V i e w - - -
- - -

日も沈み、パチパチとなる薪の燃える音だけが響く。ここまで私はどれだけ歩いただろう。

最初は無知の幸せから始まった。兄が居て、父も母も居て、食事に困ることも無かった。尊敬出来る兄に稽古をつけてもらう日々。原点であり、自分が自分である為に欠く事のできない時間。その後は兄の仕事継ぐように羽化病罹患者の保護の職に着く事が出来た。その時はまだ苦労の中にも誇りを胸に、やりがいを感じていた。

しかし事実を知ってから逆転してしまった。黒羽が兄であり、それを作り出した実験の為に行われていたのが、羽化病罹患者の保護。私にブローチをくれたお婆さんも父も私が殺した。防疫局隊長である私の無知が引き起こした殺人だ。兄の言うように私は剣に振り回されていた。何も考えずに。

事実を知った時はやはり死を頭に掠めた。兄も父も、何も罪もな

い人々を殺した償いとして。いや、死を選べる力もあつたか疑わしい、そんな状態の自分がいた。そんな自分から目を覚まさせてくれたのはカイルだ。彼は私が最も怒る言葉を選び、侮蔑した。深い傷口を敢えて抉った。もう気づいてる。あの時と違って冷静に振り返ることができている。私はカイルに救われたのだ。剣に振り回されて、疲れてそれを降ろそうとした。何もかも棄てて。しかし私は自分の意志で、自分の力で剣を振る道を選ぶことが出来た。兄が最後まで望んだ私の道を。カイルには心から感謝している。

カイル

「番が変わろう」

突然かけられた声に驚いた。

フィオネ

「カイル！起こしてしまったか？」

カイル

「いや、眠くないただ。ずっと馬での移動だ、疲れていない」

フィオネ

「そうか」

カイル

「俺が番をする。フィオネはもう休め」

フィオネ

「いや、いい。もう少しこうしていたい」

カイル

「…1つ、フィオネに謝らなければいけないな。あの時、侮辱してすまない」

やはり気にしてくれていたのだ。それだけで嬉しい。

フィオネ

「いや、もういい。分かってる。私も1つ言いたい」

カイル

「…なんだ？」

フィオネ

「ありが…とう」

何に対しての礼が伝わってくれたのだろう。気のせいかもしれな
い。しかし珍しくカイルの表情から笑顔が見えた気がした。

カイル

「心から尊敬出来る人間ってどの位いるんだろうな」

フィオネ

「えっ」

カイル

「フィオネの兄はどういう人間かは俺には分からない。だが、フィ
オネが兄を尊敬出来たのは何となく分かる。最後の黒羽の理性をみ
て」

フィオネ

「ああ。誇れる自慢の兄だ」

カイル

「俺は兄を自慢する気にはなれない。最後に同じ道を選択出来ただ
けでそれ以外、ずっと違えてた」

フィオネ

「…そうか」

かける言葉が見つからなかった。大事な時に力になってくれた彼
に、今度は自分が何かしてあげたかった。悔しい。

フィオネ

「だがカイルにはジーク殿がいるだろう。誇れる兄と同じで、信頼出来る他人とはそう簡単に人はできない」

カイル

「ああ。そう思う。けど残念だがジークは違うな。あいつは頭として信頼を大事にしてる。それは俺だけのものではない」

フィオネ

「そういうものか？」

カイル

「そういうもんだ。だから俺もジークも互いに裏切った時の事は常に頭に入れてる。それはフィオネと兄のような見返りのない信頼とは違う。だから人は心から信頼や尊敬出来る人間には1人いればいい方だと俺は思う」

フィオネ

「…なら私になる。信じてくれ。一度は間違えたが、私はもうカイルを裏切らない」

カイル

「フィオネは信じられる。分かりやすいしな」

フィオネ

「分かりやすいとは…さっき自分で信頼出来るものは1人いればいいと言ったではないか。それは…」

それは信頼のレベルの違いだろう。私の言う無償の信頼とカイルの思う信頼、それは異なるものなんだろう。寂しくなった。

カイル

「俺は人に恵まれてる」

フィオネ

「私はカイルにとって特別になりたい」

寂しさと焦りでつい口をでてしまった。「分かりやすい」と言ったカイムには伝わっただろう。

カイム

「…ありがとう。本当に恵まれてるな、俺は。時間をくれ」
フィオネ

「…あ、ああ」

気恥ずかしい静寂が訪れた。けれど、私を女として見ていてくれる。その答えだけでも嬉しかった。

カイム

「少し、散歩してくる。俺が戻ってきたら寝ろ」

彼はそう言ってナイフを装備し、森の方へ歩いて行った。火の光も届かない闇に溶け込んだ

- - -
- F i o n e S i d e V i e w E n d - - -
- - -

第十二章 南の森

第十二章 南の森

日の光が地平、隅々まで行き渡ったことを確認し、フィオネは号令をかける。森の中は当然だが、平原と比べると格段に視界が悪い。また心理的にもここまで何事も無かったことで油断も生まれ初めている。それを知ってのフィオネの激励だった。森の中では馬から降り、2人が4頭の馬の管理、2人が右前方と左後方という特殊陣形で進むことになった。右前方はフィオネ、左後方は俺だ。その陣形のまま平原を歩き、森に入る。

森には特有の冷んやりとした空気が流れる。木漏れ日に満たされたその空間は心地良い。油断はあれ程意識して排除するように心掛けたが、壮大な自然の前にはやや無力だ。そうした気の緩みが馬管理の2人から雑談という形で表面だつてきた。それを仕方なしと感じたのか、フィオネは停止の号令をかける。

フィオネ

「ここで食糧の調達を始めよう。今のところ植物以外は見当たらないが、気を引き締めろ」

2人の兵士

「はい！」

カーム

「食糧の調達はどの様にするんだ？」

フィオネ

「2人は引き続き馬の管理。私とカイル2人で調達に出よう」

カイル

「わかった」

フィオネ

「その間2人は休んでいて良いが、気だけは緩めるな。少しでも何かあったら笛で呼んでくれ。間違っても構わない」

2人の兵士

「はい！」

カイル

「ならさっさと行こう。あっちにりんごのようなものが見える。方向はあっちでいいか？」

フィオネ

「ああ。今度はカイルに前方を任せる」

カイル

「了解」

リシアの言うとおり、森は食糧としては豊富にあり、食べるには困らなかった。果物も多種に渡るが、毒などの可能性がある以上、確実なもののみを食糧の対象とした。そこでふと落ちているものが目の端に映り、確かめる。

カイル

「フィオネ、こっちに来てくれ」

フィオネ

「どうした？」

カイル

「これを見る」

フィオネ

「これは…」

そこには食べ終わったりんご。しかもその食べ方は動物的なものではなく、人だ。誰か、人間がここに居る。

カイル

「南方向の調査は俺らが最初だよな」

フィオネ

「そう、聞いている」

カイル

「ノーヴァス・アイテルから来た可能性は…」

フィオネ

「ない訳ではない。だが一般人が馬も使わずにここまで来るのは難しい。食糧の蓄えがあり、馬が使えるもの…国の人間なら間違なく貴族がつながる」

カイル

「国の人間では無いとしたら外殻大地の人間か」

フィオネ

「それも非現実的だな」

カイル

「都市が堕ちた時点で非現実が始まってる」

フィオネ

「確かに。どの可能性も捨てず、まずは身を守るっ」
カイル

「とりあえず戻るか」

フィオネ

「いやよくみる、カイル。このりんごはまだ渴いてない。そう時間は経っていない。近くにいる可能性は高い」

2人で耳を澄ませる。風で木の葉が重なり合う音のみが響く。……

いや、何か気配がする。何かいる。フィオネを見る。気づいている。

カイル

「あっちもこっちに気づいてる」

フィオネ

「ああ」

カイル

「目的は調査だ。行くぞ」

フィオネは無言で頷く。無意識にナイフを握り直す。成功するイメージを浮かべる。成功は…相手を調べることではない、フィオネを守る。さっきの自分の発言と違いはあるが、これでいい。このイメージは間違えてはいけない。相手はジツとこちらを伺ってるようだ。行くしかない。

カイル

「後方から援護を頼む」

フィオネ

「分かった。だが場合によっては引くんだ」

カイル

「ああ」

ジリジリと目標の茂みに向かう。今までの不確かな気配は、息づかいとして顕著になっていく。こちらから茂みを探るのは先手を取られる可能性がある為、危険だ。ナイフ…いやまず石を投げるか。

すると突然現れた。

???

「か、カイク…さん？」

驚きで暫く呼吸も忘れた。非現実的なことも慣れてきたつもりだが、やはり非現実はそのを許さないらしい。願い、何処か期待した非現実。だけどそんな願いに頼っては前に進めない。それが奇跡の日からの5日間に出した答えだった。

カイク

「お、お前…」

ティア

「はい！ティアです！」

カイク

「どうして…ここに…死んだんじゃ…なかったのか…」
ティア

「はい、良くはわかりませんが、生きてました！カイクさんに出会えて本当に嬉しいです」

間違いなくティアだった。ころころと変わる表情。ピンクの髪。笑顔。全てがティアを作り出している要素。確信を得る為に残りのフィオネは見る。どうやら現実として受け入れていいらしい。

ティア

「でもこの世界で始めて出会う人がカイクさんなんて…すごい嬉しいです」

カイク

「ティア、なんだな？」

確信しているのに、敢えて尋ねた。

ティア

「そうですよー。ほら、ちゃんと首飾りもありますよ…」

ティアの言葉が終わる前に抱きしめていた。

カイク

「ティア…ティア！ティア！」

ティア

「そ、そんなに抱きしめられると苦しいですよ」

カイクの胸でティアは微笑む。嬉しかった。大好きな人に出会えて。暖かい胸は確かに息苦しいけど、幸せの方が大きかった。ずっとこのままでいたい。

カイル

「…悪い、取り乱した」

ティア

「カイルさんにしては珍しいですね」

イタズラっぽい笑みを浮かべる。

カイル

「うるさい。改めて聞くが…」

フィオネ

「本当にティアなのか？」

ティア

「あっ！フィオネさん、お久しぶりです…」

カイルに抱きしめられたのが恥ずかしくなってきたらしい。わかりやすい彼女の頬には赤みを帯びてきた。

フィオネ

「信じられない…」

カイル

「都市が堕ちた時点で信じられる現実はないだろ」

ティア

「やっぱり堕ちたんですね。でもお2人とも元気そうで良かったです」

カイル

「それより今までどうしてた？あの時ティアは何をした？身体は大丈夫なのか？おい、羽根がないぞ？」

ティア

「うっ… いっぺんに聞かれても分からないです…」

自分が冷静でない事を確認した。そして無防備な事も。あのりんごがティアではない可能性も過った。けど面倒だ、どうでもいい。

カイク

「悪い、1つずつ聞く。あの時、ティアはどうやってノーヴァス・アイテルをこの世界に降ろしたんだ？」

ティア

「それは良くはわかりません…ただカイクさんに死んでももらいたくないって思っただけですよ。何をしたのか自分でも分からないんです」

カイク

「分かった、とりあえず次の質問だ。身体は問題ないのか？」

ティア

「はい！元気です！羽根は無くなっちゃいましたけど…痛くもないです」

カイク

「今までどこにいた？」

ティア

「ずっとこの森ですよ。気がついたらここに寝てて…食べるものがありましたし、きっとカイクさんに逢えると思ってましたから誰か来るのを待つことにしたんです。そうしたら本人が…」

嬉しそうに笑う。

カイク

「ずっとか！？あの奇跡の日からずっとここに？」

ティア

「そうですけど…まだ3日ですよ？それは3日もご飯なしだと死んじゃいますけど、りんごも美味しいですから」

カイル

「3日？もつと経ってるぞ」

ティア

「えー！でも起きてから日が三回しか落ちてませんよ」

ずっとこの森に眠っていたのだろうか。だとしたらもつと体力が落ちてもいい。奇跡の力も何故この場所なのかも…何より何故ティアが生きているのかも何も説明がつかない。奇跡に説明付けようとする事自体、間違いか。

カイル

「とにかく戻ろう。いいな、フィオネ」

フィオネ

「あ、ああ」

ティア

「戻るって…そういえばどうしてカイルさんはここに来てるんですか？」

カイル

「この世界の調査だ。向こうにあと2人いる。…帰るぞ」

はい！っと嬉しそうに横で笑う。…ティアだ

第十三章 果て

第十三章 果て

カイル

「フィオネ、ちょっと待ってくれ。ティア、確認するがここには動物はいないんだな？」

ティア

「はい。3日間ずっと見てないです」

カイル

「都市では大きな鳥が目撃されてる。心当たり、あるか？」

ティア

「うーん…ないです」

フィオネ

「カイル、あくまで『鳥らしきもの』だ。噂で信憑性は高くない。それにそれがティア自身だった可能性もあるな」

カイル

「確かにな。…もうこいつはなんでもありだな」

ティア

「うー…なんかひどいです」

カイル

「まあ、いい。俺が言いたかったのは調査隊を2つに分けないかって事だ。あの2人に報告に行ってもらい、俺らは進む。どうだ？」

フィオネは少しの間、考えていた。それが安全面からの考えと言うのは分かる。それがフィオネだ。

フィオネ

「分かった、それで行こう」

カイル

「そこで2人に伝言を頼む訳だが、『天使、ユース確認、保護』とだけにしてくれ。それだけでロシアには伝わる」

フィオネ

「何故そんな回りくどいことを？」

カイル

「都市へ戻ったらティアが狙われかねない」

周りを失い、1人生き延びて横たわって居るものに、天使を怨むものは多い。だから天使とティアの繋がりは伏せたい。ティアが天使である事は一部であれ不特定の者が知っている以上、隠し切れるとは思わないが。

フィオネ

「分かった、カイルがそう言うならそうしよう。一応言っておくが、あの2人は防疫局の部下だ、信頼できる」

それを伝えるに留めたのは過去にフィオネは裏切りを経験しているからだ。そしてカイルにとってその情報に意味がないことは分かっていた。だが敢えてカイルは「ああ、分かった、頼む」とだけ言った。

フィオネは事情の説明、指示をする為に2人の元へ向かった。その間にティアに都市の様子を簡単に説明した。ロシアとジークのお

かげでなんとか秩序を保っていること、懸念していた食糧問題が解決したこと、そして今のところ動物が発見されていないこと。簡単に掻い摘んで話した。

少し離れた所で馬の鳴き声、走る音が聞こえた。そしてフィオネが2頭の馬を連れて現れた。

フィオネ

「戸惑ってはいたが、期待通り動いてくれるだろう」

カイル

「では行くか」

少し歩けば直ぐに森を出ることが出来た。そしてまた広がる平原。一体どれ程の旅になるのだろうか。

荷物や食糧はフィオネの馬に乗せ、俺の馬にティアを乗せる。体力を使うのは馬だから馬に合わせて重荷を調整しなければならない。今度は先頭は俺、フィオネが後方を担当する。ティアで後方確認が難しくなったからだ。

暫く馬を走らせた。ちょうど今日の日が夕日と呼ばれる時間にふと気づいた。

カイル

「フィオネ！」

手で停止の合図をする。2頭が並んで止まる。

カイク

「地平の向こうに何か見える」

フィオネ

「…確かに…山でも森でもなさそうだ」

遠くに『線』が見える。見たことの無いほどの大きな線。

カイク

「もう少し行くか」

その線の方へ馬を進める。近いているだろうが、それに比例して暗くなっていく。警戒を維持したまま出来る限り近づく。そろそろ今日はここまでだな、と考えていたところにフィオネから停泊を提案された。返事一つで受け入れる。

フィオネ

「この世界に行き止まりはあるのだろうか…」

カイク

「また浮遊しているのかもな」

ティア

「ええ！そうなんですか？」

カイク

「知らん。天使様が知らないんだからな」

フィオネ

「まだ続くのか、崩落は…」

カイク

「…」

フィオネ

「すまない。まだ未確認だ、口にすべきではないな。少し歩いてくる」

カイル

「気をつけろよ。また不浄なものがあるかもしれない」

フィオネ

「ああ、分かった」

そう言つて装備を携え、どこと無く歩いて行く。崩落の危機がまだあるのなら心は安まるものではない。

ティア

「カイルさん。カイルさんはやっぱり鳴かなくなつた鳥は逃がしますか？」

カイル

「…なんのことだ」

ティア

「カイルさん、教えてくれたじゃないですか。売られた鳥は鳴かなければ殺される。そしてカイルさんは自分なら殺さずに逃がす。そう言つてたじゃないですか」

カイル

「ああ、そんなこともあつたな」

ティア

「今もそう思いますか？」

カイル

「そうだな…」

なんとなく答えに迷っていると、ティアは言う

ティア

「私はたった3日でも森で1人きりで寂しかったです。いつかカイクさんに会える、そう思っていてても静かな森は怖かった」

カイクは話の続きを待った

ティア

「その時、鳥のことを思い出して…鳴かなくてもいい、鳴かない鳥が居てくれるだけでどんなに世界が変わるんだろって」

カイク

「そうか」

ティア

「…カイクさん、私は鳴けない鳥です。もう天使の力はありません。でもお傍においてくださいね」

カイク

「ああ。鳴かなくてもいい」

そついいながらもあの時のエリスを思い出した。ティアもあの人のようなエリスになるんじゃないか。そんな不安が過った。

朝日が世界を照らすと同時に馬を蹴る。向こうにある『線』に向かって。

次第に『線』は広がりを見せていく。馬の体力が無くなる前にあそこへ行く。

湖

いや、でかい。

足元の草原に砂が混じって行く。草も少しずつ短くなり、やがては砂のみが広がっていく。

近くまで辿りついたが、正体が分からない。どこまでも続く湖。その先に陸地の気配すらない。しかも風と比較して大きく水が摩く。既にカイルとフィオネは馬から降りていた。得体のしれないもの。いや、ものというには壮大過ぎる。

カイル

「これが不浄なものの正体なのか…？」

フィオネ

「分からない」

ティア

「…なみ……」

カイル

「ティア、なんか言っただか？」

ティア

「えっ！？えっと…よく分からないです」

フィオネ

「取り敢えずここが南の最果てと判断しよう。調査対象はこの水だな」

カイル

「そういうことになるな。しかし調査と言ってもどうすればいい？こんな生き物とも言えない動き、不気味だ」

ティア

「そうですか？太陽の光がキラキラして綺麗ですよ」

フィオネ

「そうだな…なんか、幻想的な世界だな」

女性陣と意見が分かれる。いつの時もそうなのだ。女の方が遅しく、男は臆病。自分に溜息がでる。近場にある小石を掴み、水に投げ込む。流れる水は波紋すら映さずに石を飲み込む。何も手応えはない。いつの間にかティアが無防備に水に近づく。

カイル

「お、おい。ティア危ない！」

急いでティアに駆け寄ったが間に合わない。ティアの足を流れる水が飲み込む。夢中になって水に足を入れ、ティアを引き戻す。

カイル

「なに勝手なことやってんだ！危ないものかも判断出来ない状態だぞ」

ティア

「すいません…でもそんなに怖いものではない気がしたんです」

フィオネ

「天使の力はないんだろ？勝手なことをするな！」

「落ち着け、カイル。まずは濡れた足を拭こう」

そう言つてフィオネは荷物から布を取り出す。一枚をカイムに渡し、もう一枚でティアの靴を脱がせて拭いてやる。

フィオネ

「少なくとも触つて直ぐに何か起きる訳ではなさそうだな」

カイム

「すぐにはな」

ティア

「でもあの時の不浄なもののような意思是感じられないですよ？大丈夫ですよ」

ティアを睨み付ける。直ぐにティアは泣きそうに俯くが、今度はフィオネが水に近づく。

カイム

「フィオネ！」

フィオネ

「私は調査隊隊長だ。これを知りにきたんだ」

途端、自分1人がビクビクしてることに気づく。情けない。けど一番恐れているのは2人を失うことだ。フィオネの腕を掴み、後ろに引く張る。

カイム

「分かった。調べる。その代わり全て俺がやる」

自棄になつて水に再び足をつ込む。冷たい。寄せては引くその得体のしれない水に恐怖を感じる。その時、何か動いたものを見つけ

た。魚だ…

この広がる水の中に生物がいると言うのは随分安心感を得た。魚の存在を伝え、水筒を寄こすように言う。直ぐにフィオネは持ってきた。

暫くその水に入った眺める。今ここで考えても何も分からない。取り敢えずはこの調査対象を城へ持ち込み、調べてもらう。それ以上出来ない。

カイク

「収集と簡単な状況確認を終えたら真っ直ぐ都市に戻る。いいな？」
フィオネ

「ああ。そうしよう」

第十三章 果て（後書き）

【愚痴】

現在、第十九章と3話作成済み

しかしスランプ

世界観も壊しかねない…

引き際かな…

第十四章 政務

第十四章 政務

- - - - -
S i e g f r i e d S i d e V i e w - - - - -
- - - - -

雨音が静かに聞こえる城の一室。まだ朝が終わったばかりなのに部屋は暗い。だが話は悪くはないものだった。無事に良い方向へ進んでいる。

ジーク

「で、クローディア、農民希望者はどのくらいだったか？」

クローディア

「はい、50名余り確認が取れています。ですので、確認出来ない浮浪者を含める確実に100人は超えるかと思っています」

ジーク

「だ、そうだ。んでリシアが考える事になってた収税法は？」

リシア

「うむ。私の方でも再度、ジークの強制徴収案は考えたんだが…やはり反対だ。国に残るかの判断はやはり民に任せるべきだ。税を納めた者は国の保護の対象、納めない者は自由にして良い、と言う結論だ」

ジーク

「だからそんなことするとみんな国を出てくんだよ。牢獄民はどれだけ国を恨んでると思ってんだ？新しい国を作って反乱が起きるのがオチだろうよ」

リシア

「だが強制的に国に属させても反乱の可能性は消えない。大事なものは我々が民の信頼を得て期待に応える事にある」

ジーク

「リシア、それは甘っちょろい理想論だ。俺も組織の分派に噛まれことがある」

リシア

「組織の話と国は違う」

ジーク

「まあ、いい。この話は持ち込みだ。頭冷やして大人になれ。なんならうちから特別出張してやるか？すぐに大人になれる。クローディア、お勧めは？」

クローディア

「そうですね…力強い方が好みならダズ様ですね。経験も豊富です。母性を憐るタイプと言うことでしたらリシア様と同じ年頃のリユーク様です。ですがリシア様は初めてとお見受けしますので、安心を大事—に経験豊富な…」

リシア

「な、なんの話をしておる！！娼館は休業中と言っていたではないか！」

ジーク

「いや、国王の政務の為ならな…少し高いが、カймならいいだろ」
リシア

「か、カйм…」

クローディア

「駄目ですよ。カйм様は1番人気ですから先ずは場数を踏んで殿

方のお気持ちを分かってからでないと…では私もお付き合いしますわ」

ジーク

「よし！決まった。そろそろカイムも帰るだろ！楽しみにな」

顔が紅くなってやがる。分かりやすくてからかい甲斐のあるやつだ。そういえば俺と対等の女はいるが、こうやって弄れる女はいないな。組織の頭やってんのに…。こうやってメルトは俺とカイムで楽しんでいたのか。

リシア

「おい！話を戻すぞ！えっと…次は北の調査隊が採取した液体の研究についてだったな。これはまだ本格的には結果は出てないが…」

ジーク

「ああ、それならこっちでも調べた。塩分濃度の濃い液体らしい」

リシア

「なぜそんなことがわかる？」

ジーク

「ちよっとお仕置きの予定のある奴に舐めさせた」

リシア

「何を非人道的な！まだ毒の可能性もあるのだぞ？」

ジーク

「そう言っただけでチンタラすると思っただけ。大丈夫だ、殺す予定の奴だ。飲ませてまだピンピンしてるよ。即効性の毒ではないようだ」

リシア

「そう言う問題ではない！」

ジーク

「そう怖い顔するな。生き延びれば死刑免除なんだから相手も喜んで」

リシア

「ジーク：今は組織の頭でも、しっかりとした規律が出来たらそれに従ってもらうぞ」

ジーク

「ああ。そのつもりだ。しっかりとした規律ができりゃあな」

リシアは俯く。リシアと俺の意見はよく衝突する。理想主義と現実主義だから当然か。リシアは俺を嫌ってるだろう。けど俺はこいつに不快感はない。甘つちよろい理想論でもそれには俺にない心地良さがある。俺はそれが嫌いじゃない。嫌いになれない。

リシアは国王としての立場から国民を守ると主張している。俺は王族は滅ぶべきだと主張している。相容れない。だがカイムの言うリシアの有能さは認めている。リシアに政務を任せればきっと国民は今までと違う安寧秩序を手に入れることができると思う。それだけリシアは国民を想い、それを何よりも実践してきた。保守はない。しかしそれはリシアが王である時だけだ。王制を保てばいずれリシアに子ができ、そしてその子が政務を取り仕切る。その子がリシアのように優れた能力と国民を第一に考えられる思考があるとは限らない。子は子であって、分身ではない。どんなに優れた人間からも落ちぶれは生まれることがある。

そこから出した俺の結論はリシアには国王を任せても、それを退く時、王制を滅ぼすというものだ。先の話で俺が生きているかは分からないが、生きているならばそうなるようにしたい。それが俺がやりたい俺の生まれた国の為の行動だ。リシアが今のリシアである以上、俺はこいつに任せていいと思う。

ジーク

「とりあえずわかったのは塩水らしきものようだ。塩といえば保存が効く調味料だ。魚もいたんだろ？随分と洒落たもんだ」

リシア

「こちらで進めていた研究員の報告によると、顕微鏡で細かな生物が確認できたようだ。確かに不浄のものとは反対のものかもしれない」

ジーク

「ああ。潮といえば女だ。女は母なる身。母なる液体ってことかな」

クローディア

「でしたらリシア様も潮の御体験をなされた方が今後の為にも…」

リシア

「だからどうしてそういう話になる！」

何度もからかう。全体会議はともかく、リシアと個人的な会談となると大抵俺が馬鹿して楽しむ場となる。本当に一度娼館に社会勉強させてやろうか。

突然、扉が叩かれる。それ扉に向かってリシアは「入ってよい」と声をかける。

召使

「エリス様がお話があるそうです。お通ししてもよろしいでしょうか」

リシア

「構わぬ」

召使の後ろからエリスが入ってくる。

エリス

「ジークもいたんだ」

ジーク

「心配するな。俺はいつもお前の心の中にいる」

エリス

「リシア、研究に使いたいから最新の顕微鏡貸して」

リシア

「そういうことか。直ぐに研究員の顕微鏡を持ってこさせよう」

ジーク

「エリスちゃんも、リシアちゃんも冷たい！」

クローディア

「ジーク様、そんな女声出してもこちらの方々の美しさには及びませんよ」

リシアはそんなジークを無視しつつ、召使に研究室にある顕微鏡を持ってくるように指示をする。構ってくれたクローディアはやはりいい女だ。泣けてくる。

リシア

「そうだ、せっかくだ。羽化病の研究について少し教えてもらえぬか？」

エリス

「まだはつきりしたことはわからない」

リシア

「途中報告とエリスの見解で良い」

クローディア

「私の仕事仲間にも最近、一人罹りましたの。是非お聞きしたいですわ」

エリスはめんどくさそうに空いている椅子に腰をかける。

エリス

「あくまでも未確認の個人的な見解。羽化病は感染しない」

ジーク

「その考えの根拠は？」

エリス

「1つは2年間羽付きの監視をしていた人間が全く感染していないこと。この男は性接触もしているから確実に体液は取り込んでいる。なのに何も変化がない。2つ目はカームが集めてくれたこの研究員の書類。そこには感染が起ころうことはついては全く書かれていないから」

ジーク

「じゃあ感染というのはただの羽狩りをするための謳い文句ってことか」

リシア

「そうか…」

エリス

「もっとも本当に天使とやら関わっているのならそう言った論理的な考えは成り立たないけど」

ジーク

「そうか。ならせつかくだし俺も治療院とやらをのぞいてみようかな」

リシア

「おぬしは興味なかったんじゃないのか？」

ジーク

「昔、組織の構成員で発病したやつがいた。感染の可能性があるか

ら金を渡して組織を追い出したことがある。恐らくそいつももう狩られただろう。少しは自分の目で見たい気持ちはある」

エリス

「ジークはいても邪魔」

ジーク

「そんなこというなよお。今度こそカームを自由にしていいいからさあ」

リシア

「お、おい！さっきカームは私に…」

ジーク

「おや？王様は本気にしていらしていましたが。ではカームにはお二人同時に奉仕するように申し伝えましょう」

クローディア

「私も混ぜていただいてはだめですか？ジーク様」

ジーク

「よし！分かった。さて、どうやってカームに借金作らせるかなあ」

エリス

「いや。私だけが遊ぶ」

リシア

「もう、よいよい！早く治癒院に行つて来い！ジークがいると話が滅茶苦茶になる」

ジーク

「はいよつと。じゃあ、また明朝に来る。それまで集税法と議会形式の見直し、外部調査の今後の予定を計画しておけよ」

リシア

「分かった。…ジーク、そなたが来てから政務が楽になった。礼を言う」

ジーク

「そうか…リシアは実は俺だったか。任しておけ、明朝と言わずに

今日、夜這に来る」
リシア
「帰れ」

-	S	-
-	i	-
-	e	-
-	g	-
-	f	-
-	r	-
-	i	-
-	e	-
-	d	-
-		-
-	S	-
	i	-
	d	-
	e	-
		-
	V	-
	i	-
	e	-
	w	-
		-
	E	-
	n	-
	d	-
	-	-
	-	-
	-	-
	-	-
	-	-
	-	-

スピノフ？（栞）

このお話は第十四章・第十五章間の話です。

スピノフ？ 影

- - - - -
- - - - -
- 注意 - - - - -
- - - - -
- - - - -

ネタばれになりますので、内容は後に記載する

「スピノフ？ 影」

に記載します。

通常は順次章毎にお読みください。

ネタを知った上でお読みいただきたい場合は、「スピノフ？ 影」

をご覧ください。

第十五章 研究

第十五章 研究

- - -
- - Siegfried Side View - - -
- - -

真つ直ぐジークとエリスは治癒院に向かう。途中、牢獄へ行く分かれ道でクローディアはリリウムに帰した。クローディアは副官としてかなり優秀だった。必要な情報は粗方準備してくれているし、よく他の娼婦もまとめている。娼婦という存在を馬鹿にしたことはないが、何故こんなにも優秀な女が牢獄の溜まり場に身を置くことになるのだろうか。有能な者・努力した者が上へ、無能なもの・怠惰な者は下へ、そんな都合の良い世界ではないことは牢獄にいるとよくわかる。

だがエリスは少し例外だ。医者としては牢獄での経験豊富さからかなりの腕だ。本来なら他の娼婦と同様、それで終わるはずだったが、反乱と崩落で傷ついたものの治療をしていくうちに上層からかなりの評判を得ていた。今ではこの都市一番の腕利きと言われるほどの医者になった。大したものだ。

見慣れない小綺麗な建物が見えてくる。あれが治癒院だろう。俺も昔は特別懲罰房が欲しくてその建設の命令をしたことがある。ちようど牢獄の断崖絶壁、あんな場所だ。やっぱりそういうもんなんだろう。

身なりの整った兵士

「お疲れ様です。エリス様。そちらの方は…」

エリス

「これはジーク。ほつともいいわ。ただの犬」

ジーク

「俺は寂しがりでね。あまりほっておかれると…」

エリスは無視して中に入っていく。困った表情で兵士はジークを見る。

ジーク

「…お疲れさん」

そういつてエリスの後に付いていく。兵士は依然として困った表情のままこちらを見ているが、それを無視して建物に入る。中も小奇麗だが、不自然な不気味さを感じる。エリスは慣れた道を迷わずに進み、正面の道を右に曲がる。そして直ぐに現れる扉を鍵で開けて中に入っていく。中は暗く、湿った空気がある。直ぐに現れた牢屋の中には血の跡も見える。予想していたような場所だ。ただ違うのは自由に牢屋を出入りしている少年がいることや、牢屋の中に何故かベットや椅子があることだ。

ジーク

「おい、ここは羽付きの監禁場じゃないのか？」

エリス

「少し前はそう。けど今は可能な限りこの建物内の出入りは自由に

しているの。反抗的な者の牢は鍵がかかっているけど、問題なさそうなのは放っておいてる」

ジーク

「で、このベットや椅子は？」

エリス

「コレットがリシアに言って調達したもの。少し前まで腐臭が酷かったけど、ラヴィリアが掃除してマシになったわ。…意味無いのに」

ジーク

「宗教家の心の広さには驚かせるねえ。牢獄出身者には考えられない行動だな」

エリス

「そうね。…着いたわ。ここが今の研究室。元看守室だけど」

中にはコレットとラヴィリアと一人の羽付きの少年が居た。羽付きの羽は少し大きい程度で、羽が出る特別な服を着ている。

エリス

「またその子？ラヴィリアのお気に入りね」

ラヴィリア

「あつ、おかえりなさい。エリスさん」

コレット

「思ったより遅かったのですね、エリスさん」

エリス

「途中で病原菌がついてきてね」

ジーク

「それって俺？この短い間に犬から病原菌に格下げ？」

ラヴィリア

「エリスさん。それはさすがに…」

エリス

「菌は菌でも性病よ。気をつけて」

俺は組織の頭だ。無く子も黙る組織の頭。俺には多くの部下や娼婦がいて…部屋に戻れば貴族に遜色とらない部屋があつて…がんばって矜持保たないと…

コレット

「それでジークさんはどのような御用件ですか？」

ジーク

「いや、用はない。ただの好奇心からの見学だ。構わずやってくれ」

エリス

「じゃあ、血液採るわよ」

ラヴィリア

「レンくん、こっちおいで。ちょっと痛いだけだから我慢してね」

レン

「うん。分かった」

エリス

「何度も採るのは面倒だから多めに採るわね」

レン

「えっ、おい、それって…」

レンと呼ばれた少年はラヴィリアを見る。

ラヴィリア

「大丈夫よ。エリス先生は何度もレン君が痛い思いをしないように
って言ってくれてるの」

エリス

「早く腕を出して」

レンは安心し、腕を差し出す。針は血管に刺さり、シリンジに鮮血が溜まる。その赤はどの赤よりも美しい。充分に血液が溜まると、エリスは針を抜き、直ぐに濡れた布を押しやる。

エリス

「ラヴィリア、このまま数分抑えてて。血が止まったらその子は返していいわ」

ラヴィリア

「はい」

ジーク

「毎日ガキの面倒と実験か」

エリス

「面倒見てるのはラヴィリアとコレット。私は研究してるだけ」

ジーク

「羽根付きは神に見放されて、代わりに聖女に助けられるとはな。神も大したことないな」

コレット

「ジークさん、神を侮辱するような発言は控えてください！」

ジーク

「…前から思ってたんだが…どうしてあんたら聖職者は神を神と呼んで、天使は天使様なんだ？神の方が天使より偉いんだろ？」

コレット

「それは…」

ジーク

「知らないのか？」

コレット

「昔から天使歴にはそのような記述があったので、それに倣ってそういう呼称にしています。しかしそうですね…『神は天使様を御遣

い下さり、人々を御導き下さった』そう言われています」

ジーク

「教会も適当だな。教会はいつも天使、天使って言うてるけど、神はほったらかしだもんな」

コレット

「そんな言い方はやめてください。何か歴史的な理由があるはずですよ。この羽化病の研究が進めばそのような理由も……」

ジーク

「分かるはずないだろう。何でもかんでも結びつけて」

コレットは反論できずに黙りこんでしまった。

ラヴィリア

「はい、レンくん。止血できたわ。そろそろお部屋に戻りましょうか」

レン

「ラヴィ姉ちゃんはまた掃除？」

ラヴィリア

「うん。まだ汚いからね」

レン

「じゃあ俺も手伝うよ」

ラヴィリア

「ほんとう？ありがとうございます。では皆さん、私は出ますね」

レン

「コレット姉ちゃん、ちゃんとお祈りもするよ」

コレットは笑顔で返す。ラヴィリアもレンも笑顔のまま、小さな研究室を出て行った。

ジーク

「あれも立派な聖女だ」

エリス

「子どもの面倒みるの、好きみたい。おかげでこっちは楽に研究に専念できる」

ジーク

「そうか…何故今まで気付かなかったんだ…！」

コレット

「突然、どうしたのですか？ジークさん」

ジーク

「聖女だ！清楚な聖女な設定で売れば…よし！コレット。ラヴィリアと一緒に娼館にこ…」

コレット

「行きません…！！！」

ジーク

「いや。聖女と言えど人の子だ。その敬虔な意志を継ぐためには子作りをして…」

コレット

「しません…！！！」

ジーク

「じゃあ、カイムは？」

コレット

「そ、それは…」

エリス

「同じネタ…くだらない」

どうしてカイムはこんなに好かれてるんだ？あいつは一体何をしたんだ？カイム女に好かれて、俺は部下（男）に好かれて…あつ、さすがに挫けそう。

エリス

「ジークはもう暇つぶしはいいでしょ。邪魔だから帰って。帰る時は見張りの兵士に鍵かけるように言って。コレットも配膳の時間。羽根付きがうるさくなる前に配って」

コレット

「そうですね。もうみなさんお腹が空いている頃ですね。配っていきます」

ジーク

「ああ。帰る」

ジーク

「ジーク！やっぱり帰らないで！私、二人っきりになりたいの！」

ジーク

「エリス…分かった。お前の気持ち、受け止めよう」

ジーク

「本当？私を女にして！！どうにでもしてえええ！」

エリス

「ジーク！うるさい！！」

そしてエリスは顕微鏡に集中し、コレットは配膳の準備を始める。

一人の男は寂しげな背中のまま、とぼとぼと扉へ向かって行った。男の心は誰にも見えない。ちよっぴり寂しくて涙している心も

- - - Siegfried Side View End - - -
- - - - -
- - - - -

第十六章 火酒

第十六章 火酒

- - -
- Another Side View - - -
- - -

草原をコロコロ転がって時間を過ごす。退屈だ。あれ程引き締めて、覚悟も決めたのに、時間が経つともう緩む。精神と言うのはやはり人に与えられた特別なものだろうか。だとしたら人間には計り知れない大きなもの。とてもこれを自在にコントロールというのは簡単なものじゃない。今の自分に出来るのは引き締める時かの判断とそれに応じた集中力。気が抜いて良いところでは抜いておかないとパンクしてしまう。

リアン

「暇だなあ。ご飯も非常食ばかりで飽きちゃったし。でもやっぱり待つなら草原じゃないとなあ」

待ち伏せ。必ず来る。問題はどの位の時間、こうしていればいいのか。

- - -
- Another Side View End - - -
- - -

時は夕刻。一人の女性が城の前に立つ。急いで来た為に彼女は息を切らしている。しかし周りの兵に礼することを欠くことなく、足早に城内に入る。周りの兵士からは驚きの表情、安心の表情、喜びの表情と肯定的な様々な表情が迎えてくれる。皆、彼女を待っていた。そして心配していた。それは彼女が行動で作り出した信頼関係からなるものだった。

真っ直ぐ謁見の間へ向かう

近衛兵

「フィオネ様！南の調査へ向かわれたと聞いておりましたが、もう戻られたんですか！！」

フィオネ

「ああ。先刻戻った。リシア様とお話がある。今は可能だろうか」

近衛兵

「ただ今、ジーク様と第七会議室で会議中でございます！しかし調査隊が帰還した折には直ぐに御案内するように承っております！こちらへ！！」

フィオネ

「その会議室なら分かる。私一人で行ける。貴方はこの謁見の間をしっかりと守ってください」

近衛兵

「了解しました！！！」

相変わらず彼は元気だ。ずっとカイクとティアとの3人旅だったからとても新鮮だ。会議中は気がひけたが、リシア様が調査を重視しているのは分かる。真っ直ぐに向かった。扉を叩く。

フィオネ

「フィオネ・シルヴァリア、只今戻りました」

リシア

「入れ」

フィオネ

「失礼します」

扉を開けると煙の臭いが鼻についた。煙草の臭いは好きではない。

リシア

「フィオネ！よく無事で戻った。大義であつた」

フィオネ

「有難きお言葉」

リシア

「そう堅くなるな。それよりカイクとティアはどうした？途中戻った兵士のいう『ユース』とはティアのことだろう？まさか何かあったのでは……」

フィオネ

「いえ、御心配には及びません。2人は現在、元ルキウス邸におります。申し訳ありませんが御足労いただけませんか」

リシア

「なるほど。ここにはティアのことを知っている者も多いからな。

よし、直ぐに行こう。ジークもくるか」

ジーク

「当たり前だ。俺にはカイクに男娼になるように説得するという大仕事がある」

フィオネ

「男娼！　いつたいなぜそのような話が…」

リシア

「この男の言葉は気にせずとも良い。それよりも疲れているところ悪いが直ぐに行くぞ」

ジーク

「リシア、頼んでおいた火酒はあるだろう。3つ、4つ出してくれ」

リシア

「こんなときに酒か」

ジーク

「こんなときだから酒だ。あいつに火酒奢る約束もあるしな。あいつも飲みたがってるだろう」

リシア

「分かった」

そしてリシアは呼び出した召使から火酒を受け取り、ジークに渡す。直ぐにルキウス邸に向かう。リシアとしてはフィオネに休ませたい気持ちがあったが、彼女は断るだろう。まだ名を覚えてからそう長い付き合いとは言えないが、彼女の任務に対して、いや信念に対する真っ直ぐとした気持ちは伝わっている。それを尊重するのも彼女の為だろう。

上層にあるルキウス邸には直ぐに着いた。フィオネは戸を特殊なリズムで叩く。合図らしい。

フィオネ

「私だ。リシア様とジーク殿もいる」

戸が開かれる

ジーク

「よう！久しぶりだな。やつぱり生きていたか」

カイクム

「なんでジークまでいるんだ？」

ジーク

「つれないこというなよ。嬢ちゃんにも会いたかったしな」

カイクム

「先ずは入ってくれ」

カームはそう言つて一階の一室に案内した。そこにはティアが足をばたばたさせて座っていた。

ティア

「あー！ジークさん、リシア様！お久しぶりです」

リシア

「本当にティアか。フィオネの部下の報告を疑う訳ではないが、本当に生きていたとはな」

カ
イ
ム

「疑うのが自然だ。俺だって今でも理解できない」

ジーク

「よかったなあ。愛しの彼女が生きてて。これは差し入れとしてエリス特製・超強力精強剤を用意しないとな」

ティア

「えっ！えっ！ええええええええええ！」

カ
イ
ム

「ジークは黙ってくれ。ティアもいちいち真に受けるな」

フィオネ

「……」

リシア

「……さっそくで申し訳ないが、簡単に報告を聞かせてくれないか」

カイム

「ああ、そうだな」

カイムは簡単に旅について話した。4人構成での状況は先に返した隊員から聞いているだろうから、簡易的に作成した地図を見せて南の森以降の状況を説明した。ティアの記憶がないこと、いつから森にいたのか分からないこと、陸地には動物には一切合わなかったことを話した。結局は調査と言ってもわからないことだらけだが……そして南の湖で収集した液体を見せた。中の水は数日の帰還の旅で腐敗したような臭いを出していた。危険物の可能性も示唆し、それを机に置いた。それを手にしたりシアは迷わずに臭いを嗅ぐ。

カイム

「お、おい！まだ何かわからないものだ。簡単に手を出すな」

リシア

「分かっておる。だが恐らく北と東の調査隊が採取した液体と同じだな」

カイム

「他でもみつかっているのか」

リシア

「ああ。カイムの話の通り、とてつもなく大きく、先の見えない湖という報告を受けている。それらの情報を元に一部地図が作らせたが、どうやらこの世界はこの水に囲まれているようだ。もっとも西の調査隊はまだ戻っていないが」

カイム

「そうか。何かわかっているのか」

リシア

「今のところ触っても飲んでも人体に異常はでていない。低温保存で腐敗は防げるようだ」

カイル

「飲んだのか？」

そしてカイルはジークを見る。目を反らしたところを見るとやはりこいつか。

ジーク

「お前もリシアみたいな反応するな。女々しくなりやがって。これじゃあ男娼は務まらないぞ」

カイル

「だれが男娼なんてするか」

ジーク

「おっ、そうだ。これはこの前の火酒だ。やっぱり代わりのオズが
いいか？」

カイル

「最後の一言が無ければ気が効くで済んだのにな」

ジークは言葉を見捨て勝手に棚を漁り、グラスを5つ取り出す。

ティア

「あつ、ジークさん私がやりますよ」

ジーク

「嬢ちゃんも疲れてるだろ。いいから座ってろ」

フィオネ

「せっかく用意してもらって悪いんだが、私は遠慮させてもらっ
リシア

「フィオネ、そう言うな。無事帰還した祝いだ。一口で良いから飲

んでくれないか」

フィオネ

「は、はい……」

ジークは5つのグラスに均等に酒を注ぐ。

ジーク

「ではカイクとフィオネ、そして嬢ちゃんの奇跡の生還に…乾杯！」
それぞれ

「乾杯」

かちゃんとグラスが鳴り、それぞれが呑む。

ティア

「うー…苦くて熱いですね」

カイク

「そう言えばティアは酒は初めてか」

ティア

「いえ、お料理のお酒は少し味見したことがあります、こんなに強いのは初めてです」

ジーク

「この強い味が火酒だ。大人になれる。嬢ちゃんの胸も大きくなるぞ」

リシア

「えっ！それは誠か？」

カイク

「リシア、食いつくな。フィオネも何意識してる？」

ジーク

「カイク、女性というものは常に自分の胸に疑問と葛藤を持っているのだ。そこに道標を作ってやるのが男の義務ってものだ」

カイル

「お前の義務は軽くていいな」

女性陣が頑張つてグラスを空にしている。あれほど遠慮していたフィオネが一番早く空にした。

ジーク

「おお！飲め飲め」

カイル

「丸く太らせて食う魔女の童話であつたな。ジークに娼婦にされるぞ」

ティア

「ええ！そうなんですか」

ジーク

「おい、ネタをばらすな。酔えば性の味も占めれるつてものだ。カイルも御無沙汰だろう？それとももうこの御二人と？」

リシア

「本当か！カイル！お前そんなことがあつたら……」

カイル

「本気にするな。お前ら酔いが早すぎる。もうやめろ、話を戻すぞ」

しかし女性陣はもう酔いつぶれて話どころじゃない。フィオネはまだ頑張つて飲もうとしている。嘆かわしい……

仕方が無く、3人にこの家で適当に泊まるように言い、ジークと別室に移動した。

カーム

「さて、今度はこの国について話してもらえないか」

ジーク

「ああ、そうだな…まず調査についてだが、この都市の位置は北寄りにあるらしい」

カーム

「調査隊の帰還時刻からの判断か」

ジーク

「そうだ。東の食糧が確保した時点で直ぐに東の更に奥と、北・西は直ぐに調査隊を出発させた。馬の関係から南は少し遅れての出発になったが、西以外全員無事に戻っている。動物の発見には至っていない。魚くらいだ」

カーム

「動物はかなり少ない、又はいないようだな」

ジーク

「ああ。最初噂になった鳥も見間違いだろう。都市が落ちて間もない頃の噂だしな」

カーム

「西の調査隊はどのような構成だ」

ジーク

「貴族の私兵団だ。東・北・西全て同じ貴族が担当している。リシアは信頼できると言っている。だがあまりにも西側は帰りが遅い」

カーム

「その貴族が西の情報を隠蔽している可能性は？」

ジーク

「リシアはないと思っているが、俺は当然睨んでる」

カーム

「だろうな」

ジーク

「そろそろ西にまた調査隊を派遣したいと考えていたところだ。帰ってさっそくで悪いが、カイルが担当してくれないか。他は信用で
きん」

カイル

「信頼の御指名はありがたいが、俺はもう一つやりたいことがある」
ジーク

「羽根付きか」

カイル

「ああ」

ジーク

「それについても話しておこう。カイルにできることは思えないが。調査も明日直ぐ行けっ
てわけじゃない。少し休んでからで構わない」

カイル

「わかった。考えておく。羽化病について何かわかったのか？」

ジーク

「まあ、エリス先生の推測になるがな」

そこでジークは先日、治癒院を見てきた光景を簡単に説明した。現状では伝染の可能性が低いことやラヴィリアやコレットが環境の改善に努めていることなどを。簡易血液検査の結果も普通の人間と変わらないということだった。

ジーク

「こんなもんだ。天使様や神の御考えとは結び付きそうにないな」

カイル

「そんなに直ぐに結果がでると思っていない。関係が無いことも充分考えている」

ジーク

「とりあえず治療院に顔だしてみろよ。3人はそこに泊まりこんでいる」

カイル

「そうだな」

そして2人は昔話や近況を交え、久しぶりの空気を堪能した。とても心地よい夜だった。

第十七章 変化

第十七章 変化

目を覚ます。久しぶりの火酒は少しきいている。だが吐くほどのことではない。予定通り治癒院に顔を出してみるか。

昨日5人で話をした部屋を覗いてみる。まさかとは思ったが、やはり酔いつぶれて眠った3人が居た。3人とも疲れているだろう。そつとしておくことにしよう。ジークは昨夜遅くに帰宅した。リシアが城に居なくてもその理由は分かるだろう。城が騒ぎになることはない。暫くその3人の表情を部屋の片隅の椅子に腰かけ、眺めていた。組織に身を置いていたから女は見慣れていた。しかし、この3人は娼婦に劣ることなく魅力的だ。外見もさることながら、中身も惚れる。

リシアはこの短い間に随分と成長した。今では政治家としてジークが認めるほどになった。しかしやはり、この幼い少女にこのまま王という道を歩ませるだけでよいのか、とも思う。王というのはその続柄上、自由はない。今のように民を、民をと全ての人に尽くすことは誰にでもできることではない。しかしその立場を得るには私というものを少なからず排除しなければならない。苦しい選択も多いだろう。あのルキウスがしなければならなかった選択、それ以上のものがこの先待っているかもしれない。「国が変われば王族も滅ぶべき」最初ジークはそう言った。けど大切なのは滅びるかどうかではなく、王族も変わるかということだ。願わくばリシアには国王

としての立場のまま、普通の幸せも送ってほしい。

フィオネも使命とか責任とかそういうものをたまには降ろしてほしい。彼女が彼女である為に、それは欠くことの許されないものだと思う。兄の遺言通り、自分の剣を自分の意志でしつかりと振っている。けどフィオネの兄はもう一つ大切なことを伝えきれなかったようだ。剣の振る大切さと同じくらい、剣を降ろして休むことも大事だということを。フィオネはずっと最前線の最も危険な場所にいた。羽根狩りも、奇跡直後の配給の仕事も危険極まりない。その後も未知の大陸調査と命をずっと懸けていた。俺はフィオネを失いたくない。残される者の辛さを味わうのはもう十分だ。フィオネには人望もある。もっと違う安全な方向へ進んでほしい。そこでも剣を振る道はあるはずだ。

ティアはこれからどうなるのだろうか。昨夜ジークから聞いた話では既に天使がいることは広まっているらしい。多くの者はティアを見ても、とても天使だとは思わないだろう。しかし城には少なからずティアが天使であることを知っている者はいる。いくらリシアが諫言令を布いたとしても人はやはり人だ。必ず表立ってくる。そうするとしばらくティアは普通の暮らしはできない。やはり狂った者に命を狙われる可能性もある。リシアの力添えて特別な所に居を構えるか、新しくこの外殻大地に家を建てるか。どちらにしても俺が支えなければならぬ。この命もティアにもらったものだ。それは構わない。大切な女だ。だが、なにかが引つ掛かる。まだ言葉にもできない霧のようなものが少し、残る。それでいいのか、という疑問のような霧。

さて、そろそろ治癒院に行こうかと立ち上がると、その音でフィオ

ネが目を覚ます。

フィオネ

「カイルか…」

カイル

「起こしてすまない」

フィオネ

「うう…飲みすぎたようだ…」

カイル

「当然だ。女が火酒をあんなペースで飲むもんじゃない」

フィオネ

「猛省する。リシア様からの命をいただきたいが、さすがにこのお疲れの様子では起こしてはよくないな」

カイル

「仕事はいい。リシアも起きたらそう言うだろう。一日ゆっくり休め」

フィオネ

「カイルはどうするんだ？」

カイル

「俺は治癒院を覗いてこようと思う」

フィオネ

「治癒院！私も行く！」

カイル

「静かにしろ、声がでかい」

ティアとリシアを見るが、起きる気配はない。ティアに至ってはごによごによと寝言を言っている。2人とも幸せそうな寝顔だ。ふと、フィオネに「火酒を飲んでも胸は大きくならない」と真実を伝えようかと思ったが、やめた。少し可哀そうな気がした。

カイル

「体調に問題ないならついてくるのは構わない。しかし辛い現実がある。それでも行くか」

フィオネ

「無論だ」

カイル

「分かった」

2人に書置きを残し、邸を出る。見慣れたはずの町並みも久しぶりに見ると感慨深い。それは隣のフィオネも同じようだ。また後でルキウスとステイナに酒でも届けてやるか。下層まで歩いてても食はほとんどいなかった。リシアとジークの政策が上手く機能しているのだろう。牢獄にはまだいるだろうが、森からの食糧調達が上手く言っているようで、食うには困らないようだ。以前よりも食糧は豊富なのかもしれない。最も果物・野菜に限られるが。ジークが言うにはもうすぐ配給を止めるらしい。確かにこのまま国から食糧を恵んでもらうようなことが続けばどんどん怠けていく。人である本質を考えての政策だと思った。

相も変わらず綺麗な治癒院が見えてきた。以前見かけた兵士もいる。

身なりの整った兵士

「あつ、貴方は…随分とお久しぶりです」

カイル

「ああ。少し出ててな」

身なりの整った兵士

「カイル様でよろしかったでしょうか？そちらの女性は確か以前に

…」

フィオネ

「フィオネ・シルヴァリアです。以前何度か防疫局強制執行部特別被災地区隊隊長としてこちらに伺ったことがあります」

カイル

「リシアから聞いていないかもしれないが、彼女も通してほしい」
身なりの整った兵士

「いえ、フィオネ様のお名前もお聞きしています。ご案内します。」

そういつて兵士は先を歩く。フィオネは畏まった一礼をし、後ろに続いてくる。中に入るのはフィオネも初めてのことになる。この綺麗な外層がほんの一部分ということだけでも彼女の精神は傷つくだろう。中に入り、突きあたりを右に曲がった扉の錠を開ける。兵士はどうぞ、と一言いい持ち場へ戻って行った。

フィオネ

「聞いた通りのところだな…」

フィオネには旅の途中、治癒院の様子を話していた。フィオネには精神的に厳しい内容である為、その話は何度も逸らそうとしたが、フィオネの決意は固かった。自分の行ってしまった行動としっかりと向き合おうとしている。その熱意に負け、フィオネにはこの凄惨な環境は既に話していた。

カイル

「いや、様子が変わってる」

フィオネ

「子どもが…」

幼い羽付き

「お姉ちゃん達もエリス先生のお友達？」

フィオネ

「あ、ああ。そうだよ」

幼い羽付き

「そっか！だったら私ともお友達になろう」

幼い少女の顔には牢屋には似つかわしくない笑顔が広がっている。それ以前に何故か自由に羽付きが牢屋を出入りしている。感染がないことがはつきりしたとはいえ、ここまで自由にさせるとは。ジークが言っていた環境改善とはこのことか。少し前来た時とは全く雰囲気が違う。照明そのものは同じような明るさだが、人々から絶望を拭い去るだけでこうも空間を変えられるのか。エリスも含め、あの3人が頑張ってくれたのだろう。

恐らくいると思われる看守室へ向かう。そこも子どもを中心に自由に出入りしていた。

カイル

「邪魔する」

エリス

「カイル…！もどつてきてたの？」

コレット

「カイルさん、お久しぶりです」

ラヴィリア

「カイル様もフィオネさんもお元気そうで何よりです」

エリス

「カイル、怪我は？」

カイル

「大丈夫だ、怪我をするようなことはなかった」

フィオネ

「ここにいる皆さんには本当に感謝をしている。防疫局の一人の隊長として心から礼を言う。ありがとう」

エリス

「別に貴方のためじゃない」

コレット

「エリスさん！気にしないでください、フィオネさん。羽根狩りという罪は貴方だけではありません。私たちも同じです。一緒に背負いましょう」

ラヴィリア

「そうですよ。私もフィオネさんには配給の時など、とてもお世話になりました。すこしでもフィオネさんの為にもなるならとても嬉しいです」

フィオネ

「ありがとう…ありがとう」

カイル

「よかったな、フィオネ」

エリス

「それで何をしにきたの？」

カイル

「いや、特に用という訳ではないんだがな。俺から頼んだ話だ、何か手伝えることはあるかと思って」

エリス

「ふーん…なら今晚は家に帰ろうかしら。ねっ、カイル」

カイル

「何を企んでるんだ？それよりもエリスは最初、この研究には乗り気ではなかったじゃないか？」

エリス

「別に。やらないなんて言っていないわ」

カイク

「…確かにな」

エリスらしいといえばエリスらしい。突き離れたように見せてもしつかりと俺の力になってくれてる。いつもこいつは俺を第一に考える。自分を『買って』からもそれは変わっていない。依存とは違う…何とも言えないが、とても良い方向へ進んでくれていると感じる。

カイク

「それで今何をしてるんだ？」

エリス

「羽根付きと健常者の比較」

カイク

「ほう…どうやってるんだ？」

エリス

「まだ血液検査と身体検査くらい。解剖はまだ先ね」
ラヴィリア

「解剖って…」

エリス

「ちゃんと死体をつかうわよ」

カイク

「それで羽根付きと健常者の違いはあったのか？」

エリス

「羽根があるくらい」

カイク

「真面目に答えてくれ」

エリス

「真面目よ。血液も身体構造も同じ。違うのは羽根があつて、そこには神経が通つてると言うこと位」

カイク

「神経？」

エリス

「それも普通の事。触られると髪を触られたような感じがするみたい。あと痛みとかはラヴィリアの方が知ってるわ」

ラヴィリア

「はい…私は何度も羽根を切り落としていましたが、身体の一部を切り離したような痛みでした」

カイク

「そうか…」

エリス

「小動物もいるんでしょ？今度連れて来て」

カイク

「おい、またティアを研究に巻き込むのか？」

エリス

「研究してつて頼んだのはカイクじゃない。大丈夫、解剖する時は一応カイクに聞くから」

カイク

「…分かった。その代わりティアの意思は尊重してくれ」

エリス

「なるべくね」

だがエリスなら信頼出来るだろう。今までティアを診てきた科学者は仕事として命令されてしていた。しかし今のエリスは何も得する事がないのに協力してくれている。あるのは信頼だけ。ティアの恐怖心にもよるが、任せるのはいいだろう。

カイル

「それで俺に出来ることはあるか？」

コレット

「1つお願いがあります」

カイル

「なんだ？」

コレット

「牢の一室を羽化病患者さんが集まってくつろげる部屋にしたいのです。少し力に仕事にもなりますので手伝ってもらえないでしょうか」

カイル

「ああ、分かった」

フィオネ

「私も手伝おう」

カイル

「いや、いい。女には力仕事は向いてない。ラヴィ、フィオネを案内してくれ」

ラヴィリア

「そうですね。ではフィオネさんには子ども達の遊び相手をお願いしてもいいですか？」

フィオネ

「遊び相手……」

ラヴィリア

「嫌ですか？」

フィオネ

「いや、子どもと遊ぶという機会がなかったから……その、上手く出来るか自信がない」

カイル

「ラヴィ、フィオネを頼むぞ」

ラヴィリア

「ふふ。分かりました。では行きましょう、フィオネさん」

コレット

「では私達も仕事を始めましょう」

カイル

「ああ」

治癒院は当然大人もいる。しかし多くの大人は実験の為に既に殺されている為、数は少ない。暴力的な者も数としては数人だった。それをラヴィリア達がしてこなかった方法（脅迫）などして黙らせた。後は無邪気な子どもが多く、この治癒院という空間を楽しんでいた。まるで孤児院だ。以前は牢獄でナイフを握ったことがある少年も、少年として在るべき姿へと戻っていた。

確かにここは自分にとってもなかなかやりがいがある。3人とフィオネが意欲的に関わってくれるのも分かる。そして同時にそんな場所を作ってくれた3人に感謝する。

第十八章　もう一人

第十八章　もう一人

また荷物を馬に乗せる。馬は以前旅をしたもの。愛着も若干ながら湧いている。

先日、リシアから再度調査の依頼があった。戻りが遅い西の確認である。何かあったのかもしれないから充分に気をつけて欲しいとのことだった。調査メンバーは俺とフィオネ、そして何故かコレットの三人。少数を提案し、フィオネと2人が妥当と思ったが、話を聞いたコレットが我儘を言い始めた。コレットを知る者は、誰もが認める程の頑固というのは分かっている。連れて行かないなら1人で行くという始末。仕方なく妥協した時、もう一人我儘を言い始めた。ティアだ。珍しく…というより最近是我儘も覚えたようで、こんな時も困らせる。だがここはエリスが味方してくれた。治癒院にティアを招待し、隙をみて眠り薬をいれた。いつか俺がティアにやられた手だ。これなら文句ないだろうと勝手に解釈した。最もエリスにとっては被験者が逃げないようという行動だと思うが

フィオネ

「隊列は三角形になるな」

カーム

「ああ。先頭はとりあえずコレットだな」

コレット

「私ですか！？私は馬車はあっても馬は直接乗ったことはありません
ん…」

カイル

「だからだ」

フィオネ

「コレット殿、実は馬での状況確認は1番前が楽なのです。勿論最も重要な方向でもありますが」

カイル

「あと馬は慣れるまではキツいからな。身体痛むのは覚悟しておけ」
コレット

「そ、そんな…」

カイル

「自分でついて来たんだろ？大丈夫だ、馬自体は1日で慣れる」
コレット

「はい…」

カイル

「あと何度も繰り返すが、絶対に俺とフィオネの言う事は聞けよ」

そして3人は西へ向かった。やはり最初のコレットの馬裁きは酷く歩くのもままならない状態だった。…実は初日の自分もこうだったのはフィオネに口止めしている。

だがチェス同様、直ぐに馬を走らせる事が出来た。元々センスもいいし、元盲目だから身体で感じ取れるのかもしれない。昼になった頃にはすっかり慣れていた。

フィオネ

「少しここで休もう」

その一言で休憩になった。馬の上は慣れたようだが、陸に起きるとコレットは小さく悲鳴をあげた。筋肉疲労だろう。

カイル

「だから足で纏いになると言っただろう」

コレット

「この位、平気です。馬も随分と気持ちの良い乗り物ですね」

カイル

「強がるな、揉んでやる。足出せ」

コレット

「えっ、えっ……」

フィオネ

「カイル！何をふしだらなことを考えてるんだ！」

カイル

「いや、そんなつもりは……」

フィオネ

「全く、カイルは…コレット殿、私が揉みましょう」

下心は全くなかったのに、完全に変態扱いだ。女の被害妄想の前に男はなす術もない。男は変態の烙印を押されている為、女性が性で黒と言えば事実関係なく黒くなる。いつかと思ったが、やはり人間は女が強くて来てる。

カイル

「もう行くぞ。日が落ちるまでの時間がなくなる」

フィオネ

「そうだな。今からならあと3時間は走れる」

コレット

「も、もう行くのですか」

カイル

「嫌なら帰れ」

コレット

「帰りません！」

少し怒ったようだ。だがコレットの身を考えればこそ、少しキツ
い言い方をしてしまう。もう帰す訳には行かない。ならば最後まで
守る。後は俺次第か。

暫く馬を走らせる。遠く右前方に岩山が見える。気になるものでは
あったが、先に出た調査隊は真っ直ぐ西へ進むように指示をしてい
たらしい。この外郭大地の果てがどこまであるのか、という視点も
いれた調査の為、曲ってあの岩山に行くのは考えにくい。そう、考
えていると突然、コレットが叫んだ。

コレット

「前に何か見えます！」

コレットの言葉に反応し、カイルもフィオネも前方を注視した。確かになにか見える。砂埃のようなものが見える。それも自然の動きとは少し違う。

フィオネ

「あれは一体…」

そう言ってる間に砂煙はどんどん近づいて来るように見える。いや、確実にこっちへ向かっている。

カイル

「西の調査隊か」

フィオネ

「それ考えるのが自然だが…しかし馬があそこまで砂煙をあげるか？」

砂煙の中に異様なものがポツンと見える。一瞬で全身が警戒に包まれた。

カイル

「フィオネ、構えろ。コレットは下がれ。何かあったら城に戻って報告するんだ！」

コレット

「え、え…」

コレットはもう平常心はない。カームは馬から降りてナイフを構える。フィオネは馬の上から剣を構える。そして2人は前方の砂煙に少し近づく。コレットから離れる為だ。

轟音が聞こえて来た。今までに聞いた事のない、恐ろしい音。そして確信するほど見えた。あれは西の調査隊ではない。ノーヴァス・アイテルにいない、初めての動物……人間に近い動物。それが乗り物に乗っている。

音はどんどんと大きくなり、はつきりとその姿が見える程になったがまだ人間か分からない。物凄いスピードだ。

迎え打つか

いや、まだ敵意も分からない

しかし西の調査隊が襲われた可能性もある。

まずは守る。

カイムはフィオネとコレットを守ることを第一に考え、2人の位置を確認した。そして前方を再び見た時、既に相手は目の前にいた。何も出来ずに佇むカイムの前方7m程のところでソレは止まった。

????

「ふゝ。あつつい」

そう言つて仮面を脱ぎ取る。カイムと差して変わらない、恐らく青年と思われる顔をだす。若く見えるタイプだろう。少年にも見えなくはない。

やっつとで声を振り絞る

カイル

「お前は…誰だ」

???

「自己紹介はちょっと待ってね♪先ずは立場を確認しなきゃ！女の子は馬から降りて武器を後向いて投げて。勿論君も」

カイル

「なんのつもりだ」

???

「なんのって僕が襲われないようにするためだよ」

間合いが遠い。少し前に出て詰める。

???

「動くな！」

ビクリとしてカイルは止まる。相手と真面に見つめ合う形になる。

???

「僕は10秒で君たちを殺せる。言う事きいてくれないかな？大人しく武器を捨ててうつ伏せになってくれればいいんだ」

その瞬間カイルは相手に真つ直ぐ突進するように駆け寄る。が、直ぐに足に痛みが走りそのまま崩れ落ちる。

カイル

「うつ…これは…」

血だ。相手は何もしていないのに攻撃された。焼け付く痛み…いや、何かを持っている。

????

「やっぱり一発は撃たなきゃダメかあ。これは銃って言って、君達の使う弓矢のすっこいものだと思ってくれればいいよ。だからまずは言う事聞いてくれないかな？」

フィオネはカイルに駆け寄ろうとする。

カイル

「来るな!!」

あれが弓矢？勝てるはずが無い。

カイル

「こいつの言う通りにしろ」

????

「ありがとっ、ごめんね、撃っちゃって。じゃあ、先ず、後ろ向い

て武器を遠くに投げて！」

カームはおとなしく従った。それに倣って2人も馬から降りてフィオネも剣を遠くに投げる。どうすれば2人を助けられる。あいつには強力な弓矢がある。それ以外もあるかもしれない。不意を突くしかない。

???

「うん！ありがとう！じゃあ、今度はうつ伏せになって、頭の上で手を組んで。ちゃんと下見ててね」

完全に抵抗できない構え。いや、機会はある。腕をロープで結ぶはず。その時に不意打ちを喰らわせば…

ガチャ。

冷たい感触が手の周りに感じる。動けない。

カーム

「おい！これは何だ！！」

???

「ん？手錠だよ？手錠も知らないの？はい、キミも終わり！君、武器持つてるけど軍人？こんな可愛い子も剣使うんだあ」

軽いふわふわとした口調のまま、3人に手錠というものをかける。そしてコレットとフィオネをカームの近くまで連れてくる。そしてカームの足に布を巻きつけ止血をする。

リアン

「ふう、やっと落ち着いた！じゃあ、お待たせの自己紹介ね！僕はリアン。海を越えてここに調査に来ました」

カイル

「海？」

リアン

「ああ、都市浮いてたもんね。海ないか。とりあえず遠くから来たってことで、それで君たちは？」

カイル

「…」

リアン

「僕は自己紹介したんだからそっちもするのが礼儀だよ」
コレット

「私はコレットと申します」

リアン

「ありがとう、コレットちゃん、よろしくね。キミは？」
フィオネ

「フィオネ・シルヴァリアだ」

リアン

「フィオネちゃんね、よろしく。それでキミは？」
カイル

「…」

リアン

「話してくれてもいいじゃん！減るもんじゃないし」
フィオネ

「カイルという。さっき調査と言ったな？ではこちらの都市について知りたいということだな」

リアン

「ん、正確には都市も含めて、この大地もだけどね」

フィオネ

「では情報交換ではどうだ」

カイル

「フィオネ！何を言ってる！国を襲われかねないぞ」

フィオネ

「分かっている。どちらにしろ私たちの国ではかなわない相手だ」

リアン

「これも御縁！仲良くしようよ。少なくとも僕は襲おうとは思っていないよ」

カイル

「信じられるか」

リアン

「教えてくれないなら君たちを殺しちゃう。そしてまた来る誰かに聞くよ？」

フィオネ

「貴様、まさか西の調査隊を…」

リアン

「あれは…事故だったんだ。反省してる。だからなるべくなら君たちを殺したくはないんだよ」

フィオネ

「調査隊の人数は？特徴は？」

リアン

「4人の体格のいいお兄ちゃん。一番上はおじちゃんかな。キミたちは着てないけど、鎧身につけてたね」

フィオネ

「お前…」

リアン

「ごめんね。本当に謝るよ。だからこそもう殺したくないんだ」
コレット

「そんな人殺しの言うことは聞けません！貴方は天使様から罰を受

けるでしょう」

リアン

「えっ、そうなの…やっぱりここにはいるんだ…天使…」

リアンは柔らかい雰囲気を一瞬壊し、本当にうるたえた。

カイク

「分かった。話せる範囲で話す。その代わりそっちが先に話せ」

フィオネ

「カイク！こいつは…」

カイク

「分かってる。俺も人を殺して生きてきた。こいつと同じ立場なら迷わず殺してる」

コレット

「カイクさん…」

リアン

「…目が違う。迫力がある。生きてる。そういう世界、か。」

カイク

「何を言ってる？」

リアン

「うっん、なんでもない。じゃあ、僕から話す。でも話を聞いても話してくれなかったら本当に殺しちゃうからね」

スピントフ？ 世界の実状（前書き）

この話は第五章・第六章間の時間の出来事として書いています。

スピノフ？ 世界の実状

スピノフ？ 世界実状

寝ぼけた瞼を水でこじ開ける。今日で5日連続泊り込み。調査の為には一度は家に帰らないといけない。と、言うより帰りたい、若しくは遠くへ早く消えたい。昨日も結局全員帰った、決められた時間通りに。

ソファに身を沈める。疲れが芯から溢れるのを感じる。肉体からではなく、精神からくる疲労。今の仕事について初めて部下をもった。下にいた時は理不尽な上の命令に苛立ちを感じていたが、上にたっても無能な部下に疲弊させられる。自分から監視がいいと言ったくせに監視方法が分からないと喚く。今度は正確にする為にマニュアルを作るべきだと訴える。マニュアルと言うのはただのいざという時の証拠。大事なそこに責任者である俺の印があると言う事つまり自己防衛。それが終われば今度は歴史文献の収集なぞ勝手にやり始める。結局は時間潰し。他人事。面倒を人に押し付け、押し付けられたら精一杯逃げる。これが人間だ。死ねばいいのに。

テレビをつける。時間としては、どこもニュースしかやっていないような朝。見慣れた初老の男が、如何にも「決意の顔」を演じている。こんな表情を自在に出せるからこそその政治家なんだろう。

初老の男性

「確かに皆さんが危惧するお気持ちは分かります。しかしご安心ください。政府としては都市が落ちた時から動いています。私自身も粉骨碎身、安寧秩序の為に労力を惜しまないつもりです」

レポーター

「一部報道では随分と少数での調査と聞いていますが、何か訳があるのでしょうか？」

初老の男性

「政府は有能な考古学者や天使会の意見を重視しています。最も有力な説としては再び神による選別が行われるということです。国民の皆様には不安を抱かせて申しわけないが、その為にはあまり表立った事をして神の逆鱗に触れる、という事だけは避けなくてはなりません」

レポーター

「つまり政府としては『選別論』を重視している事ですね」

初老の男性

「最も現実且つ、最悪の想定に基づいて有識者がだした論です。これを無視した行動は取り返しのないことになります」

レポーター

「しかし一方では我が国は世界のリーダーとして結果を出すべきという声もありますよね」

初老の男性

「勿論、その声にお応えする為にも必ず結果を出します。他国では残念な事に、この問題には関与しない姿勢を決めている国も存在します。しかし我が国は誇りにかけて取り組まな…」

面倒になってリアンはテレビを消した。一般人には大した演説だと評価されているだろう。勿論、皮肉として。しかし内情を知っている者は心底この腐った世界に嫌気がさすものだ。慣れればそうでもないようだが。

数百年前、世界は幾つもの小国が争いを繰り広げていた。新たな発明の知恵を与えてもそれ武器に変えてしまう。そんな人々に腹をたてた神が秩序を取り持っていた天使を引き上げてしまったと言う。更には見せしめとして小国の一つ、ノーヴァス・アイテルという国を浮かべた。それによって争いは消えた。恐怖による神の管理だ。考古学者によつては神ではなく、悪魔が気まぐれで創つたのがこの世界だという。その説は根強く、結局は人知を越えたものに管理された世界と言うのが共通の認識だ。

こうした歴史は初等教育を受ける前から親から教わるものだ。決して忘れてはならない教訓として。最も数百年前はパタリと止まった争いもその後少しずつまた争いを始めていった。そして今でも争いは絶えてるところが増えてきている。

そんな今、見せしめの国を墮とした。多くのものはまた神による選別が行われ、再び見せしめに一国が生贄にされると考えている。所謂選別論だ。生贄を恐れた小国は争いをやめたり、墮ちた国へ近づかないようにしている。

しかし人は不明なものに怖れる。神を怖れるように。そこから生み出される心理は「誰か様子みてこい」ってものだ。自分は怖いから嫌だ、お前がいけ。そして何かわかったら教えてくれ。人とはこんなものだ。その考えと感情の狭間から生まれ墮ちたのがこの少数での調査隊だ。あまり大人数で動いて神のご機嫌を損ねないようにした配慮だそうだ。だが実際にはそんな調査に行く人材を集められ

なかつただけ。

監視、防衛、調査と様々な分野を入れると数百人規模で動いているというのが政府の公式発表だが、実際には十数名、調査員は俺一人だ。政府は先ず、この件に関わるものとして有能である事を条件にした。馬鹿が神を刺激してとばかりを受けないようにという判断だ。そこで有能と言われる馬鹿が集まる省庁の役人を使う方針にした。しかし役人というのは自分が何よりも可愛いもの、誰もが関わりを避けた。脅迫に負けた十数名が『有能な』調査隊の構成だ。最も俺は唯一志願した変わり者。だからこそ客観的に言える。役人も政治家も馬鹿だと。

俺はこの国が生贄になっても構わない。自分の死も恐れない。寧ろくだらない人間がのさばるこの世界は全て滅びればいい。調査は遊びの1つでしかないが、その遊びで世界が滅びるなら大満足だ。死ねばいいのに。全て…

スピンオフ？ 世界の実状（後書き）

リアンという名前はリアルという文言から捻りなく出したものです。
ロシアと被っているのが失敗…

スピントフ？ エゴ（前書き）

この話は第十章・第十一章間の時間の出来事として書いています。

スピノフ？ エゴ

スピノフ？ エゴ

熱いシャワーを疲れた身体に浴びせる。少しは慣れてきたと思うが、まだまだ身体はきつい。軍の中に身を投じて9日目。明日の訓練で終わる。

昔から一通りのことはこなせていた。運動神経も特別優れているわけではないが、劣っている訳でもない。中のやや上か。最もそれもガキと言われる歳まで。それからはずっと勉強に励んできた。

昔から貧乏で、金のない身で教育を受けるには人並み以上の学力を持たなければならなかった。最初のゴールは学力の高い教育機関に身を置くことだった。楽しみなんて何もない。遊び方も知らない。ただただ勉強に勤しんだ。そしてゴールに辿りついた。しかしそのゴールテープを切った後、どうすればいいか分からなくなった。人から「賢い」と認められる人間になれたが、この後どうすればいい？暫くはその疑問に頭を使った。そうだ、金が欲しくて欲しくて…そのために勉強をしてきたんだ。もう貧乏な日々は嫌だった。ただただ勉強をしていたのは金の為だった。そして次のゴールが金を得ることになった。優秀な教育機関に身を置いてもまた勉強を続けた。周りの人間も必死に勉強をしている。これが当たり前なんだ、そう信じていた。

そして彼は省の役人という『立派な』地位に身を置いた。金も約束

された。今までの苦勞と違って、今度は必死にならなくてもいい。最初は周りと同じように上からの命令を聞いていた。そして上の人間と同様に、決まった時間に帰る。とても楽だった。今までが嘘のように。

そして思った。金というゴールを越えた。あとはどうすればいい？何も思いつかない。欲しいもの？何もない。遊び方？分からない。そして気付いた。自分は優秀な人間ではないことに。自分が必死に勉強に勤しんでいても、他の人間は毎日つるんで遊んでいた。「お前らに未来はない」その時はそう考えていた。しかし違った。ただ勉強して、金を得て、上の言うことを聞く人形になって…苦しんで苦しんでやっと経った場所。けれど遊び方も分からない自分にはもうゴールすらも見つけられなくなった。いや、元々ゴールなんてないんだ。人の生きる意味なんてない。努力をしてもしなくても結局は死んで骨になって土になる。全くの無意味。人は無価値。死ねばいいんだ。

それから異名に謳われるような傍若無人の行動をしていた。屑ばかりの人間。そんなのに合わせていられない。全て価値が無いのならその無価値の為に考えても動いても意味が無い。

『調査員は軍に入り、身体を鍛えよ』久々に意味のある通達がかから来た。なるほど、一理ある。死ぬにしても生きるにしても「未知の大地に足を踏み入れました。そして死にました」ではつまらない。その通達には珍しく従い、今回国の軍事訓練施設に10日間身を置くことを決めた。本当は銃の扱いを覚えればいいという軽い気持ちで来たが、どうやら歓迎してもらえないらしい。「官僚が軍に来た」その噂は直ぐに広まり、軍人全員から可愛がられていた。

もう消灯時間は近い。早く部屋に戻らなければ折檻が待っている。シャワーの蛇口を締める。熱をもった身体を布で包み、手早く着替えを済ませる。そのまま歯を磨きに洗面所へ向かう。

体格のよい上官

「おい、官僚。そこで何をしている!」

リアン

「はい!入浴を済ませ、床へつく準備をしていました」

体格のよい上官

「何を考えている!もう消灯の時間を過ぎているぞ」

リアン

「はい…私の確認した時にはまだ余裕があつたのでまだ間に合うと思います」

体格のよい上官

「何だと…俺が嘘を言っているとしてもいうのか!…これを見ろ」

見せられた腕時計は僅かだが消灯時間を過ぎている。そんな訳はない。

体格のよい上官

「規律を乱すものは軍人以前に人として最悪だ。官僚はそういうことも知らないのか?」

リアン

「いえ、しかし…」

体格のよい上官

「今度は口応えか！よし、グラウンド50周、腕立て・腹筋・背筋500回ずつ、その後は朝まで滝に打たれてる！不眠だ！！わかったな！」

リアン

「了解しました」

体格のよい上官

「さつさと外に出ろ！夜間監視員にさばらないように見張らせておくからな、手を抜くなよ」

「はい。了解しました」

急ぎ立てられて外に出る。外に出るまで上官は睨みつけていた。

うつすらと笑いながら。時間は確かに確認していた。少しでもこちらに落ち度があればそれをネタに徹底的に扱われる。そんなミスはするはずがない。脳みそ筋肉バカのやることは予想つく。見せた腕時計を進めておいたただけだろう。勿論そんなことを指摘しても結果は変わらない。後1日、耐えなければ。あいつも死ねばいいのに。

~~~~~

不眠のまま訓練が始まる。体力も精神もボロボロ。だがここで少しでも目立つことをすればまた折檻が始まる。ここでの唯一の楽しみは射撃だ。最も実用的だ。調査員と言っても混沌の大地に向かう身だ。いざというときは武器は必要。上層部からは「神の怒りに触

れる恐れがあるため、武器の類は一切使うな」という指示が出ていた。だがそんなこと聞く気はない。既に銃を5丁、弾も困ることないほどに買い込んだ。ナイフも充分にある。ここでの有意義な目的は適度な運動、そして武器の扱いを学ぶことだ。だから射撃や組手は真剣に取り組んだ。それ以外は目をつけられない程度に抑えて臨んでいた。

その日一日も惜しむことなく嫌がらせは続いた。射撃では的の真ん中にあたらなければその度に腕立て100回、走りこみでは他の2倍はあるだろう重石を当たり前のように持たせ、朝食に続き昼食も抜き、壁登りでは上からわざと石を落とされた。

だが耐えるに耐え、最後の1日を、臨時訓練実習が終わった。そんな自分に優しい言葉をかける者もない。上官に建前の礼を述べても「そうか」の一言で終わった。人はどこにいても腐っている。上の者を目の敵にし、下の者を下卑た笑みで痛めつける。どこもそうだ。どこにも人間がいるのだから。

死ねばいいのに

~~~~~

翌日、痛む身体を堪え、省へ登る。時間どおりの到着だ。当然、調査隊の面々も揃っている。軍事訓練に行く前には歴史文献の整理と無人調査機のデータ解析、渡航船の準備など様々な仕事を言いつけて行った。しかし見てみれば何もかもが中途半端のようだ。ほと

んどが終わっていない。

リアン

「みんな、暫く留守していきなりでごめんね。ちょっと確認したいからきてもらっていいかな？」

A

「ああーお久しぶりです、隊長。どうしました？」
リアン

「ただの現状確認だよ、みんなもきてー」

B

「報告書はまだ途中なんで後で出しますよー」

リアン

「それはいいよ、簡単に聞きたいだけだから」えっと…まずは歴史文献の収集はどうだった？」

A

「それは俺らが担当ですね、まだ出来てません」

リアン

「ん？なんかあった？」

A

「天使会が重要機密書類だから駄目だった。隊長の許可がなくて動けませんでした」

リアン

「そっか。仕方ないね！じゃあ、無人調査機のデータはどうだった？」

C

「それは俺らだな。こちらも防衛省側が重要機密情報で、政治家10名の署名と隊長の許可が無いと渡せないって言われてね。いや、説得はしてたんだが…」

リアン

「大変だったねえ。それでどのくらい政治家の署名は集められたの？」

C

「いや、それは隊長の許可をもらってからじゃないと…」

リアン

「りょーかい。後でサインしとくね！で、次は…と。渡航船の準備！これは？」

D

「船は用意できました」

リアン

「おお！さっすがあ！じゃあこれは解決つと」

D

「いえ、しかし…渡航の許可には世界の国々の署名が必要だと。なにせ他国にも被害が及ぶ事象で、我が国の一存では無理だと」
リアン

「それは難しいねえ…どうしよつか？それも後で僕が考えておくよ」

その後の報告も「隊長のサインがないから」という理由で結局は何も進んでいなかった。仕方が無くリアンは口々に目を通すことなく書類に印を押すという作業に暫く時間を使った。「今回の件は私のみに全て責任があります」それを表す印を次々と押していく。
死ねばいいのに、みんな。

スピノフ？ 影

スピノフ？ 影

船乗り

「ではお帰りの際にはここに。船は待機しますが、ここに来れば無人調査機で確認できます。2日もせずにお迎えにあがれます」

リアン

「うん、分かったよ。ありがとう」

船乗り

「くれぐれもお気をつけて。特に…」

リアン

「『神様を怒らすな』でしょ？ 散々注意受けてるからわかってるってー」

船乗りは納得のいかないような表情を浮かべていたが、無視して上陸の準備を進める。遠くから見た限りでは普通の陸地とは大差なかった。

ここは『神の吐息』が溢れていた場所。現代科学をもっても理解出来ない不気味なものが蠢いていた。そんな浮遊都市の下に位置する大陸。昔、何度か調査隊が派遣されたらしいが、神の吐息で全滅している。非常に危険なものであり、天使会から「神の怒りに触れる」という主張から遠くからの無人調査機による変化の確認に留めていた。しかしその変化が先日確認され、今のリアンがここにいる。ま

さに未知の大地、死は前提。だから死にたがり以外、誰もこの調査はやりたがらない。

船乗りは死の覚悟を持っている一般市民。だが流石に船首に顔出すものはいない。陸地が近づくに連れ、先ずは呼吸の確認をする。

出発するまで随分と時間がかかったが、これからは邪魔がいらない。結局、天使会の持つ極秘の歴史文献も渡航許可も取れなかった。今回渡航出来たのは上層部に掛け合い、マフィアに廻してくれたおかげ。条件に突きつけられた各国の許可の取得というのは現実的ではない為、国が秘密裏に許可を出した形だ。俺が死ねば勝手に出航したことになる、成果を出せば大々的に発表するんだろう。

人は人を物として使う。物と者の区別はない。個々の感情とは一時の一部のモノ相手に出力されるもの。社会・組織といった大きなモノの前では感情なんて不利益要素の無駄なもの。他人は物。使うだけ。それが人間だ。

唯一事前準備で得たのは無人調査機の情報の一部だ。それは「壊れた人工的な建築物を発見。生存は未確認」と言うものとその大体の位置。もっとはつきり言えばこの建築物を示す地図しかない。上の指示通り入念に準備しても足を引っ張りあってこれだけだ。馬鹿らしい。

船は着陸する。ここまで来ても異常はない。確認出来ない。考えて

も仕方が無い。後ろからは「さっさと降りろ」と目で言ってくる。積んだバイクを引っ張り、陸地に降ろす。

船乗り

「ではお気をつけて。くれぐれも…」

リアン

「ありがとうございました。生きてたらまたよろしくね」

そう言っただけリアンはバイクを引っ張り前に進む。船が離れたのを確認し、バイクを立てる。地面に胡座をかき、様子を見る。

特に変わりが無いようだ。ここに神の吐息が広がっていたとは思えない。草も生えてる。吐息は草を枯らすことはないのか。

携帯は使えない。コンパスと地図を頼りに進むしかない。食料は普通に食えば5日は保つ。ケチればもっと保つ。最も大きな荷物はガソリンだけ…仕方ない。

あまり考えてもしょうがない。時間が経てば腹も減って調査も出来なくなる。取り敢えず進もう。バイクに跨り、急発進する。

日は随分前に沈んでいた。日中の時点では動物の気配はなかった。浮遊都市の技術水準はどの位だろうか。取り敢えず会えばわかる。

モタモタするのはもう充分だ。眠くなるまで走る事にした。普通にバイクを飛ばせば出発から2日で目的の人工建築物に辿りつける計算になっている。少しでも前倒しで着きたい。ここでの食料調達は難しそうだ。

すると前に点のような『赤』が見える。光…人が、いる。

すると直ぐに光は消えた。向こうもこっちのライトに気づいた。直ぐにバイクのライトを消す。向こうはこちらを警戒している。最初から友好的とはいかなそうだ。

リアンは微かに笑ってしまった。今までに味わった事のない興奮と緊張。恐怖すらも感情に混じっているが、笑ってしまう。戦争には行った事はない。軍事訓練を受けても実戦経験がないのだ。今まで貧乏とは言え、こんなに非現実な時間は始めてだ。

どうする…相手について何も分からない以上、いきなり銃撃も想定しないといけない。少し方向をズラしてバイクを走らせる。この暗闇の中、安易に動くべきじゃなかった。だがもう遅い。

離れるか？目的は調査だ。だが危険過ぎる。いや、危険かも分からない。が、怖い。死を覚悟してここにいるのに。

…決めた。近づく。

逃げて也得体のしれない恐怖が、夜が明けるまで逃がさないだろう。銃を直ぐに使えるように確認して、バイクで近づく。近づいて正体が分かれば直ぐに離れる。向こうが話す気があればそこで一歩進む。そうしよう。まずは確認だ。

近づけばどうせ直ぐに音でバレる。バイクのエンジンを全開にする。法定速度は破った事がない。そんな自分には100キロ以上は不安定だ。自分に言い聞かせる。しっかりしろ！気をしっかり保て！

すると突然影が見えたかと思うと派手に飛んだ。…何か轢いた。身体は宙を舞って、バイクは頭の右上で回転したままスライドしてる。そう思ったのは一瞬、直ぐに激痛が襲った。だが意識はある。身体全体で着地で来た事、下が草原だった事で死んではない。少し前なら痛みで悶えてたろうが、軍事訓練でこれを味わっていた。こんなところで役に立つとは…

離れたところで声が聞こえる。

???

「おい、クラッド！どうした？おい！」

人を轢いた…俺が人を？頭の中で心地悪い冷たい汗が噴き出す。どうする？そうだ、まずはバイクの元へ行かなければ。焦りでもう冷静さはない。

???

「おい、クラッドが死んでる…」
「??」

「こつちに何かいるぞ！警戒しろ」

リアンは匍匐前進でバイクに向かう。自然と銃に手が伸び、持っていた。殺した…殺される…

ふと何か黒い影が見える。人だ。

「??」

「こつちだ！」

「??」

「武器を構えろ」

その言葉に反応するかのようにリアンは影に向かって引鉄を引きた。

パシュ。

サプレスサから迫力のない音が聞こえる。そんな手応えの無さとは逆に、影は絶叫をあげて倒れる。少し違うところからまた影が現れる。そこから光が見えた、月光を返す剣だ。

光を生み出す元凶に向かって引鉄を引く

パシュ

パシュ
パシュ

また絶叫が響く。

???

「隊長！ローラン！」

まだいる。声の方を睨み付ける。じつと…

影が見えた。

パシュ
パシュ
カチャ
カチャ

弾が切れた。充填しないと…手が震える。あれ程練習したのに。シユミレーションもしたのに。弾が手元からボロボロ落ちる。殺される…

諦めてナイフを手にする。自分の呼吸と心音がやけにでかい。ジッと潜める。

~~~~~

夜が明けた。

もうリアンは変わっていた。自分が自分である事を維持し、その中で最大限変わった。リアンは思ったこれが脱皮か。

うつ伏せに潜めていた身はいつの間に疲れて仰向けに変わっていた。死ねばいい。いつもそう思っていた。けど実際に自分が生死に関わることも違う。想像と体験のボーダーラインは深い。けど越えればあっさりと受け入れられる。俺は人を殺した。何人も。

少し寝ていた。日が昇ってそんなに時間も経っていないだろう。何気なく身体を起して周りを見る。やはり死体はあった。3人が近くに塊り、1人は少し離れている。

もう冷静になっていた。今までの自分の人生の中で最も冷静だ。血まみれに横たわる死体を観察する。科学水準は決して高くない。持っている武器は剣、ナイフ、弓。防弾チョッキも当然ない。この様子だと昨日の光はライトじゃなく、火か。この世界では銃を持つ意味はかなり大きいようだ。顔つきは普通の人間。特別な点はなし。

次にバイクで轢いたと思われる1人に近づく。グチャグチャの死体の前でも冷静さは変わらない。殺した事で落ち着いた。死体を漁るとメモが出て来た。一部分だけを描いた血まみれの地図。やはり

調査か。都市が落ちて間もないし、とても無人調査機があるとは思えない。当然か。数は4人で向こうにいる馬の数とも合っている。それ以上の情報は想像の域は出ない。

さて、どうするか。このまま向かうべきか。少なくともこの4つの死体が向こうに暴露してから接触するのはまずい。確実に戦闘だ。だが少し前の自分みたいに安易に突っ込むとまた繰り返し兼ねない。

妥当なのは…再度現れる調査隊の待ち伏せ。場所はこと都市の直線上。食料はケチって持久戦覚悟。次の人間は殺さずに捕縛。最低1人は。それ以外は生死問わず。

リアン

「じゃあのんびり準備しようかな」

いつもの偽りの自分で独り言を言う。これで自分は元通りだ。

## スピンオフ？ 影（後書き）

ここまでの初期の構想で考えた骨組みです。

（構想と言っても時間にならないほどの時間しか考えていませんが、）

骨に肉をつけすぎて完全に肥満になってしまいました。

本当はもっとダイエットさせたかったんですが、中々…

これが自己満足作品の限界でしょう。

途中、全キャラの Side Viewを入れたのが無駄肉の元凶か…  
しかし…

構想というのは単に現実世界（僕らが生きている世界）とノーヴァス・アイテルの世界とのマージ。

世界観を大切にしているこのテーマとしてはなかなか危険でしたが、やりたかったことです。

なのでリアン君は僕らの代表者のつもりです。誰だって二面性はあるでしょう。その象徴です。

「俺はこんなじゃねえ」という人は無理に自分を重ねる必要はありませんが。

話としては、とりあえずここまでを描いて、後のゴールは流れに任せるともりでした。

しかし流れが読めていない自分には任せようもなく、ここで再度骨を考えることにしました。

で、今は終わりまで骨は考えました。（構想時間約15分）

そして忠告です。

ここから先は更にオフィシャルな世界観を壊す可能性があります。

なので何度も繰り返し返していますが、少しでもイメージを壊してしまつたらやめてください。

よろしくどうぞ。

## 第十九章 抑止

### 第十九章 抑止

リアン

「と、言う事で僕はここに調査に来てるんだ」

とても信じられる内容ではなかった。ノーヴァス・アイテルが見せしめの国？神の吐息？多くの国々？リアンと名乗る青年の話はとても想像すら出来ない世界の話だった。それを詰まらせながらも何とか飲み込む事が出来たのは、あの銃というものとバイクというものがあるからだ。受けざる得ない現実が…

リアン

「これがこの大陸の地図。無人調査機が一度遠くから撮っただけのものだから正確じゃ無いけどね」

3人の目の前に拡げられた紙にはこの大陸の輪郭とノーヴァス・アイテルが位置すると思われる場所に×が着いていた。北、東、南の果てとノーヴァス・アイテルの距離が、こちらで作った地図とそっくりだった。

カイク

「無人調査機とはなんだ？」

リアン

「んゝ…こつちではなんとはいいいのかな？空から見た光景を見る事が出来るものってとこかな」

カイク

「それは白か？」

リアン

「ん？知らない。見たことあるの？」

カイク

「…白い鳥が目撃されてる」

リアン

「ふーん。まあ、機械も知らないで遠くからみたらそう思うのかな？ねえねえ、こつちの子、顔が白いけど大丈夫？」

コレットだった。敬虔なる信者は神に見せしめの生贄にされたのだ。今度は人の手ではなく、神の手によって。自分を支える信仰が揺らぎかけているのかもしれない。

コレット

「神は私達を見放したのですか？」

リアン

「昔はそうらしいよ。僕も生きてないから知らないけど。君達から見たらとばっちりだよな」

コレット

「私達は神によって救われていた訳ではなかったの…」

コレットは人形のように生氣がない。どこまで世界は彼女を、俺たちを狂わすんだ？

カイク

「神とか悪魔とか、どこまで信じられるんだ？」

リアン

「わかんない。ただ名前はとうだつていいんだ。何か人を超越したものに管理されてる。その事実だけ。だから都市も浮遊してたんでしょ？」

隣のフィオネも最初は驚いていたものの、今では深刻な顔で動けなくなっていた。受け入れようとしてるのか、それともその先の未来を考えているのか。彼女の思考はどこまで行っているのだろうか。

リアン

「そろそろこつちの世界のこと教えてくれない？こつちでは天使会……って言う宗教団体なんだけどね、そこが言うには『いずれ都市は墮とされて見せしめになる』って言ってる。けど君らは生きてる。なんで？なんかあった？」

天使の存在を話すべきか迷った。そもそも外郭大地には天使がいるのだろうか。それを聞き逃してしまった。嘘が分かれば殺される。

カイク

「…分からない。突然都市が堕ちたと思ったらこの大地が広がっていた」

ばれないよう、嘘を言う。

リアン

「ふーん…。知ってる人はいないの？」

カイク

「俺たちは王の命令で調査している。王も知らない」

少しでも都市に近づけなくなかった。リシアに関心を持たせてはならない。しかし無駄な足掻きとは分かっている。

リアン

「王政か。厄介だな…」

カイク

「何も知らないから調査してる。そっち以上の情報はない」

リアン

「んー…困ったなあ。まあ、ノーヴァス・アイテルの人が生きてるってだけでも大きな情報だけど…」

カイク

「ならば早く立ち去ってくれないか？」

リアン

「ん？いやだよ。まだ時間あるし。言っておくけど、僕が消えても終わりじゃないよ？僕のここへの予定滞在期間は10日間。14日間過ぎれば死んだものとして扱われる。そうするとまた新しい調査

員が来ると思うよ」

やはり逃れられない現実。こいつらが都市を滅ぼそうと思えば簡単なはずだ。武力では勝てない。避けることも出来ない。どうすれば…

フィオネ

「カイク。都市へ案内しよう」

突然フィオネが口を開いた。

フィオネ

「私達だけでは判断が難しい。ここで私達が案内をしなければこの男は私達を殺して勝手に侵入する。その方が危険性が高い」

リアン

「そのとおり！フィオネちゃん、分かってるね！」

フィオネ

「この男を殺して終わりとは行かないのだろう。ならば国策が必要だ。我々では判断できない」

リアン

「リアンって呼んでくれると嬉しいかな」

カイク

「…分かった」

リアン

「ありがとう！そっだ！もう一つ見せてあげようかな！」

リアンは腰から小さな細長い球状の物を取り出す。そして先から出ている部分を外したかと思うと、直ぐに明後日の方角へそれを投げる。かなり遠くまで飛ばし、少し転がったところで爆発が起きる。そこにあった草原は抉れ、土が見えている。あまりの爆音に暫く耳がおかしくなる。やっとで耳が戻った頃、リアンは言う。

リアン

「今のは手榴弾っていうの。僕の武器は銃だけじゃないから襲わないでね」

呆然とする3人には希望的観測は見出せなかった。

## 第二十章 憂い

### 第二十章 憂い

今日は遅い為、明日の朝に出発する事に決めた。リアンと名乗る青年は手錠という物を外し、直ぐにバイクに跨り、先ほど見えた岩山の方へ走って行った。寝込みに襲われないよう用心する為と言う。

だが果たして寝込みの彼を目の前にして何か出来たのだろうか。殺しても意味がない。後から応援が来る。無理やり拘束も考えたが、あの銃や手榴弾という物を見せられては触れるのも危険だ。心理戦では完敗だった。最も心理戦だけではないかもしれないが。

リアンは二つの物を置いて行った。ライターと言う物と発煙筒というものである。リアンはライターの使い方を教え、何か緊急で呼ぶ事があつたら発煙筒の紐に火をつけてくれという。この発煙筒というのがどういう物か分からないが、ライターの凄さは直ぐに分かった。指一つで火がつく。それは夜の焚き火でも役にたった。

フィオネ

「足は大丈夫か？」

カイル

「ああ。歩けない程ではない」

コレット

「私達はどうなるのでしょうか…」

カイル

「取り敢えずは従うしかない。抵抗も無意味だ。フィオネの言う通

り、話し合いに持ち込むしかない」

フィオネ

「やはりティアの事は隠した方がいいだろうか」

カイル

「当たり前だ。ティアが狙われるだけだ」

フィオネ

「いや、言い方は悪いかもしれないが、天使と言うのは武器になるのではないか。彼方は自国が浮遊させられている事を恐れている。神に近い天使の存在を知れば…」

コレット

「天使様をそのような武器にするなんて…言語道断です！フィオネさん、見損ないました」

カイル

「コレット、落ち着け。フィオネ、その作戦の為にはティアが天使である証明をしなければならない。今のティアには天使の力はない」

最も個人的な感情で、ティアを巻き込みたくはないと言うのがある。彼女は今まで運命に弄ばれて来た。もう、いいだろう。普通の女として生きて

フィオネ

「すまない。聞かなかった事にしてくれ」

カイル

「だが何か策を練らないと…」

コレット

「私がまた天使様のお声が聞こえれば…」

カイル

「無いものを強請っても仕方ない。これから彼奴を都市に案内する

事になる。用心深い彼奴が簡単に城に入ろうとはしないだろう。恐らくリシアを呼べと言って来る。その時、ジークに事情を話し、ジークに国王の振りをさせる。ジークの方がリシアよりもこの手の対応は上手いはずだ」

フィオネ

「しかし偽りが暴露ないか？」

カイル

「暴露るのは時間の問題だろう……しかしリシアに外政は厳しいだろう。今までの立場上、経験がない。ジークには組織としてだが駆け引きはしてきた」

コレット

「天使様も偽り、国王も偽るのですか？」

カイル

「綺麗事では国が滅びる。それとも他に案があるなら是非聞かせてくれ」

みんな黙りこんでしまう。世界が変わったのだ。浮遊から真の地上へと。当然に新しい事ばかりに出会い、判断を委ねられる。それは自然だろう。しかしあまりにも選択が重過ぎる。これをこれからリシアが決めて行くとなると彼女の負担は相当なものだ。せめてあのリアンと名乗る青年に匹敵する技術があれば……やはり最後は武器に頼る。それが人間か。

カイル

「2人にこれを渡しておく」

そう言ってナイフをコレットとフィオネに渡す。フィオネは直ぐに理解したが、武器など手にした事のないコレットは少し手が震えている。

カーム

「これからは男である俺が一番狙われるだろう。2人が人質にされる可能性は充分にある。その時は自分で自分の身を守って欲しい」

フィオネは力強く頷く。反対にコレットは力なかった。最もそうならない状況は全力で避けるつもりだが、難しいのが結論だ。

フィオネ

「今日は休もう。これ以上は答えが出ない。私が番をするから2人は休んでくれ」

カーム

「そうだな…分かった。3時間後に交代だ」

考えても霧の中。半ば自棄にもなっていたが、体力の温存も重要だ。休むか。

## 第二十一章 報告

### 第二十一章 報告

リアン

「あそこに見えるのが都市かな？」

バイクからリアンは声を張り上げる。リアンは昨夜貸したカイムの服を着ている。目立ちたくないから貸せと言う。仕方なしに貸すが、リアンはその服の臭いを嗅いで顔を顰めた。それにはカイムも気に障った。

カイム

「そうだ」

バイクという乗り物は馬と違い、休みがいらならしい。何度か馬の休憩を挟みながらも、都市からそう離れていない為、その日のうちに着く事ができる。時間を稼いでも仕方が無い。昨夜のうちに「これ以上考えても仕方が無い」という結論に達してしまったのだから。都市までもう少しと言うところで再びリアンは叫ぶ。

リアン

「ちょっとストップ。止まって！止まって！」

リアンがスピードをあげて前方に出たかと思うと直ぐに止まる。

それに倣って3人も馬を止める。

リアン

「ごめんね、この辺にバイクを停めたいんだ。盗まれても壊されても帰りが大変になるだけなんだけど…一応ね」

そう言ってリアンはバイクから降り、なにやらゴソゴソといじる。

リアン

「バイクが知らない人は動かす事も出来ないと思うけど。ここから僕は歩くよ。悪いけどペース合わせてくれないかな？」

カイムは無言で頷く。大した我儘ではない。だがこれがどんな要求だろうとこの先も首を縦に振らなければならない。拒否権はない。武力によって。

カイムは馬から降り、リアンと共に歩く事にした。リアンがどんな行動をとっても動けるようにする為だ。怪我した脚は痛みはするが、それに耐えれば動きに支障はない。また歩きに変えても都市にはそう距離はなかった。リアンは都市に近づくに連れて銃を取り出した。当然の用心か。

メルトの酒場へ続く瓦礫の階段に着く。あれから牢獄を探してもここ以上に良い外郭大地への道はなかった。

リアン

「ここが君達の都市…ノーヴァス・アイテルかぁ。やっぱり独特の

雰囲気だね」

カイル

「話し合いが目的だ。ここからは少し俺の言う事を聞いてくれ」

リアン

「なんで？ なにかあるの？」

カイル

「ここは牢獄と言って治安が悪い。下手に目を合わせると襲われる。『話し合い』をしたいんだよね？ だったら言う事を聞いてくれ」

リアン

「牢獄：犯罪者の町？」

リアンはチラリとフィオネを見る。

フィオネ

「もう少し説明が必要だろう。この国は上層、下層、牢獄という3つの階層で出来ている。牢獄と言うのは元々下層だったところが地震で沈没したところ。犯罪者の住む町という意味はないが、治安はかなり悪い。見れば分かる」

リアン

「浮遊都市に地震があるんだ！ それは凄い情報だなあ。役に立つかわかんないけど」

話をしているうちに牢獄へ近づく。直ぐにリアンの表情が変わった。臭いだろう。牢獄が腐った水の溜まり場である事は変わりはない。死体も片付いた方だが、ない訳ではない。

リアン

「ここが牢獄…当たり前のように乞食がいるな。やはり王政の王は無能か…」

カイル

「他国の者が勝手に来て文句を言われたく無いな」

リアン

「ごめん」

カイル

「…話し合いの場だが3つある。1つは俺の家、この牢獄にある。2つ目は上層のある貴族の屋敷、3つ目は城だ。どこがいい？」

リアン

「上層がいいな」

カイル

「だろうな」

リアン

「カイルはその…この牢獄という貧困層なんだよね？どうして王から命を受けられる立場なの？」

カイル

「いろいろあった。説明は面倒だ」

リアンは不満そうに、そして不信の目でカイルを見る。しかしそれ以上追求はしなかった。

下層に登る。浮浪者は全くいない訳ではないが、牢獄の様な悪臭はない。明らかにリアンの表情が良くなった。身なりといい、衛生的な場で過ごしたんだろう。寄り道する事なく真っ直ぐに上層に上がり、ルキウスの屋敷に入る。この屋敷は主が居なくなってからも随分使わせて貰ってる。掃除をしていない為、所々に埃が積まれているが。リアンは用心深く後ろからついて来る。

カイル

「ここには誰もいない。俺が仮住まいしている屋敷だ。ここに王を連れてくる。それでいいな？」

リアン

「うん。それでお願い。でも兵士とか余計な者は入れないでね。お

互い面倒は避けようね?」

カイル

「分かってる。今まで見たとおり真っ直ぐここへ来た。王を呼びに行かなくてはならない。城まで来るか?」

リアン

「いや、いいよ。呼んで来て貰えるかな?」

予想通りの答え。

カイル

「分かった。王が直ぐに捕まるか分からないから時間は少しかかるかもしれない。…2人は帰してもいいか?」

リアン

「それは困るよ。1人でこんな知らない大きなお屋敷、寂しいもん」

これも予想通りの答え。つまり人質か。この為にナイフを渡しておいた。フィオネを見る。力強い目で返してくれた。心強い。

カイル

「彼女達に手を出してみろ。俺は死ぬ気になればお前を殺せる」

リアン

「分かってるよ。ここは僕にとって敵地。下手な事はしないよ」

カイル

「コレット、そういう事になった。王が来るまで待ってもらっていいか」

コレット

「構いません。私はカイルさんを信じてます」

リアン

「やっぱりカイルモテるんだあゝねえねえ…」

カイル

「行つて来る」

話を聞かずに扉を閉めて直ぐに屋敷を出る。あの男と居るとペー  
スが崩される。だが馬鹿ではないようだ。恐らく力任せに暴れたり  
はしないだろう。樂觀的になったつもりはない、そう自分を見つめ  
なおす。

歩き慣れた道、城には直ぐについた。城門をくぐり迷わず謁見の  
間に向かう。時間が経てば比例して2人に及ぶ危険は高くなる。

近衛兵

「あつ！カイル…」

カイル

「すまない、急いでる」

兵士の言葉を制し、直ぐに間に入る。リシアの姿を確認し、早歩き  
で近づく。

リシア

「カイル！ずいぶん早いな」

カイル

「緊急だ。まずジークと話をしたい。来てるか？」

リシア

「いや、今日はまだだ。何も無ければ牢獄の娼館におるだろう」

カイル

「そうか。分かった。今、自体が大きく変わってる。用心して出歩  
くな」

そう言ってジークの元へ向かおうと踵を返したとき、リシアの声  
に止められる。

リシア

「待て！火急の用なら伝書鳩の方が早い。リリウムを覚えさせた一羽がいる」

カイム

「本当か！？なら書く物を貸してくれ」

リシアはカイムから稀にみる焦りを感じ取り、直ぐに側にあった筆と紙を渡す。手紙には端的に書いた

『直ぐにルキウスの屋敷側までに来てくれ。但し、近づくな。カイム』

リシア

「鳩が届くまで少々時間がある。その間でも話してはくれないか？」

カイムは自分が必要以上に焦っている事に気づく。急ぐ必要はあるが、焦りはいけない冷静になれる

カイム

「結論から言う。西の調査隊は恐らく殺された。殺したと思われる外郭大地の人間に会い、今はルキウスの屋敷に招いている」

リシア

「なっ……」

このリシアにも驚きの表情は隠せない。1つ1つでも驚愕の事実だが、それを一気に伝えた。

カイム

「外郭大地の人間はこの国以上の技術を持っている。1人の人間が

簡単に地面を抉るほどの破壊力をもつ武器を所持している」

直ぐに驚きの様を消し、現実と向かい合う。やはり王か。

リシア

「それで相手の要求は？敵対心はあるのか？」

カイム

「目的はこの大地の調査と言っている。要求はこの国の情報。今のところ敵対心は見えないが、敵対されれば確実にこの国は終わる」

リシア

「ならば王との謁見を求めているのだろう。なぜ私ではなく、ジークに！」

カイム

「はつきりと言うが、外部との折衝はリシアよりジークの方が上だ。それに安易に本当の王を曝す訳にはいかない」

リシア

「しかし！」

カイム

「今は俺とジークに任せてくれ。今リシアが出来るのは対策を練ることだ」

リシアは直ぐにスツと静かになり、一言言っただ。

リシア

「分かった」

カイム

「では俺は行く」

リシア

「気をつけてな」

頷き、今度こそジークの元へ向かう。リリウムにジークが居てくれれば直ぐに落ち会えるはずである。

屋敷へ向かう途中、ふとティアに会いたいと思った。ティアだけでなく、エリスやコレット、ラヴィにも。しかしそんな呑気な事を考える状況にない事を直ぐに思い出す。こんな事を考えるのは何かの前兆か？まさか、と一笑に府して屋敷に向かう。

屋敷を少し通り過ぎ、牢獄への通り道になるところで待とうと考えたが、直ぐにジークを見つけた。ちょうど来たところらしい。

ジーク

「カイルからの恋文とはな…良からぬ現実をもってきたんだろう」

言葉の調子とは裏腹に、しっかりと受け止める覚悟はあるようだ。

カイル

「手短に話す。全て事実だから聞き返さないでくれ」

## 第二十二章 会談

### 第二十二章 会談

前置きのおかげか、現状について話してもジークからは相槌以上の返事はなかった。こいつも紛れもない王だ。しかも牢獄の。自分の選択が誤りではないと確信する。

ジーク

「分かった。行くか」

カイル

「準備はいいのか？」

ジーク

「準備はリシアがしてるんだろ？行くぞ」

やはり頼もしいやつだ。俺は前に出てジークを案内するように歩く。ルキウスの屋敷の扉を叩く。

リアン

「誰だ？」

カイル

「カイルだ。王を連れてきた」

リアン

「今から3秒後に扉を開ける」

ガチャリと錠の外れる音がする。3つ、頭で数えて扉をあける。そこには少し離れたところで銃を向けたリアンが居た。

リアン

「直ぐに扉を閉めてください」

カイルとジークは言われた通り中に入り、扉を閉める。リアンは2人を認めると直ぐに言う。

リアン

「大変失礼しました。まずはお席の方へ」

2人から視線を外さず、最初にリアンを案内した間に進んでいく。今度はジークが先頭をきってリアンについていく。どちらも警戒は欠いていない。もっともリアンにすればこの瞬間が、一番危険だったはず。当然と言えば当然。

部屋に入ると無事にフィオネのコレットは居た。しかしまた手錠という物をかけられていた。直ぐにリアンは2人に近づき、小さな声で「ごめんね」と言い、錠を外した。2人に不安の色がなかった所をみると、ある程度同意の上だろう。

ジーク

「早速だが話を進めたい。リアン……と言ったか。お前がどんな人間かは大体はカイルに聞いた」  
リアン

「突然のご面会、お詫びすると共に深く感謝をします」

ジーク

「そんな固くなんな。そう言うのはうんざりだ」

リアンが不信の目で見る。カイルも王らしくないジークに内心舌打ちした。

リアン

「失礼ですが、お名前を伺ってもよろしいですか？」

ジーク

「いやだね」

カイル

「ジーク！…こいつはこんな王なんだ。名前はジークフリードと言う」

ジーク

「カイル、勝手に教えるな。俺はもう貴族相手にそんな言葉使われるのはうんざりなんだよ。おい、リアン。お前も俺をジークと呼べ。じゃなきゃ話は終わりだ」

リアン

「では恐れながら…ジークさん、よろしくお願いします」

ジーク

「ジークだ」

リアン

「は、はい。すみません。ジーク、よろしく…」

ジーク

「よし。じゃあ本題に入ろう。なんのようだ？」

狙い通りかは分からないが、ここまでは完全にジークのペース。しかしそれは武力の脅威を知らない事によって成り立っているもの

ではないか…そんな不安がカイムに過る。

カイム

「その前にコレットとフィオネは解放してくれないか」

リアン

「あつ、そうだね…」

ジーク

「こっちは丸腰だ。カイムと2人とは言えそっちには自慢の武器があるのだろう？返してくれ」

リアン

「まだ僕の存在は知られたくないんだよね…まあ、いいか。ごめんね、帰ってもいいよ」

そう言われてフィオネはおずおずと立ち上がる。しかしコレットは動かない。

コレット

「話を聞かせてもらえませんか？」

ジーク

「だ、そうだ。そちら次第で」

リアン

「コレットちゃんなら構わないよ。フィオネちゃんもいいよ？」

フィオネ

「いや、私は失礼する」

そう言ってフィオネは一礼し、直ぐに部屋を出る。リシアに話を伝えるのだろう。

ジーク

「じゃあ早く話を進めてくれ」

リアン

「僕はただの調査員。この都市の歴史及び状況を知りたいだけなんだ。こちらから危害を加えるつもりはない」

ジーク

「こっちも国の方針で隠し事は辞めたんだ。なあ、カイク」

カイク

「ああ」

ジーク

「だから今は国家秘密もない。勝手に調べてくれ。それよりいい娯婦もいるぞ？お土産には出来ないが、楽しんでいけ」

とても王には見えない、いつものにやけたジークが顔を出す。こいつは演じるつもりはないらしい…

リアン

「あの…失礼ですけど、本当に国王様でしょうか？」

ジーク

「そんなもん、自分で判断しろ。何でも教えてもらえと思うな」

リアン

「そうだよね…」

ジーク

「で、そっちは何をしてくれるんだ？」

リアン

「はい…？」

ジーク

「こっちは調べていって許可出したんだ。まさか手土産なしにこっちは挨拶ってことはないよな」

リアン

「そう、だなあ…こちらこそちら側が知らない外郭大地については教えられるかな」

ジーク

「はあ…分かってないね。俺は楽しめるものや金になるものが欲しいんだよ。美味しいものでもいい。なんかないか？」

リアン

「えっと…そうだなあ。じゃあこの音楽プレイヤーとあと余ってるライト、それとこの世界地図の予備でいいかな？」

ジークは無用心にリアンが取り出したものを触ったと思ったら直ぐにカイムに渡す。実験台になれということらしい。王でなければ直ぐに投げ返すものだが…

カイム

「…どうやってつかうんだ？」

リアン

「地図は見ての通りこの世界地図。この真ん中の黒く塗り潰されているのが、ここ。神の吐息という意味」

ジーク

「吐息？」

カイム

「それは後から話す」

リアン

「こっちはライトって言って、このボタンを押せば光る。もう一回押すと消える」

カチカチ押して光を自在に操る。バイクに着いていたものと同じ仕組みだろうか。光を生み出すとは…天使も真っ青だな

リアン

「こっちはただ音が出る物。暇潰しで役には立たないけど、ここでは珍しくて価値があるんじゃないかな？」

リアンは紐を抜いてまたボタンを押すと音楽が流れる。聞き慣れないリズムが小さな物から流れる。

ジーク

「おお！すごいぞ、カイル！こういうのが欲しかったんだよ」

リアン

「電池がなくなったら使えないけど…」

ジーク

「ん？でんち？なんだそれは？」

リアンは手短に使い方や電池について教える。少し面倒になってきたようだ。少々、雑になってきている。

ジーク

「いずれ使えなくなるのかあ。まあその時はまた電池くれ」

リアン

「次があればね。それで勝手に調べていいって言ってたけど、具体的に何をしていいの？自由に城に出入り出来る訳じゃないんだよね？」

ジーク

「じゃあ、よろしくな！カイル」

やっぱり、か…

ジーク

「接待はこのカイルが請け負う。是非堪能していつてくれたまえ」

カイル

「…」

ジーク

「じゃあ、後はよろしく！お客様だ、リリウムにも案内しろよ」

にやけながら部屋から出ようとしたが、急に振り返る。その顔は組織のボスだった。

ジーク

「ただ勝手なことはするなよ。意味は分かってるだろうな」

リアン

「は、はい…」

今まで何処か軽蔑していた。金銀、物が目当ての何処にでもいる人間。役所では見飽きるほどいる。国の王と名乗る男もその程度だと思いはじめていた。だがこの目を見て考えが逆転する。紛れもない王の目。一般人とは違う。そもそもこの国の一般人は自分の国と『目の強さ』から違う。ここの人間は…生きている。少なくとも俺の国の以上に。そしてこの国の一般人を超越した王の気魄が彼の目に宿っていた。技術ではこの国は大したことはない。しかし生の強さは比べものにならない位、完敗だ。

ジークは二の次を告げずにスツと消えるようにその場を去った。残ったのはカイルとリアン、コレット。

カイル

「さてと。少しは滞在するつもりなんだろう？問題無ければここを使え」

本来なら用心して国の外に泊まるつもりだった。気を完全に許した訳ではないが、効率性も考えないといけない。

リアン

「甘えさせてもらっね」

カイム

「じゃあ今日はここまでにしてくれ。俺は誰かにやられた足を診てもらってくる。ここには戻らない。…鍵はこれだ」

リアン

「ああ…ごめんね」

カイム

「信じるとは言わないが、俺たちは危害を加えるつもりはない。お前もそうしてくれると助かる」

リアン

「もちろんだよ！」

カイム

「そうだといいがな」

リアン

「案内はカイムに任せるって聞いたけど、いつくらいに戻ってくる？」

カイム

「明日中だ。ここも貴族の部屋だ。勝手に調べるといい」

リアン

「分かった。けど外の案内もよろしくね」

カイム

「ああ。いくぞ、コレット」

ずっと黙っていたコレットを呼んだが、ここで口を開いた。

コレット

「神と天使様について教えてください」

カイル

「コレット、いくぞ」

コレット

「お願いします。貴方の国が知っている神と天使の歴史、それを教えてください」

リアン

「僕の知っている範囲なら構わないけど…」

カイル

「リアン、日を改めて教えてくれ。コレット、俺は足を怪我している」

コレット

「でも…すいません」

卑怯な言い方だと思ったが、これでコレットも引いてくれる。もう疲れた。休んで考える事は明日にまわしたい。

カイル

「じゃあな」

その一言を残し、直ぐに屋敷を出た。忙しい一日だ。

## 第二十三章 事実・再

### 第二十三章 事実・再

カイムは治療院の牢屋の一室で眠っていた。エリスに足の治療をしてもらっていたが、いつもと違う疲れがどつと襲ってきて早く休むことにした。眠り薬のことで怒っていたティアを制して、直ぐに治療院の一室で眠りに耽った。

目を覚ますと心配そうなティアの顔と楽そうに覗き込むエリスがいた。

エリス

「カイムにしては寝てたわね。それでどうしたの、足？起きたら話すって言ったわよね」

ティア

「調査から一日で帰ってくるって…やっぱり何かあったんですよね？」

カイム

「まあ…な」

エリス

「コレットもずいぶん深刻な顔をしてた。なにか面倒事持ってきたの？」

カイム

「質問が多い。少し落ち着かせてくれ」

エリス

「そう。じゃあ報告。リシアが呼んでたわ」

カイム

「そうか」

エリス

「もう一つ、小動物がまた偉くなつたわ」

カイム

「偉くなつたって…」

ティア

「はい！また光るようになったんですよ！羽根付きさんも1人治せました」

カイム

「本当か！」

エリス

「結局は暴れ疲れて力が眠っていただけみたい。やっぱりガキね」  
ティア

「疲れたら誰だって寝ちやうものですよあ」

エリスの一睨みでティアは大人しくなる。

ティアに天使の力が戻ったって？もう天使については理屈付けることは不可能だ。すんなりと受け入れられる。しかしあの時のように翼はもうないようだ。それは目立たなくて良い。

だが、リアンの世界には天使は居るのだろうか？居るとしたらあの技術力で天使の力の原理すらも知っているかもしれない。…それはあのギルバルトのしていた事と同じと言う事になるか。

カイム

「ティアの件は後でゆっくり聞かせてくれ。俺はまずリシアの所へいく」

エリス

「そう…」

一言残してエリスは出ていった。

カイク

「ティア、天使の力はもう使うな」

ティア

「どうしてですか？羽根付きさんを治せるのに…」

カイク

「いいから使うな。羽化病が死病とまだ決まった訳ではない」

ティア

「カイクさんがそう仰るなら…」

カイク

「じゃあ行ってくる」

ティア

「はい」

そう言って部屋の扉を開けるがティアがついてくる。「おい…」  
と言いかけたところで前方のエリス達の姿を認める。

エリス

「私たちもリシアに呼ばれてるから」

~~~~~  
~~~~~

いつかの事実を告白した時と同じ会議室に、同じような顔が揃って

いた。違うのは天使が増えていること。

カイク、ジーク、ティア、リシア、コレット、ラヴィリア、エリス、フィオネの8人。集った目的は勿論、外郭大地についてとその人間の対応だ。しかしその話題でエリスやコレット、ラヴィリア更にはティアが絡むとなると…

リシア

「急に呼び寄せてすまないな。事態は一刻も争うものでな、早速議題に入ろう」

エリス

「議題ってなに？調査についてでしょ？それが羽根付きと関係があるの？」

リシア

「いや、羽化病と言うよりティアだ。先ずは事の次第を話そう。私の認識に違いがあればフィオネ、カイク、訂正してくれ」

フィオネから伝わった情報は相違・漏れなくリシアに伝わっていた。リシアの話も、こちらから捕捉することもなく円滑に進んだ。やはりノーヴァス・アイテルが神の見せしめの国と言っ話にはラヴィリアもティアも驚いていた。

エリス

「それで神が出て来たからこっちは天使を使おうってこと？」

リシア

「安直な言い方をすればそうなる」

コレット

「御子のお力で今の私たちがあります。更に御子を利用して愚かな過去を繰り返すのですか！」

リシア

「利用するつもりは無い。ティアの意志は尊重する。しかし天使の力も戻り、話が神話まで昇ればいつしか辿り着く答えになるう」

ラヴィリア

「しかしまだ外郭大地に天使様がいるかはまだ分からないのですよね？だとしたら御子様を唯一の天使様かのように扱うのは…」

リシア

「私は外郭大地には天使がいない、若しくは居ても非協力的だと考えている」

カーム

「根拠は？」

リシア

「もし協力的な天使が外郭大地におるのならこんな回りくどい調査なんてせずに聞けばよい。また外郭大地に協力的な天使がいるのなら、リアンとやらから一言話が出てくるのが自然だろう」

コレット

「確かにリアンさんは『天使』と言う御言葉に反応されてた。そして『やっぱりいるのか』と」

カーム

「筋は通るか…」

エリス

「小動物がこの広い世界の唯一の天使なら扱いが変わるわね。若しくは前みたいに…」

ティアは下に俯いたまま、少し震えている。当然だ。苦しい想いをしてせつかくこの世界救い、奇跡的に命を取り留めて平穏な日々を

取り戻したばかりだ。また悪夢が忍びよろうとしている。

リシア

「勿論、私としてはこの国を守った天使としてティアを保護したい。しかし他国の力等を聞くと……武力では厳しい」

ジーク

「厳しいではなく、不可能だ」

今まで黙って聞いていたジークが口を開く。

ジーク

「リアンからもらった音楽再生機、ライトを調べたがこの国の科学者は全員お手上げだった。地図も間違いないだろう。俺達から見ればアイツら自体が人間を超越した化け物だ」

やはりジークは『お土産』と言ったものから調べられるだけ調べていた。

ジーク

「国を守ると言う一点では答えは簡単だ。嬢ちゃんを利用する」

カイル

「ジーク！」

ジーク

「落ち着け。お前が言っただろう『義理を欠けば組織は潰れる』。そんな安易に選ぶつもりはない。だが嬢ちゃんの協力が必要なのは事実だ」

皆、自然とティアを見る。俯いていた彼女もそれに気づく。そして顔を挙げて言う。

ティア

「私は…皆さんを信じてます。だから私は皆さんの為に出来る事をやりたいです。昔から私には『使命がある』と思っていました。でもそれはお母様がくれたもの。今度は自分で使命を創って、それを乗り越えたいです」

ジーク

「よくぞ言った！嬢ちゃん！」

リシア

「うむ、立派な答えだ」

エリス

「小動物の癖に」

コレット

「大丈夫ですよ。御子は私たちが守ります」

ありがとうございます…ティアはそう呟いて泣いてしまった。あの時の苦しみを見ていただけただけの俺でもその姿の気持ちが分かる。

ジーク

「とりあえず嬢ちゃんの協力は貰えたな。こっからはカイムの仕事だ」

カイム

「俺の？」

ジーク

「必要な情報があるだろう？天使について探ってこい。勿論こっちに天使がいる事がばれないようにな」

カイム

「接待か…そういうのはジークの方が得意だろう？」

ジーク

「バカを言うな。接待なんぞ嫌いだ。精々出来るのはリリウムに招待することくらいだが、昨日のあいつの反応じゃあな」

リシア

「ジークに招待なんて期待するな」

ジーク

「いや、女の子相手なら快樂の奈落へ導いて差し上げ…」

フィオネ

「しかしリシア様。ティアの事を知っている者も多いのでは？」

リシア

「関係者に諫言令は布いてはいるが…しばらくフィオネもティアについてくれぬか？」

フィオネ

「御意」

ティア

「すいません。ありがとうございます」

ラヴィリア

「カイル様はリアン様の元へいらっしゃるのですか？御子様は引き続き治癒院にいてもらいましょう」

カイル

「リアンと同じ部屋には居たくないな。ティアのことは頼む」

ジーク

「じゃあ話し合いはお終いでいいだろ？カイル、さつさと接待してこい！」

いつの間にか不機嫌になっているジークに言われるがまま、カイルは1人会議室を出た。先ずは俺の仕事か。

## 第二十四章 歴史

### 第二十四章 歴史

城の会議室をですぐにルキウスの屋敷へ向かった。時間も日が傾いてきている。さつさと「俺の」仕事を終わらせよう。あいつがいる危険なルキウス屋敷で泊まる訳いらない。とりあえず考察が進められるレベルの情報、特に天使や神についての話は聞きだしたい。

カイク

「俺だ。カイクだ」

リアン

「はい。今開けるね」

錠が開く音が聞こえるとすぐにリアンが居た。昨日、ジークを連れてきたときは武器を構えていたというのに、もう心を許したのか？ すぐに後ろ姿を見せた。最もどんなに隙を見せられていてもこの男に手を出すのは得策ではない。利害の一致した異国の者がこの先現れるかは分からない。そういう意味では貴重な人間だ。そこまでの計算しての後ろ姿ならば評価せざるを得ない。

リアン

「勝手に調べていいって言われたから書籍漁らせてもらったよ。貴

族というだけあって欲しかった情報がいっぱいあるね」

カーム

「お前の言う欲しかった情報とはどんなものだ？」

リアン

「やっぱり一番は神や天使についてかな。僕がここに来たのは前に話した選別論がまた動くかってこと。そこまでの情報はないけど、ここの歴史的な情報は充分だね」

カーム

「なにがあつた？俺は宗教に興味が無くてな。そんなに詳しくないリアン

「えーっと…ここの歴史では『神によって人類が創られ、天使によって繁栄が守られていた。しかし争いを続ける人間を神は見捨てようとし、天使を引き上げ、世界が混沌に飲みこまれようとした。それを聖女イレエヌが神に許しを請い、浮遊都市としてこの世界が産まれた』だって。知らなかったの？」

カーム

「いや、その程度ならば知っていた。ガキの頃に聞かされる話だ」

リアン

「やっぱりそういう話か。でも現実…という違うか。僕らの世界とは似ているけど違っているね」

カーム

「そう言えばこの都市は見せしめだったな」

リアン

「うん。神に人類が創られ、争いで見捨てようとするところは同じ。けど僕らの世界では見せしめとして神が都市を浮遊したことになる。この世界では聖女によって浮遊することで救われたことになっている。数百年も前の話だからズレも生じるか」

カーム

「そちらの技術の方が優れているんだろう。機械とかいったな。それで歴史は保存されているんならそっちの方が正確だろう」

リアン

「だろうね。歴史と言っても時間が流れれば削れていくものだしね。でも共通で神や天使の存在があるのは興味深いな」

カイル

「そっちは神や天使はどういう存在なんだ？いるのか」

リアン

「いるはずないよ。居ないから、未知だからこそ人は怯えて恐怖する。はつきりと存在したらただの有名人、その方がどれだけ楽だろう」

カイル

「なるほどな…」

上手く話を流して聞き出せたが、やはり外殻大地の世界には神はおるか、天使すらもいないらしい。前に見た世界地図ではこの大陸はほんの小さなものだった。その小さなものに天使が存在し、それ以外に天使は存在しない。良くか悪くは分からないが、このノーヴァス・アイテルというのは神にとって特別なものだったらしい。

リアン

「そう言えば、聖女イレエ又って今でもいるの？」

カイル

「聖女が…いたことはいた。浮遊している理屈付ける為の存在だったかな。コレットは少し前まで聖女イレエをしていた」

リアン

「コレットちゃんか？そっか…やはり聖女っていうのは建前か」

カイル

「そう言うことだ。コレットは敬虔な信者だ普通の女だ」

リアン

「そうだね…」

すんなり納得してくれていたようだ。コレットと事前に会っていたことが良い方向へ進んだ。会っていなかったら聖女に合わせることになっていたに違いない。面倒が面倒と感じる前に片付いた、というところか。

リアン

「だけどやっぱりここでも神は悪役で、天使が救世主みたいだね」

カーム

「どういうことだ？」

リアン

「なんとなくだけど…歴史を見る限りでは、神に対しては結構抽象的だけど、天使については神以上に深く描かれている。それに神は神で天使は天使『様』だもん。まるで天使の方が偉いようだ」

カーム

「確かに…気にしたことなかったな」

リアン

「やっぱり僕たちの言う神は悪魔なのかな。おっと、こんなこと神に聞こえたら国が浮遊させられちゃうや」

リアンは軽く笑いながら膨大で恐ろしいことが言う。まるで天気が恵まれない、その程度の話をするかのように、一国の崩壊を軽々しく扱う。

カーム

「確かリアンの国の現地調査員が、リアン一人なのは神の怒りに触れるから、だよな。だとしたらどうしてそんなに軽々しく動ける？」  
リアン

「愛国心もないし、死ぬ気でいるから。一応、僕の国は発展している方で、世界的に見ても経済・技術力・発言力どれをとっても三本指に入るような国だよ。そんな国でも中身はカスだ。どの人間も空虚な時間を費やして生きる意味もない。どんなに発展していても『軽い』人間たちの集まりに過ぎない。そんなもの、どうでもいい」

カーム

「生きる意味なんて人間である以上、ないだろ……」

リアン

「そうだね。でもこここの人間は必死に生きようとしている。僕の国には少なくともそんなものはない。前にジークは娼婦って言ったよね？それは生きるために身体を売っているんだろ？貧しい国では僕らの世界にもある」

カーム

「リアンの国には娼婦もいないのか」

リアン

「似たようなのはいる。けど生きるためじゃない。金の為、贅沢の為に身体を売る。生きるだけなら身体を売る必要なんてないのに、僅かな小銭欲しさに他人に身体を触らせるのさ。ここの娼婦とは違うんじゃないのかい？」

カーム

「確かに貴族でわざわざ娼婦になるような物好きはいないな」

リアン

「そう。ここの国は必死に生きている。いくら技術力が劣っていても、それは僕にとって尊敬できる国の形だ」

カーム

「そういうものか」

娼婦一つで生きる力を語られるとはな。どこらにも転がっている  
当たり前の娼婦。それがこの異国の青年にはとても響いたようだ。  
これが異文化というものか。文化が統一されていた今までのノーヴ  
アス・アイテルでは初めての感覚だな。だが逸れた話をのんびりし  
ても仕方がない。

カーム

「もう少しリアンの国について教えてくれないか。違いが分かった  
方が知りたい情報を渡せる」

リアン

「そうだな…難しいな。僕の国はパンドルって言って、さっきも言  
ったように文明は発達している方、ここから西の方角にある。大き  
さはここの大陸より小さいけど、全てが街になっている」

カーム

「この大陸程の街か…」

リアン

「それでも世界的にはそんなに面積がある方じゃないよ。国が広げ  
れば広いほど政治は難しくなる。パンドルはちょうどいい大きさで、  
気候もいいから運よく発展しただけかもね。そういう意味では神に  
目をつけられて吊るされても不思議じゃない。だからみんなこの国  
が堕ちたことを恐れているんだ」

カーム

「そういえば神や天使の絵のようなものはあるのか？昔は存在した  
んだろ？」

リアン

「存在したと記録されている時代の技術では、落書き程度しか残せなかったみたい」

カイル

「俺の国では羽根が付いている人間の姿をしたのが天使ということになっているがな」

リアン

「そう言えばこの書類にあった『羽化病』って天使病のことかな？」

カイル

「天使病？」

リアン

「羽根が生える病気のこと。そういえばこの国にもあるのかは重要な問題だな…。あるの？」

カイル

「…羽根が生える病気は存在するが、詳しくは分かっていない。そちでは分かっているのか？」

リアン

「この国にもあるのか！だとすると…」

カイル

「教えてくれ！羽化病と天使に関係性はあるのか」

リアン

「それはもちろんあるよ。天使病患者は…」

その時、大きく戸が叩かれる音がした。あまりに大きく叩かれたその音はリアンを緊張させた。カイルとしても胸騒ぎがした。ここの屋敷の状況を知っている者は限られている。すぐに扉へ向かった。

ラヴィリア

「カイク様！カイク様！いらしたら開けてください！」

聞き覚えのある声に反応し、すぐに扉を開ける。

カイク

「どうした、ラヴィ」

息を切らせながらもなんとかラヴィリアは伝えようとする。

ラヴィリア

「み、御子…いえ、ティア様が…ティア様が何者かに襲撃されています」

カイク

「状況は?!」

ラヴィリア

「城から治癒院へ帰る途中に…ティア様を渡せと3名ほどの男に囲まれました。城への道は塞がれていたで、なんとか私だけカイク様のもとへ辿りつけました。今、フィオネさん、コレット、エリスさんの3人がティア様を御守りしながら治癒院へ向かっているはずです」

カイク

「敵はこの都市の者か？」

ラヴィリア

「分かりません」

真つ先にティアを狙うというところを見ると、異国のものではない。それよりティアが天使であることを知った貴族を疑うのが妥当か。

リアン

「どうかしたの？」

カイム

「ティア…俺の妹が襲われている。悪いが話はまたにしてくれ」

リアン

「なら俺も行こう」

カイム

「何故？」

リアン

「カイムの妹だからな。悪いけど身の安全は最優先にさせてもらうが、協力できることはしよう」

迷う時間も必要もなかった。この男の武器が味方になるならば心強い。ティアに合わせたくはないが、一刻を争う。

カイム

「頼む。ラヴィはすぐにリシ…王の下へ行つて兵を出させてくれ」

ラヴィリア

「分かりました」

カイムは装備していたナイフを確認し、すぐに屋敷を出る。リアンもすぐにその後を追う。



## 第二十五章

### 危機

## 第二十五章

### 危機

城と治癒院の直線状とルキウスの屋敷、その3点を結ぶ道筋を頭に浮かべる。点から現れた線はティア達の歩いた道となる。自然に自分たちが歩く道もその線と近くなる。その線上に上層と下層を繋ぐ階段の1つが浮かぶ。そこを通って真っ直ぐ治癒院へ向かえばまず擦れ違う心配はしなくてよい。問題は間に合うかという時間だ。

リアン

「カイムの妹ということだと牢獄だね。暴漢か？」

カイム

「いや、違う。目的は分からないが、今は下層の治癒院というところにいる。そこを目指す」

リアン

「分かった」

間に合うか？いや、間に合わせる。

- - -  
- - - F i o n e S i d e V i e w - - -  
- - -

月の光もない暗い夜。鮮血の血だまりになっているはずが、渦黒い水にしか見えない。いつも通りあるのは錆びた臭いのみ。後ろにあるのは小綺麗な建物。その対象にあるのが渦黒い水。やはり見た目がどのように綺麗であつても、穢れた建物。穢れた血や者がそこに囲う、翼の監獄。だが今はその穢れを落とす楔として変わろうとしている。それに抗っているのは人か、運命か。

また血飛沫があがる。悲鳴と共に

フィオネ

「大丈夫か」

身なりの整った兵士

「ううっ…」

彼の状況を確認する余裕はない。視線を外せば殺される。相手の数は3人と1つの死体。敵の数が途中で増えたことからこれ以上を想定しないといけない。とても自分とこの兵士の2人で守り切ることが不可能。ラヴィリアの応援が来るまでここを死守しなければならぬ。治癒院に入れたら最後、中の3人の命はない。敵は恐らくラヴィリアが応援を呼びに行ったことは知らない。それが唯一の希望。

背の低い男

「くそ、この女、強い」

長刀を持つ男

「急げ。この騒ぎに気づかれたら城から兵が来る。早く殺せ」

背の低い男は間合いの外からナイフを投げつける。暗闇により、それはフィオネの目の前に来るまで気づくことができない。投げられた2つのナイフの1つを避け、1つを剣で叩く。集中力が切れれば1つの傷を負う。その傷はすぐに死につながる。例えば軽い傷だとしても。

フィオネはナイフを叩き落とすと、反射的に背の低い男を間合いに入れる。ナイフが2つ飛んできた時は相手が一瞬丸腰になることを意味する。剣技の鍛錬をずっと積んできたフィオネだからこそ反射的に動けた。

フィオネ

「はあ！」

背の低い男

「がああああ！」

ぼとりと墮ちる。相手の左腕を切り落とした。生死の戦いでは確実な勝利となる手応え。しかしフィオネは大きな過ちを犯す。大量の血をまき散らす男の手によって、フィオネの視界は侵された。ミスと言ったものではない。暗闇が生みだした不運。命を裂くほどの不幸。

フィオネ

「ぐっ……」

肉付きのいい男

「今だ！早く殺せ」

長刀を持つ男

「はあああ」

侵された視界の端で長刀を捉え、辛うじて一閃を交わす。しかしすぐに振りおろされた長刀は刃を返し、そのままからフィオネの身体をめがけて襲ってくる。

二閃目は視界に映らない。ただ経験からフィオネは切っ先の動きを無意識的に予想し、剣で防ぐ。二閃目もフィオネに傷を負わせるには至らない。しかしフィオネの剣は弾かれ、闇に消える。そして三閃目がフィオネに襲いかかるうとしていた。

長刀を持つ男

「死ねえ……」

無意識で保っていた生が、フィオネに死を告げていた。しかしその告白は事実とならず、三閃目はフィオネを侵す前に途中で消えていた。今度は自分の意識で後ろに身を下げ、目を晦ます血潮を拭き取る。視界が戻った時には1つの事が終わっていた。

- - -  
- - F i o n e S i d e V i e w E n d - - -  
- - -

フィオネを目視で確認できる距離まで詰めることができた。状況から見て2対4。2つは死体か分からないモノになり、局面としては1対3。いや、1人の腕が無いところを見ると1対2にもなっている。カイムのナイフが手を離れた瞬間と、カイムがフィオネの手に剣が無いことを認めるのはほぼ同時だった。ただ充分に「敵はどれか」「先に倒すべきものはどれか」この2つが判断できた時点でナイフは相応の者へ飛ばすだけだった。ナイフは狙い通り長刀を振りおろそうとしていた男の背にあたり、絶叫をあげる。1人、戦いから離脱し、2人が入り込む瞬間。

肉付きのいい男  
「くそつ、敵か」

右手が空になったカイムに向かって肉付きのいい男は真っ直ぐ剣を振りおろす。肉付きのいい男は見た目とは裏腹に、充分修羅場を経験した判断ができる男だった。自分の体重を乗せた剣を、カイムは左手のナイフで切っ先を反らさせるが、力といい厳しい。二閃目、三閃目とカイムに襲いかかり、その度に後ろへ下がりが、左手で流すのが精々だった。右手にナイフを持たせる余裕を与えてはくれない。敵はかなりの腕前だった。

リアン

「横に思いつきり逸れろ」

後ろの言葉に思わず反応し、言葉通りの動きを身体がする。殺し屋をやっていた自分が、周りからの影響で無意識に反応できることは限られている。その限られた無意識を呼び出させる一言だった。心許していない得体のしれない異国の言葉を真に受けることができた理由は、その後カイル自身が考えても答えに辿り着けない。

左前方の顔が苦悶のものとなり、手から得物が落ちる。そして数秒の後、片膝をつく。ほんの少し前、自分になった状況のものだ。最も当たった個所は自分の足とは違うようだが。意味も分からせずに痛みを走らせ、身体が意識に抵抗する。そして横たわる。これがリアンの銃。

ナイフを取り出し、右手に持たせる。瞬時に生きる為、守る為に状況を判断する。これで戦いが終わりか、確信が持てるまでは気を緩めてはならない。周りを確認しつつ、倒れた敵に足をすくわれなように気をつけてフィオネの下に背を向けて近づく。左の目の端に動きが見えたと思ったらすぐに気配が消えた。恐らくまだいた敵だが襲うことを諦め、退いたところを見ると人数として分が悪いと判断したか、リアンの不可思議な攻撃に恐れをなしたか…暫く様子を見ても光景に変わりはない。構えた両腕を降ろす。それを見たりアンも銃を降ろしてカイルに近づいてくる。

カイル

「助かった」

リアン

「終わったのか？」

カイル

「恐らくな。完全には気が抜けないが」

フィオネ

「カイル…助かった。礼を言う」

カイル

「フィオネこそ良く守ってくれた」

リアン

「やっぱりフィオネちゃんは剣の腕もすごいね！男相手に引けをとらないんだもん」

カイルは気づいていた。リアンの口調が時々変わること。一人称が「俺」になっていたことも。何故あの状況でそんな男の言葉に身を委ねることができたのだろうか。

フィオネ

「大丈夫か！しっかりしろ」

フィオネはすぐに倒れていた身なりが整っていた兵士に近づく。どうやら息はあるようだ。が、重症のようだ。

カイル

「リアン、この兵士を中に入れてくれ。医者がいる。フィオネ、リアンに治療院を案内してくれ」

フィオネ

「…分かった」

リアン

「カイルは大丈夫なの？」

カイル

「もうすぐ城から兵がくるはずだ。それまでここで見張る。倒れた

兵士を医者まで連れて行ったら戻ってきてもらうと助かる」

リアン

「分かったよ！ちょっと待っててね」

カイル

「誰かに撃たれた足以外怪我はない」

リアン

「まだ言うの？もう謝ったじゃん」

カイル

「ただの皮肉だ。さっさと頼む」

不満そうなリアンの表情が視界から消える。後ろからフィオネの「ありがとう」という言葉が聞こえ、それに対して片手を挙げて答える。

倒れた敵で生きている者はジークに…いや、オズに任せるか。今回の襲撃は失敗に終わった。失敗に終えたからこそ、裏で糸を引いていたものに辿りつけるはずだ。遠くに多くの人の気配がする。数からして城の兵士だろう。これで落ち着けるか。

## 第二十六章 羽化病

### 第二十六章 羽化病

カームはラヴィリアの姿を認める。隊を成した兵の中に紛れていた。ラヴィリアもカームと状況を確認すると、すぐにカームの下へ駆け寄ってきた。

ラヴィリア

「カーム様！大丈夫ですか！？」

カーム

「ああ、怪我はない。ラヴィこそ良くやってくれた」

隊の長とみられる男

「貴方は…カーム様ですね。状況を教えていただけませんか」

カーム

「リシアにはこの見た状況をそのまま報告すればいい。それよりこの中にリリウムを知っている者はいるか？」

後ろから一人の若い男がおずおずと手を挙げる。

おどおどとした若い兵士

「は、はい…自分は一度、ジーク様をお呼びに言ったことがあるので…」

カイル

「ちょうどいい。この倒れている者の中で生きているやつをジークに届けてくれ。俺の名前を出してこの状況を話してくれ」

隊の長とみられる男

「待ってください。リシア様に報告があります。その後で…」

カイル

「リシアには俺から言っておく。あんたに迷惑はかけない」

隊の長とみられる男

「…。その兵士、カイル様の言われたとおりにしろ」

カイル

「助かる。死体は適当に処理をしてくれ」

隊の長とみられる男

「今後の襲撃の可能性は？」

カイル

「ゼロではない。ここを見てもらいたい」

隊の長とみられる男

「了解しました。その2人！怪我人を運ぶのを手伝ってやれ。あとそこ！死体運びとリシア様への報告を頼む。それ以外はここの見張りだ」

全兵士

「はっ！…！」

とりあえずは外はこれでいい。問題は中か。まさかリアンとティアを会わせることになるとはな…。何事もなければいいが。ラヴィに目で合図をし、治癒院の中へ進む。

ラヴィリア

「カイク様…すいません。緊急とはいえ、御子様とあの他国の者を会わせることになってしまつて…」

カイク

「いや、仕方が無い。それよりよくあの状況で機転を利かせてくれた。今後モリアンの前では御子とは呼ばないでくれ」

ラヴィリア

「はい…コレットにも言い聞かせます」

急いでいつもの研究室となつた元看守室へ向かう。そこには既に6人、カイクとラヴィリアを加えて8人が集つた。この部屋では窮屈な人数だ。皆、カイクの姿を見て、安堵の表情を浮かべる。

カイク

「待たせた。怪我人は彼1人か？」

エリス

「カイク、遅い。そうね…命には別状ないけど、暫くベットのうえコレット

「今日はここで看病して、明日城の医務室へ連れて行くことにしました」

ティア

「カイクさん…」

不安な表情でティアはカイクを見つめる。ティアは命を狙われた上に、得体の知らない異人までいる。不安は最もだ。エリスもラヴィもカイクからの紹介を待っている。リアン本人も本人でなかなか居心地が悪そうだ。

カイク

「紹介が遅れた。こいつはリアンだ。外殻大地の人間だ」

リアン

「カイク！内緒に……」

カイク

「悪いがこいつらは特別なんだ。皆、国王とも知り合いだ。リアンが考える問題はないと俺が保証する。こっちがラヴィで、こっちがティア……俺の妹だ。そしてこっちが医者のエリスだ」

リアン

「うーん……確かに女の子ばかりで……他に僕のことを知っている人は？」

カイク

「あとは1人城にいるもので、この人間と同じような者がいる。そこから漏れることも問題ない」

リアンからは全面的に信用した訳ではないが仕方が無い、という気持ちで表情に出ている。意識のない傷ついた兵士、後は女だけ。とりあえずここにいる者に自分の正体が知れたからといって、何も手立てはないだろう。こいつから女に甘い一面は垣間見えている。問題はこの中の人間の発言でリアンに嘘がばれることだ。本当の王はリシアであること、ティアは天使であること。ラヴィは上手く危機を脱したが、ティアならのんびりと踏んで行きそうで怖い。ここに長居するのは得策ではない。

リアン

「カイク。ここは治癒院といってたけど、天使病の？」

カイル

「天使病…ああ、そうだ。ここでは羽化病と言っているが」

そう言えばあの時、羽化病と天使の繋がりを聞かせてもらおう直前にここへ来たんだった。しかしこの場で話すのは好ましくない…その考えを無視するかのようにリアンは話を進める。

リアン

「本当に天使…羽化病についてこの国は知らないんだね。こんなことをして何故神の怒りに触れないか不思議だな」

コレット

「羽化病と神に何か繋がりがあるのですか!？」

手遅れだった。コレットが話に食いついた。頑固者のコレット。

頼むから悪い方向へ進まないでくれ…

リアン

「僕らの国。ここ以外の国ではこんな牢屋に入れるようなことはない。もっと丁寧に扱われる」

コレット

「やはり伝染病ではないのですね!」

リアン

「伝染するものではないよ。選ばれた者だ」

ティア

「選ばれた者…と言いますと、天使さんにですか？」

リアン

「ティアちゃんっていったっけ？天使にさん付けって初めて聞いたよ」

ティア

「そうなんですか？」

リアン

「僕みたいに気にしないで『天使』と呼ぶか、恐れて『天使様』と呼ぶか…どっちかだもん」

エリス

「それで貴方の国ではどんな存在なの？」

リアン

「ああ、そうそう。天使に選ばれるんじゃなくて神に選ばれる存在なんだ」

コレット

「神に？」

リアン

「羽化病患者は神への捧げもの。神の実験台とも言われている」

ラヴィリア

「捧げもの…生贄ですか！？」

リアン

「そんなものだよ。これも歴史的文献の情報だからどこまで正しいか分からないけど…神は人間の中から無作為に羽化病になるものを選ぶ。選ばれた者は羽根が生え、500日後に天へ召される」

ティア

「死んじゃうってことですか？」

リアン

「そんなものだけど、普通の死とは少し違う。完全に安楽死。500日後に意識を失ったまま、天へ光となって消えていく」

カーム

「どうして生贄というんだ？」

リアン

「それは人間の本質を見る為の実験体になると言われてるからだよ。悪行を働いた者も、敬虔な信者も無作為に羽化病になる。そうしたものを天に運び、神が人間を滅ぼすべきかの判断をするための材料になる」

ティア

「判断…材料…」

リアン

「だから国々はこの羽化病に罹った者は手厚く保護する。最高の環境と患者の求めるものを全て用意してご機嫌をとる。大抵の患者は死の宣告で狂っちゃうけど、このご機嫌取りで満足に天へ旅立つ」コレット

「そ、そんな…」

リアン

「あくまでも昔のお話。だからこんな環境に羽化病患者を閉じ込めて苦痛を与えている国が、何故無事に生き伸びているのか…不思議だね」

それは天使・ティアのおかげ。文字通り、完全にこの都市は神に見放されていたのだ。聖女イレエヌから無理矢理絞り取ったエネルギーで浮いていただけ。神と言われる者はこの天使が尽きても何もせずに都市を崩壊することになっていたのだろう。非現実的であつてもうつすらと神が見えてきた。

エリス

「ではこの病気から救う方法は？」

リアン

「ないと思うよ。あつても誰も救わない。一人の人間を助けても、

神の怒りで世界中の人間が死んじゃうんだから」

カイク

「…」

以前、自分が置かれた状況と同じだ。リアンの言う「一人の人間」がティアで、その一人を救おうとして都市の滅亡に目を瞑った自分がある。もしかたティアが…ここにいる大切な者が同じように羽化病にかかり、死が決められたら、自分はどんな選択をするのだろうか。選べるのならまた同じ道を選ぶのか。

ティア

「どうして神様はそんな酷いことをするんですか？ここにいる人がみんな死んじゃうなんて…」

リアン

「神はただ管理しているだけ。神も天使もティアちゃんみたいに優しくないんじゃないかな」

コレット

「そんな神を侮辱する発言は…」

リアン

「コレットちゃんが聖女イレエヌだったっていう話はカイクに聞いたよ。信者にとって辛いのは分かる。でもそれが僕らの国が持っている真実だよ。誰も恐れて確認できない真実だけどね」

ラヴィリア

「…」

誰も言葉を発さない。ここにいる者は人一倍羽化病と向き合ってきた。少しでも命を救おうとしてきたエリス。天の使いと考え、彼

らの幸せを願ってきたコレットとラヴィリア。自らの使命でここに人々を送ってきたフィオネ。そして自身が天使で、羽化病を救うことが出来るティア。誰にとっても残酷な答え。皆、苦痛を感じている。カイル自身として一番気にしたのはティアだ。この話を聞いてしまった彼女が言いだす言葉は予見できた。

カイル

「とりあえず今日は休もう。夜も遅い。皆ここで泊まろう。いいな、リアン？」

リアン

「うん、そうだね。僕一人じゃ屋敷に帰れないし…牢屋のベット借りてもいいかな？」

エリス

「私とこの患者も牢屋の一室を使うわ。ここはラヴィリアとコレット、フィオネと小動物でつかいなさい。4人なら何とか寝れるですよ」

ティア

「はい…ありがとうございます」

エリスなりの優しさなんだろう。自分も苦しいはずなのに。あくまでも医者として患者と向かい合う。壊れた人形だった頃の面影は見えず、逞しく美しく強い。いや、強さではなく、やさしさか…まずはティアを説得しないといけない。リアンが寝静まるのを待つか。



## 第二十七章

白

## 第二十七章

白

静寂が包むと治療院が変化する前の雰囲気が帰ってくる。一泊の宿として選んだ牢の中も、爪で引っ掻いたような後が血で綴られている。この治療院は子どもたちの笑い声があって変化が生じる。それが無ければやはりただの牢屋。

カイルとリアンは同じ牢の中、距離にして2mほど離れたベツトで互いに横になっている。床に就いて訳1時間。ずっとリアンから眠りの気配を感じ取ろうとしているが、それが掴めずにいる。起きているのかも分からない。

ギー…

牢が開く音がする。その音に反応して身を起こす。それはリアンもおなじだった。音の主はティアだった。

ティア

「ごめんなさい…お2人共起こしてしまいましたね…」

そっとリアンの顔を見る。互いに気まずそうな顔で見つめあっていることになる。寝れなかったのか、寝なかったのか…次に口を開いたのはリアンだった。

リアン

「行ってあげなよ。妹さん、襲われたばかりで不安だろうから」

カイル

「あ、ああ…」

その言葉に促されたように、ティアの背を押して牢屋を出て行く。ティアと話をする言い訳を考えていたが、向こうから助け舟を出された。ティアに静かに話せる場所を案内させた。それは治癒院の2階の奥、誰も使われていない牢の一室だった。

ティア

「すいません。突然起こしてしまって…どうしてもお話したいことがありますして…」

カイル

「羽根付きの治療をしたいって言いたいんだろ？」

ティア

「えっ！どうして知ってるんですか！？」

カイル

「声がでかい…あの話を聞いてティアの言い出しそうなこと位、分かる」

ティア

「そうですか…」

嬉しそうな、哀しそうな複雑な表情になる。そんな顔はしないで

欲しい。

カーム

「先に答えよう。羽根付きの治療はするな」

ティア

「どうしてですか！？助けられる命ですよ？」

カーム

「天使の力を使ってまた覚醒したらどうする？ティアはもう普通の人間として生きるんだ」

ティア

「カームさんは私が天使になったら…嫌いになりますか？」

カーム

「ならない。それはティア自身も分かっているだろ」

俯き、また喜びと哀しみを混在の表情が現れる。やめてくれ…

ティア

「なら、救える命は救いたいです」

カーム

「世界中に羽根付きはいる。全員救えると思うか？」

ティア

「それは…」

カーム

「全員は救えない。そうなると救う人間、救わない人間を選ぶことになる。ティアにできるか？」

また下を向いたティアに追い討ちをかける。

カイル

「しかもリアンの話が本当なら神の供え物を奪うことになる。神が機嫌を損ねて世界を滅ぼしたらどうする？」

ティア

「そう…ですよね…」

カイル

「気持ちは大切だ。しかし行動に移せば全て解決するという訳ではない。もう一度言う。普通の女として生きろ」

ティアは動かない。考えを巡らせているんだろう。ティアは感情からの答え、俺は理屈からの答えのはずだった。この時まででは。

ティア

「分かりました。でももう少し考えさせてください」

カイル

「行動に移す前に俺に言うてくれないか？約束してくれ」

ティア

「はい、カイルさんには素直に気持ちを話します」

カイル

「それでいい。深く考えずに休め。早ければ明日にでもティアを狙った連中も分かる」

ティア

「ああ！そういえば私、命を狙われたんです！」

カイル

「自分のことだ。自覚持て」

最もティアらしいと言えばティアらしい。自分を後回しにして周りの事ばかり考える。これだからティアは目を離せられない。…い

や、そういう女は多いか。

適当な世間話を挟んで、ティアを研究室に送った。こんな話で彼女の不安が少しでも削れるならいい。ゆっくりと休んでくれ。

- - - - -  
E u s t i a   S i d e   V i e w   - - - - -  
- - - - -

気がつくのと周りに何も無い。真つさらな絹の上に自分だけポツンと置かれているようだ。どんなに見渡しても何も無い。不安にかられて小さな声で「カイクさん…」と呟いてみる。しかしその呟きは耳に聞こえない。何も変わらない。

少しすると目の前に何か見える。『何か』であって結局何か分からない。人のようにも感じるし、とても大きいものにも小さいものにも見える。完全な矛盾と分かっているながらもその印象が拭えない、そんな存在が目の中にある。そうだ、分かっているのは矛盾しているってことだ。

???

「唯一地上に残り、翼を穢した天使、ティアよ」

ティア

「貴方は…神様ですか？」

???

「そう呼ぶ者もいる」

ティア

「神様、お願いです！羽根付きさんを助けてください」

???

「今から約400日後、また一国を浮かせる。その選別の為に愚かな国を私に報告しなさい」

ティア

「浮かせるって…やめてください！国を浮かせるのも羽化病もやめてください！」

???

「天使、ティアよ。立場をわきまえなさい。世界を周り、最も愚かな国を調べるのだ」

ティア

「待つて…」

また何もない白の上に独り居た。どんなに声を張り上げてても声にならない。聞こえない。ティアは初めて知った。こんなにも残酷な白があることを

- - - - -  
s t i a   S i d e   V i e w   E n d   - - - - -   E U  
- - - - -

## 第二十八章

## 玩具

### 第二十八章

### 玩具

カイルはゆつくりとベットから降りた。こんな誰でも入れる牢の中で、深い睡眠なんて取る気になれない。ましてやすぐ横には得体の知れない人間もいる。今のリアンは深く眠っているようだ。用心から起きていたのではなく、こんな不衛生な場所で寝付けなかっただけかも知れない。

時間も早い。皆を起こすのも悪いので、一人でジークの元へ行くことにした。ジークも寝ているかも知れないが、ここに居てもしょうがない。

治癒院を出ると兵士が挨拶をしてくる。この雰囲気では襲撃はなかったようだ。すぐ戻る旨の伝言を頼み、牢獄へ向かう。

~~~~~

リリウムは灯りこそ消えていないものの、もの静かだった。いつも

なら…と言っても少し前の事になるが、この時間は出張の娼婦がパラパラと帰る時間だ。全く会っていないクローディアと会えるかとも思ったが、今や腕利きの副官になっているはずだ。まず会えないか。扉を開けるとこれも久しぶりのオズが居た。

オズ

「ご無沙汰してます。カイルさん」

カイル

「ああ。顔出したかったんだがな、なかなか」

オズ

「カイルさんになら特別娼婦稼業してもいいとジークさんから言われてますが？」

カイル

「ジークの言う事を気にしないでくれ。それよりなんか…機嫌いいのか？」

オズ

「分かりますか？カイルさんがくれた野郎がなかなか愉しませてくれたんで」

カイル

「やっぱりオズの拷問か。ジークはいるか？」

オズ

「ジークさんは帰られています。何か分かったらカイルさんには話して良いと言われているんですが、聞きますか」

カイル

「ああ。勿論だ」

オズ

「いや、なかなかしぶとい奴でしたよ。お陰で取って置き of 玩具が使えました。先ずは釘を丁寧に刺しましてね…」

カイル

「オズの遊び方はいい。吐いた内容を教えてくれ」

オズ

「はあ。いや、出てきたのはジェネリアっていう小物貴族だね。俺も副官なんてのをやって、少し目をつけていた奴なんですよ。そいつが牢獄民の手練れを雇って嬢ちゃんを襲わせたようです」

カイル

「じゃあ根っ子までもう手が届いたってことか？」

オズ

「一応、この貴族にも聞いてみますが、恐らく根でしょう」

カイル

「そうか。ではジークに任せると伝えてもらっていいか」

オズ

「それは構いませんが…もう行かれるので？」

カイル

「ああ。ジークとオズに任せれば問題ないだろう。死体はもう始末したのか？」

オズ

「いやあ、余りに愉しくてまだとってあります。カイルさんもどうです？」

カイル

「オズ程の加虐志向はない。そろそろ行く」

オズ

「そうですか。ではこれでも持って行ってください」

そう言つて火酒をよこす。大人しければ気の利く男で終わるんだが…これからのロシアの時代はオズには苦しいものだろう。オズは変われるだろうか。

また来た道に戻る。時間はもう朝と昼の狭間だった。

治癒院に戻るとリアンの姿が見えた。何やら兵士と話している。少しの間、様子を見ようと考えていると、リアンは直ぐに治癒院に消えて行った。会話をしていた兵士に尋ねる。

カイク

「今の男…何を話してた？」

飄々とした兵士

「大した話ではないですよ、世間話です。カイクさんのお知り合いではないんですか？」

カイク

「まあ、知り合いだが…それでどんな世間話だ？」

飄々とした兵士

「いや、あの男が夢で天使を見たなんて言い出して、天使を見た事があるか？つて聞いてきただけです。なんか話がチグハグで…薬でもやってるんじゃないですか？」

カイク

「そうかもな…それでお前は見たことあるのか？」

飄々とした兵士

「いえ、自分は知らないですよ。本当にいるんですかねえ？」

カイク

「さあな」

天使までは近づいたか。となるとティアまでの距離はそうはない。これからどうするべきか…

考えながら治癒院に入り、研究室まできた。答えは出ない。リアンについては完全に信用した訳ではないが…

扉を開けると、女性陣がパツとカイムをみる。何事も無かったかのようにリアンはいる。

ティア

「カイムさん…」

また悲しそうな顔に戻ったティアが居た。昨夜の話では解決しなかったのか？

エリス

「ティアが貴方に相談ですって」

カイム

「…またか？」

ティア

「えつと…はい…」

カイム

「分かった」

ティアを連れて昨晚の牢へ向かう。夜と違って、既に子ども達が無邪気にはしゃいでいる。それを見つめるティアの寂しそうな顔はとても印象的だった。

椅子に座ると、直ぐに話を促した。

カイム

「それでどうした？」

ティア

「昨日の夜…神様の夢を見ました」

カイム

「夢？どんな内容だ！？」

ティア

「400日後にまた一つの国を浮かせるって…その国をどれにすればいいか調べると言われました」

カイム

「…それで？」

ティア

「羽根付きさんの事もお願ひしたんですが、全然聞いてくれませんでした。私どうしたら…」

カイム

「こつちの話は聞く気はないってことか」

ティア

「夢のお話、信じてくれるんですか？」

カイム

「ティアの話だからな。それでこの事は誰が知ってる？」

ティア

「ここにいるリアンさん以外の人です」

カイム

「それならいい。リアンは天使の存在に気づいてる。気をつけてくれ」

ティア

「はい。けど私、何をすれば…」

カイル

「何もしなくていい。天使としては行動するな」

ティア

「そう、ですよ…」

カイル

「また夢を見たら教えてくれ。それとあんまり気にするな」

ここでいきなり神が出てきても困る。しかも生贄をティアに選べという。ティアに出来るはずがない。時間はある。様子を見るしかないな。

第二十九章

担保

第二十九章

担保

ティア襲撃から2日経った。その主犯である貴族はオズの言うとおりだった。リシアに隠れて尋問した結果、天使の力を得れば自分が王になれると思っただけ。王になる前に、もうこの世から消えてしまったが。

エリスはティアの天使の力を調べていた。ティア自身も同意したものであり、ティアが力を使わないことを条件に放つて置いた。コレット、ラヴィは治療院の環境改善に更に力を入れていた。

リシアにもティア襲撃の貴族の話も含め、全ての情報は届いていた。ジークも新たな外殻大地の人間が入り込まない様に、牢獄の大地への入り口の警備強化にあたっていた。

当のリアンは大人しくルキウスの屋敷で調べ物をしていた。もう自分一人で下層までなら自由に動けるようになっていた。こちらの嘘がバレるのもそろそろかと頭を悩ませていたところで話を切り出された。

リアン

「直ぐに知られるって分かったの嘘だよね？」

カイル

「ああ」

リアン

「…」

カイル

「だから聞きたいことには答える。逆に聞かなければ言わない」

リアン

「分かった。まずこの国の王はジークではなく、リシアっていう名だよ。前に言っていた『僕のことを知ってる城にいる一人』って彼女のこと？」

カイル

「そうだ」

リアン

「そう…それで天使はティアちゃんだね？」

やはりそこまで辿り着いていたか…

カイル

「そうだ。もつともそれを知ってる者はこの国で限られてる。どこで聞いた？」

リアン

「ティアちゃんが襲われた夜にね…少し聞かせてもらった。彼女が襲われた理由が分からなかったから気になってね」

カイル

「そうか」

その事については敢えて嘘をつかなかった。リシアが王であることも、天使が存在することも、いずれ気づかれるのは分かっていた。だがティアが天使と言うことは知られたくはなかった。

相手を騙す為には嘘はついてはならない。嘘は新しい嘘を呼び、また嘘をついてる時、人は不自然になる。だから大切なのは如何に嘘をつかずに相手に勘違いをさせるかということだ。そう考えてティアが襲われた理由については、聞かれるまではこちらから答えないことにしていた。もっともあの夜は無用心だったか。

カーム

「それでどうする？ティアを連れて行くか？」

リアン

「そんな人攫いみたいな事はしないよ。あくまでも調査だから。…どうやって天使が現れたのか、どんな力をもっているか。それを教えてくれないかな？」

リアンがティアを連れ去ることは考えにくいが、この情報をリアンの国、パンドルとやらに持って行かれれば騒がれる。やはり隙をみて殺すしかないか…少なくとも今は話してこの場に留めるしかない。

そしてリアンに全てを話した。ティアが前の天使、聖女イレヌの娘であること。ティアが怪我や羽化病の治療能力を持っていることも全て。とても現実的ではない話だが、リアンは完全に信用したようだ。

リアン

「最初の聖女イレヌは祈ることで、人間から天使になったのか。そんなこともできるんだね」

カーム

「ティアは先日神らしき者が現れる夢を見ている。存在はするようだな。ティアが寝ぼけてた可能性もあるが」

リアン

「教えてくれてありがとう。それで僕を殺す？」

カーム

「何故そう思う」

リアン

「自然に。この世界では僕の世界以上に死が近いから」

カーム

「殺される前に殺すか？」

リアン

「最初に言っただけ、僕には愛国心なんてないんだよ。世界が滅亡しようとは構わない。わざわざ国へ報告する気はないよ」

カーム

「じゃあ何しにここに来た？」

リアン

「調査だよ。ただそれは国の為じゃない。好奇心から来る生きる暇潰しってとこかなあ」

カーム

「ここでは生きるのに必死なやつばかりだ。お前の国だと随分気持ちに余裕を持てるらしいな」

リアン

「うん。そうだね。生きる余裕はあるよ、腐るほどに。娼婦の話はしたでしょ？そんなつまらない世界なんだよ」

カーム

「それでこれからどうする気だ？」

リアン

「まだこの方が面白いから居させて欲しい。僕から危害を加えるつもりはないから、殺さないで欲しいな」

カーム

「それを信じると？」

リアンはその答えの代わりに荷物の中から金庫を取り出した。鉄製ではない軽い金庫。その番号を合わせて開ける。中には銃が三つ。それとその弾と言われるものが大量にあった。一つを取り出して机に置く。

リアン

「僕は拳銃を5丁持っている。1丁と銃弾少々をこの国へ寄付する。それで信用して貰えないかな」

罨。それも頭を掠めた。しかしそれよりも、これが本音であると言う方が現実的だった。

カイル

「バイクも預けてくれないか？」

リアン

「分かった。鍵を渡すよ。その代わり危ないから勝手に運転しないでね？死ぬよ」

カイル

「この鍵と銃をもってリシア…国王に相談してみる」

リアン

「どうせなら会ってみたいな。ジークも充分国王っぽいけど、本物ってどんなんだろう？」

カイル

「あれのどこが国王に見えるのか…」

そうは言ったが、リアンにもジークの内側が垣間見えたらしい。
見る目はあるのか。

リアン

「あとティアちゃんの力もみたいなあ」

カイク

「それは許してない。あいつは天使として生きさせない」

リアン

「本当のお兄ちゃんみたいだ」

リアンは無邪気に笑う。普通なら腹立つところだが、本当に邪気がない。怒っても無意味だ。

カイク

「明日、正式に紹介する。リシアにも話しをつけてこよう」

そう言って机の上の銃と鍵を持つ。銃の重みは予想以上だった。

第三十章 天使の力

第三十章 天使の力

また一同が城の一室に顔を揃えた。今回は天使が一人、今回は外殻大地の人間が一人増えている。会議室はこれ以上入り込む余地はなさそうだ。

話はまた情報共有が主。共有と言ってもリアンが全てを知ったことを伝え、リシアとリアンの顔合わせをしただけだった。

ジーク

「これが噂の銃ってやつか」

話が落ち着いたところで机の上の銃にジークは手をやった。

ジーク

「それでこれはどうやってつかうんだ？」

リアン

「これはダブルアクションのリボルバーで……って言っても分からないか。銃弾をこうやって詰め込んで、この引鉄を引くだけだよ」

ジーク

「これでもう撃てるのか？」

リアン

「うん。六発までは連続で撃てる。だから人に向けないように……」

ジークは直ぐに銃をリアンの頭に突きつけた。

ジーク

「これでここを引けばお前は死ぬってことだよな？」

リシア

「やめろ！ジーク！何を考えている！？」

ジークはあの音楽再生機を弄っていた時の表情をしていた。とても人を殺す前の表情には見えない。

ジーク

「お前の言った操作方法は嘘か？」

リアン

「嘘じゃない」

ジーク

「死ぬ前の面には見えないが？」

リアン

「分からない。少なくともここに来ただけの俺だったら震えて命乞いしてただろうな……」

ジークはジツとリアンの目を見る。リアンも目を離さない。ジークを刺激しないように誰も声を出せずにいた。

そして徐に銃口を壁に向け、引鉄を引く。独特の音をたて、壁に穴を開ける。

ジーク

「本物のようだな、両方共」

カイル

「ジーク。お前の冗談は冗談に見えない。やめろ」

ジーク

「冗談じゃないさ。俺はいつでも本気だ」

ジークはケラケラと笑う。そして銃が開けた穴を見つめる。

リシア

「全く…いい加減にしろ、ジーク。…話は大きく変わるが、ティア。また天使の力を取り戻す気はあるか？」

カイル

「それは反対だと言ったはずだが」

リシア

「ティアに聞いているのだ。正直に言えば国として天使の力は欲しい」

カイル

「リシア…お前もあれ程天使の力を利用することは反対してただろう！」

ジーク

「わかってるだろう、カイル。今、この国は最弱だ。こんなもの一つを持ち込んだ人間が国王と話せる位脆弱だ。武力では勝てないなら天使の力を使う。そうしなければ国は滅びる」

カイル

「ふざけるな。天使の力で助かった国が、また天使を利用して生き延びようとするのか？」

リシア

「言いたいことは分かる。しかしティア自身も含め、この国の民を護るにはそれしかない。ティアも他国に連れて行かれれば、それこそ何をされるかは分からない」

コレット

「私は御子の御心を優先します」

ティア

「私は…」

カイルも含めて利害の一致した考えだった。カイル自身は感情的に否定しているだけ。頭では分かっている。この国が国として辿る道を、ティアの為に天使として生きるべきと言うことも分かっている。前はティアの考え方を感情的と否定した。だが今は逆転している。

ティア

「争いは嫌です。それを避けることができるなら、私の力を使ってください。それに目の前の羽根付きさんも治したいです」

最後の抵抗と自覚し、言葉を発する。

カイル

「羽根付きの治療なんてして神の怒りに触れたら…」

ジーク

「夢に出て来たんならもう一度位出てくるだろ？神も居て、嬢ちゃんの夢が本物だったらの話だが」

コレット

「御子が嘘をついていると仰るんですか！」

ジーク

「いや、この嬢ちゃんが嘘をつけるとは思ってはいない。ただ神とやらは出て来てから、また考えればいいんじゃないか？」

カイル

「…勝手にしろ」

ティア

「ごめんなさい。カイクさん」

ティアを理解しているこの国の王の下に置くのが一番安全だ。他国に拉致されたらそれこそどうなるか分からない。分かってはいる。この答えに行き着くのも分かっていた。やはり抵抗は無駄なようだ。

エリス

「カイク…どちらにしてもティアは徐々に天使の力は取り戻している。ほって置いても結局天使」

フィオネ

「私も力になれるなら惜しまない。護衛ぐらいしか出来ないが、努めよう」

カイク

「それで具体的にどうすればいい？」

エリス

「待つしかないんじゃない？小動物が成長するまで」
リシア

「こちらとしても今は調査をしても仕方が無い。他国の侵入に警戒するしかないな」

ラヴィリア

「また御子様に神のお告げがあるかもしれませんね」

コレット

「そうですね。神のお言葉を待ちましょう」

こうしてエリスとティアは天使の力の研究を、フィオネは護衛、

リシアとジークは政務、コレット・ラヴィリアは治癒院環境改善、リアンに至っては物珍しく観光を楽しむといったそれぞれの時間の中に身を落とすことになる。

またカイルだけが何もする事がない。また奇跡の後の5日間に戻ってしまう様な感覚に陥った。けど虚しさはない。きっとこれもいい方向なのだろう。珍しくカイルは楽観的に考えた。

カイクさんの許可が出て、一番最初にこの力を使ったのはカイクさんだった。反対されてたから言えなかったけど、ずっとカイクさんの足を治したかった。最初は『大した傷じゃない』と断られたけど、我儘を言った。カイクさんの怪我を治せた時は、本当に嬉しかった。

カイク

「もう怪我はない」

エリス

「今度私の仕事をとつたら解剖する」

ティア

「ごめんなさい。でも私も前からエリスさんみたいに人の役に立ちたかったんです」

エリス

「小動物は羽根付きを治してて。カイクは私がジワジワと治す」

カイク

「ジワジワってなんだよ…」

あんなに反対していた羽根付きさんの治療も、私に負担がないと分かるととても喜んでくれた。…とても喜んでくれる姿は見せてくれないけど、でも分かる。それが分かって私の方が嬉しかった。いつも私のことを心配してくれて。何よりも一番に考えてくれる。それがカイクさんにとっていい事なのかなって考えることはあるけど…でも私はいつもカイクさんからいろいろともらってる。この嬉しい気持ちも。それは確かなこと。

エリスが研究室を出た隙にこっそりカイクに伝える。

ティア

「今日は久々にお料理します。カイクさん！食べてください」

カイク

「料理？ルキウスの屋敷か？俺の家にくるのか？」

ティア

「やっぱり知らないんですね。コレットさんやラヴィさんが調理場を作ってくれたんですよ！ヴィノレタみたいにしっかりはしてませんが…でもお料理できるんです」

カイク

「なんで治癒院に調理場作ってるんだ？」

ティア

「羽根付きさんもずっとここで退屈ですから。お二人が羽根付きさんの為に作ってくれたんですよ」

カイク

「この調子でティアが治せば、ここも閉鎖になるのにな」

ティア

「いいじゃないですか。ここが今までの治癒院じゃなくて、みんなが集まって遊べるような所になったら素敵じゃないですか」

カイク

「まあ、そうだな」

ティア

「とにかく食べてくださいね。お肉は少ないですけど…ヴィノレタ特性りんごパイも作ります！」

カイク

「わかった。楽しみにしてる」

場所も環境も変わっても、あの時の…昔の一番幸せな時間が戻って来た。城の研究室に閉じ籠っていた時はもう戻れないって思っ

た。これもカイクさん、皆さんのおかげ。

カイク

「じゃああと2人片付けたら買い物に行くか」

ティア

「はい！」

~~~~~

ベッドの上に身を置いてもつい微笑んでしまう。今日も一日、楽しかった。治した羽根付きさんはみんな喜んでくれるし、今日はカイクさんと買い物に行つて、お料理もした。久しぶりのお料理は前よりも上手いかなかったけど、それでもカイクさんは『うまい』と言ってくれた。

本当に何気ない一日なんだろうな。今までの毎日は常に恐怖があった。いつ死んでもおかしくなかったし、苦しかった。けど今は…『また襲われるかもしれない』と言われているけど、カイクさんもフィオネさんも守ってくれる。こんな『今』を送れるとは思ってもしなかった。

そんな安らぎに包まれたまま、ティアは眠りについた。

???

「地上の天使よ」

また何よりも白い世界にいた。そして目の前には光…既に前と同じ様に矛盾した存在。恐らく神がいた。

ティア

「神様！」

???

「愚かな国を調べると言っただろう」

ティア

「お願いです。国を浮かせるのも羽化病もやめてください」

???

「お前に発言の権利はない」

罵声はいつも浴びていた。侮辱も乗り越えることは出来ていた。しかしこの言葉の重みは何よりも重く、抵抗出来ない。それでも辛うじて耐えてティアは言葉を繰り返す。

ティア

「お願いです。もうみんなを苦しめないでください」

目の前の存在の気配が消え、また白だけに落とされた。言葉も掻き消える白。

~~~~~


第三十二章 彷徨い

第三十二章 彷徨い

その話は約束通りすぐにカイクに伝わった。全てを話すという約束があったからこそ、ティアは口を開いてくれた。それで無ければこんなにもカイクを悩ませる事は告げなかっただろう。ティア自身も約束があっても迷いは深かった。

カイク

「なにが神だ！また繰り返しかよ！」

カイクは荒れていた。このように感情が表面立つことも珍しい。しかし、怒りを向けたくても向けない神。何も出来ない。聞いているか分からないが、神に大して罵ることしか出来ない。

どこまでティアを、俺たちを弄べば気が済むんだ？人を殺して生きていた自分が、真つ当な最後を迎えられるとは思っていない。ただ理不尽な運命に狂わされ続けている目の前の少女への不幸には、どの様に考えても納得できるものではない。当たり前で受け入れていた筈の不条理。しかし受け入れていたのではなく、諦めていた。誤魔化していただけだった。受け入れられるものではない。

カイク

「ティア、行く事はない。神か何かは分からないが、俺たちを救う気は無いらしい。そんなモノの言う事は聞くな」

ティア

「そうですね。確かに私を助けてはくれないのかも知れません。それでも神様には力があります。それに逆らって皆さんが苦しむ事になるのは絶対いやです」

いつも自分を最後に考える。周りの人間にどれ程傷付けられても。

カイム

「代わりに俺がいく。お前には行かせない」

ティア

「そんなのはだめですよ。神様が怒っちゃいますよ」

カイム

「神なんて関係ない」

ティア

「大丈夫ですよ。神様も分かってくれますよ」

カイム

「お前は怖くないのか？」

ティア

「それは…でも私は本当に想った気持ちを伝えただけです。その結果です。仕方が無いですよ」

あくまでも明るく振る舞う。羽根付きを治したいと言っていたあの夜の方が苦しんでいる表情をしている。どうしてそんな表情になれるんだ？自分の不幸なのに

ティア

「じゃあ、カイクさん。このお話は終わりです。ご飯を作りますね！食べてくださいね」

笑顔と言葉を残し、ティアは治癒院の調理場へ向かって行った。とても食欲なんかない。ティアを残し、カイクは宛もなく外へ向かった。

~~~~~

暫く町を彷徨い歩き、やがて城へ足を向けた。城内に入り、ただただ螺旋上の階段を登り続けた。この国で最も高い所は城の屋上。少し前までは研究室の塔と並んでいたが、今はここしかない。

空は澄み渡っていて遠くまで見渡せる。雲も少なく、空の先さえ見えそうな青空が広がっていた。いらつくほどの青さだ。

ここに来た意味はない。ただここに神が来るというのなら一度その前に足を運びたかった。ふと神にリアンの銃は効くかと考えた。カイクにとっては銃は人智を越えたものでも、充分人の知恵で生まれたもの。神はそれこそ世界の人智を越えている。抗う術もない。考えても考えてもカイクに得るものは何も無かった。

少しすると扉が開く音がした。振り返るとそこにはリシアがいた。

リシア

「城の者がカイムを見たと言ってな。カイムがこんな所に来るのは珍しいな」

カイム

「珍しくない。初めてだ」

リシア

「何かあったのだろうか？聞かせてはくれないか？」

話す事に躊躇いは無かった。リシアは充分に信頼できる。もうティアの事で隠す必要のない相手だった。だからティアの夢について話した。

リシア

「そうか…私も少々無理を言ってしまった。そんなつもりでは…」

カイム

「分かってる。ティアが勝手に神を説得しようとして怒りに触れただけだ。リシア達を責める気はない」

リシア

「国はティアを失えば滅びる。国王がこんなことを言うては良くないが、それは仕方が無いと思う。ティアが居て、初めて今の国がある」

カイム

「…」

リシア

「カイム！私もティアを応援する、味方だ。カイムがそんなんでどうする！」

国の王がその立場から離れ、1人の友人としてティアの味方になる。

リシアはそう言った。リシアの国を想う心は誰よりも大きい。そのリシアが選んだ答え。

リシア

「カイク。皆、私と同じ意見になってくれる。私はこの事を皆に話すぞ？」

カイク

「ああ」

リシア

「まだ何が起きるか分からないんだ。そう、落ち込むな」

何も言わずにカイクは去ろうと思った。屋上の扉まで歩み、そのまま出る。そのつもりだった。

カイク

「リシア…ありがとう」

無意識から出た自然の言葉。結局、カイクはそれを残して出て行った。

~~~~~

まだ治癒院に戻る気にはなれず、ルキウスの屋敷に向かった。リアンに会った所で何もならない。それでも他人の方がいい時もある。

リアン

「ティアちゃんとフィオネちゃんが探してたよ」

カイム

「そうか」

リアン

「痴話喧嘩？」

カイム

「…」

リアン

「そういう雰囲気じゃないって」

カイム

「…リアン。ティアの行動次第では世界は滅びるかも知れない。どうする？」

リアン

「どうもしないよ。ティアちゃんに任せるよ」

カイム

「本気で世界が滅びてもいいのか？」

リアン

「うん。そんなに必死になる事じゃないし。寧ろティアちゃんがやりたいって事に協力するよ」

明るく笑いながら答える。ふざけているこの様子が、本気であることを示している。

リアン

「みんな死ねばいい。いつもそう思ってた」

カイル

「みんな？」

リアン

「自分も含めて全てだよ。僕の世界ではね、他人が他人の為に本気になると言ったことはないんだよ。そもそも本気になんてならない。周りの目を気にして、楽な道を選んで、綺麗事抜かして…それだけなんだよ。このノーヴァス・アイテルと違って空虚な世界」

カイル

「そんなにつまらない世界なのか？」

リアン

「少なくとも僕にとってはね」

ティアが必死に護ろうとしている世界を完全に否定している。そこに生まれる筈の不快感が何故かない。

それはこのリアンの考えることが分かるからだろう。常に騙して殺しあつて、嘲笑う。そんな人間は牢獄で嫌というほど見てきた。その牢獄とは正反対の発展したリアンの国でもそんな考えが生まれている。確かに自分も人間に絶望しているのかも知れない。そう言った本音とティアの味方になりたい気持ち。結局自分もその板挟みになり、心地悪い。

カイルはリアンにティアの事を話した。恐らくリシアからリアンの耳には行かないだろう。この男ももう既に充分関与している。得るもの求めてではなく、なんとなく話した。もちろんそんな軽い話ではないが。

リアン

「それでカイムはどうするの？」

カイム

「俺が代わりに行こうと思ってる」

リアン

「半分賛成、半分反対かな」

カイム

「半分？」

リアン

「ティアちゃんも連れて行ってあげなよ。神が夢に出て来るんだもん。逃げれる筈ないし、何より彼女が主役なんだから」

カイム

「そう思うか」

リアン

「うん、そうだね。その方が…筋が通ってるっていうのかな？」

カイム

「筋…か。悪いな、邪魔した」

そう言って席を立ち、扉へ向かう。後ろから「怒った？」と言う声が聞こえたがカイムは適当に「いや」と言っておいて出て行った。

町に出てまたぶらぶらと牢獄方面に歩く。意味はない。けど、最初の彷徨った感覚はなかった。

第三十三章 前夜

第三十三章 前夜

明日の夜を運命の日と定めた前夜。明日が世界の1つの区切りであると知った者が、上層の貴族の屋敷に集っていた。主催はやはりジーク。無事を祈る前夜祭と称して皆を集めた。その卓の上には今では高級食材となっている肉を使った料理等、華々しかった。その料理の品々は主にティアとラヴィ、一部エリスが作ったものであった。

コレット

「神との謁見を控えている今、こんな場を設けてはなりません」

そう言つて第一に反対していたコレットを上手く言いくるめたジーク。話術もさることながら、酒の席を設けるジークの執念の前ではコレットも力及ばない。それどころか、コレットも既に酔い夢心地だ。

ジーク

「ノリにノツた馬鹿騒ぎもいいが、こういう美女に囲まれた席つてのはいいもんだな。どうだ、リアン。楽しんでるか？」

リアン

「うん。こんな楽しい飲みは初めてだよ」

リシア

「リアンの国では宴会はやらないのか？」

リアン

「あるけど、ただの儀式だしね。それに仕事上の仕方無しの飲みがほとんどだね」

ジーク

「汗流した後の飲みなら美味いだろ？」

リアン

「汗なんて流れないよ。寧ろ飲む事も面倒な仕事かな」

ジーク

「つまんねえ世界だな。おい、リシア。こんな国にするなよ」

リシア

「おい！失礼だろ、ジーク」

カイル

「そう言えばリアン。お前は王政を否定していたが、お前の国ではどんな政治をしてるんだ？」

コレット

「それは興味ありますね」

リアン

「えっと…選挙って言って、国民の中から代表者を多数決で決めるんだ。その代表者が51人と76人。その代表者の中の更に代表が国のトップかな」

エリス

「では貴方の国ではジークなんかも代表者になれるの？」

リアン

「そうだね、ジークなら間違いなくなってたね」

エリス

「…恐ろしい国ね…」

ジーク

「おい」

リアンは笑いながら答える。

リアン

「でもエリスの言うとおりかな。ジークじゃなくても、何も考えていない人間も代表になっちゃうから」

ラヴィリア

「しかし多数決なら政治に明るい方しか代表にならないのではないですか？」

リシア

「確かに。有望な人間を集めることができる素晴らしい機能だと思うが？」

リアン

「最初はみんなそう思ってるし、理論的には最適。でも投票する側が無関心なんだよ。もう政治家なんて誰でもいい。どうせ国は変わらない。そんな諦めムードで実質、システムというよりは呪いになってるね」

ラヴィ

「国の代表者を決めるのが無関心…？」

エリス

「ジークがマシなんて…本当に恐ろしい国ね」

リアン

「うん、そうだよ。政治も人間もみんな無気力。最初は王政の独裁と聞いてこの国を内心卑下してた」

フィオネ

「おい、リシア様の前で…」

リシアはフィオネを制し、リアンに目で言葉の続きを促す。それに

笑顔でリアンは応じる。

リアン

「今は違つよ。例え独裁でも優れたトップなら悪くない。大切なのは政治システムじゃなくて、こう…測れないところにあるんだなっと思った」

カイル

「測れないなら終わりじゃないか？」

リアン

「そうだね。尚更人間はこの先大丈夫かっと思った。でも先のこと考えるのは疲れちゃった」

苦笑いをし、近くのワインを飲む。リアンは火酒ではなく、最も弱いアルコールを好んだ。

ジーク

「おいおい。政治なんて湿っぱい話すんなよ」

リアン

「そうだね、ごめん」

ジーク

「今回の主役は嬢ちゃんだ。嬢ちゃん、一言よろしく！」

ティア

「えっ？一言って…何を言えがいいんですか？」

エリス

「貴方の考えてることを言えがいいのよ」

カイル

「そうだ。ここにいる人間なら話していい」

ティア

「はい…そうですね…」

ティアは必死に考えている様子を見せる。しかしその姿は幼さも感じさせ、気持ちを和ませる。

ティア

「今回は私のせいで大変なことになってすみません。けど皆さんにご迷惑はおかけしない様に頑張るつもりです」

カイル

「頑張ることもないだろ？後は神の気まぐれ次第だ」

ティア

「う…：そうかもしれないですけど。でも頑張っていい方向に進むように説得します」

エリス

「説得なんて生意気なこととしてお仕置きされるんでしょ」

カイル

「ティアは大人しくしてればいい」

ティア

「でも…」

ジーク

「まあ、なるようになるだろ。あんまり気負うな。全部カイルに押し付ければいいんだよ」

リアン

「そうだね。あとはカイルがなんとかしてくれるよ」

カイル

「なんとかと言われてもな…」

コレット

「大丈夫です。私もラヴィもずっと祈ってますよ」

ティア

「それは心強いです」

ジーク

「まあ、明日の事は明日考えろ。とにかく飲め」

フィオネ

「私はそろそろ遠慮しておこう。明日もティアの護衛がある。酒に飲まれる訳にはいかない」

ラヴィリア

「そうですね。あまり飲むとお祈りに集中出来なくなりますから」

ジークの気持ちと裏腹に、女性陣は御開きの方向へ向かう。しかしそれを許すジークでは無い。

ジーク

「カイル。酒に酔った女はいいよな」

カイル

「はあ？」

エリス

「…単純」

ジーク

「いや！女は頬を赤らめた時が一番可愛い。そうだろ？リアン」

リアン

「そうだね。照れてることかってドキツとするよね」

ジーク

「酒と言えど、飲むと赤みを増し、魅力的になる。ほんのり酔った女って可愛いよな、カイル」

カイル

「まあ…そうだな」

ジーク

「酒は力をくれる！いつもは言えないことも思い切った気持ちになる！男はそれに弱い」

演技くさい顔で演説をする。しかし女性陣はまんざらでもないようだ。

ジーク

「まあ、もうちょっと飲んでけ。残すのは神の罰が当たる！」

最後の一言が決めてだった。敬虔な信者もつい酒に手を伸ばす。皆最初は渋々、そして次第にまたペースが上がっていった。それを見てニヤニヤと笑う。

やがて酒の弱いものから眠りにつく。こうなると最後には男ばかりが残ることになる。

ジーク

「男だけかよ。まあ、いい」

カイル

「お前がしたんだろ」

ジーク

「ああ、そうだ。ちょっとだけ真面目な話、いいか？」

カイル

「なんだ？」

ジーク

「今日の夕刻、外殻大地から周囲の見張りを担当していた2人が消えた」

カイル

「失踪か？」

ジーク

「その可能性はなくは無いが…」

カイル

「この大地に生物でもいるってことか？またリアンみたいな人間かもな」

リアン

「そうだね…予定の期日は過ぎてもうすぐで僕は死人扱いだから。でも、政府がそんなに早く動くかなあ」

ジーク

「まあ、逃げたした線も十分あるしな。一応耳にいれただけだよ」

カイル

「あまり気にしても仕方が無い。警備は強化するんだろ？」

ジーク

「ああ。大地側に4人は置いておく。都市側にも2、3人。大丈夫だろ」

三人とも何処か感じていた。このジークの報告から不吉な何かを。今は何も出来ない。それだけが確かだということだ

第三十四章 捨身

第三十四章 捨身

ティア

「では行ってきます」

コレット

「御子様のご無事をお祈りしてますね」

カイル

「リアン。ここを頼む」

リアン

「ん。大丈夫だよ」

簡単な挨拶を済ませて城の屋上へ。リシア、ジークはそれぞれ城やリリウムに戻っているが、それ以外は皆、治癒院に集まっていた。リアンもフィオネも治癒院の護衛として来ていた。ティアがいない状況でも、それを知らないものが治癒院を狙う可能性はある。

城の目の前まで歩いて来たが、浮浪者は見当たらなかった。牢獄はともかく、下層までは以前の生活水準まで取り戻したようだ。これもリシアの政策のおかげだろう。

最近では外殻大地に人々を案内し、農作などを行っていると聞いた。特に家畜の飼育は力を入れている。また、東の森の食料も定期的に採取し、それが上手く牢獄まで流通している。この都市一つと

して見れば、輝かしい未来への前進とを感じる。しかしここに他国が加わるとこの秩序も崩壊しかねない。

城に入るとリシアが待っていた。リシアは何も言わず、力強く頷く。リシアに先導され、城の屋上へ向かう。

リシア

「いよいよだな」

カイム

「ああ」

リシア

「ティアよ、無理はしないでくれ」

ティア

「はい。この国が苦しむようなことは絶対に避けます」

リシア

「私はティアの心配をしたんだがな」

ティア

「あつ…ありがとうございます」

カイム

「いくぞ」

そう言つてカイムは屋上の扉に手を掛け、力を入れる。開けたそこは暗闇が広がるだけだった。ティアの話では白い世界のようなからまだ神は来ていないということか。

カイム

「リシアは戻ってくれ」

リシア

「…ああ…分かった」

その言葉を聞き届け、扉を締める。

カイル

「とりあえずは遅れていないようだな」

ティア

「神様相手に遅刻したら罰が当たります」

カイル

「罰を受けに来てるんだがな」

すると突然白い世界に包まれる。今まで見えていた城下も消え、視界に映るのは自分の身体とティアだった。これがティアから聞いていた神の領域。清楚と言い表せる綺麗な白だが、募るのは不安ばかりだ。そして目の前が光る。これが神らしい。

???

「来たか」

カイル

「呼ばれていないが、この場に居させてもらう」

???

「構わない」

ティア

「お願いします。この世界と…羽化病を治してください!」
???

「答えは変わらぬか」

ティア

「お願いします…」

???

「大切な者を頭に浮かべろ」

突然の神の言葉に動揺する。何を言っているんだ?もう罰が始まっているのか?

???

「2人の共通した大切な者は10人。その中の1人の命を差し出せ」
カーム

「ふざけるな。そんな事…」

ティア

「出来ません!」

???

「答えよ」

カームはティアに罰を与えるものだと思っていた。だからいざとなれば身代わりにもなれると。しかし神のやり方は、ここにいない大切な者を奪い、苦しめることだった。神の言う10人が誰だか直ぐには浮かばない。しかしその中から名前を出すことは簡単だ。選ばずに名前を出すだけなら…

???

「さあ、答えよ。その命と引き換えに今回の罰を終えよう」

ティア

「カイクさん！」

ティアは真っ直ぐに見る。ティアは答えを出していた。その答えが分かった。ティアの出した答えは自分の気持ちと相違ない。ルキウスの『選択することが生きることだ』という言葉思い出していた。

~~~~~

~~~~~

カイクとティアが治療院を離れ、3時間が経とうとした時、その音は突然聞こえた。その音が聞いたことがあるフィオネとコレット、リアンは顔を引きつらせる。ラヴィリアとエリスにも不安の色が見える。それは爆発音だった。かなり遠くだが、確かに聞こえた轟音の子供。

フィオネ

「リアン殿！これは…」

リアン

「この国に火薬を使う技術は無いはずだね…だとすると外の人間だ」

エリス

「何？これ」

コレット

「これはリアンさんが持っていた手榴弾と言うものだと思います」

エリス

「だからそれはなに？」

フィオネ

「一瞬で大地を抉るほどの威力を持つ兵器だ」

ラヴィリア

「大地を抉るほどの…」

リアン

「手榴弾以外にもあり得る。けど危険物って事は確かだと思っ」

コレットは真っ直ぐ扉に向かって歩き、出ようとする。

ラヴィリア

「コレット！貴方、まさか…」

コレット

「この国の危機です。知っている私たちが動かなければどうなるのです！」

エリス

「反対する人は居ないわね」

ラヴィリア

「そうですね。私たちが動かなければなりませんね」

リアン

「僕も行くよ。僕の国なら説得出来るかもしれないし」

コレット

「助かります。争いは出来る限り避けたいです」

フィオネ

「行こう」

フィオネは剣を、リアンは銃を持つ。そして5人は直ぐに治癒院を出た。

音の方角は牢獄。外殻大地の人間が、今し方侵入したところだろう。

コレット

「ラヴィー！貴方はカームさんのところへ！」

エリス

「そうね。とりあえず状況は知らせた方がいいわね」

ラヴィリア

「はい！しかし神との謁見中に私なんかが行つては失礼ではないですか」

コレット

「祈りなさい。貴方も信者でしょう」

ラヴィリア

「…分かりました。では私は城へ向かいます」

そして城と牢獄の分かれ道に差し掛かり、ラヴィリアが他の4人と離れようとした時、馬の鳴き声が聞こえた。5人は少しの間足を止め、様子を見ていたが直ぐにわかった。

リシア

「轟音が聞こえたと報告があつたが…リアン、外殻の人間か？」

リアン

「王様がそう聞くならばば確實」

フィオネ

「リシア様！危険です。お城へお戻り下さい」

リシア

「私は相手の武器を知っている数少ない人間だ。戦力にならずとも見知らぬ振りは出来ぬ！」

フィオネ

「しかし…」

リシア

「心配するな。リアンからの贈答品を持って来た。自分の身は自分で守れる」

パンツ！パンツ！パンツ！

牢獄からまた不吉な音が聞こえた。

エリス

「この音は？」

リアン

「これは銃。防音をしていないだけで、僕と同じだ」

フィオネ

「敵意はあるようだな」

コレット

「急ぎましょう。ラヴィー！カイルさんのところへ。頼みましたよ」

ラヴィリアは頷くと、今までリシアが通って来た道を走って行った。その後ろ姿を認め、5人は牢獄への階段、関所に向かう。

広場に抜け、そのまま音の方へ…リリウムの方角へ向かった。もう外殻の人間がどの道を使って侵入したか、全員想像出来ていた。その方角から人が4、5人、逃げるように走っていく。

更に先には10人近い男が壁に隠れるように警戒している。その中にジークの姿も認められた。

リシア

「ジーク！」

ジーク

「なんで国王が来てるんだよ！」

リシア

「そんな話は後だ！それより…」

ジーク

「銃を持つてる。近づけない」

少し離れた所から声が聞こえる。声の主を確認する為、5人も壁に潜見ながら相手を確認する。

威勢のいい男

「おいおい！これだけ野郎が揃って何びびってんだよ。情けねえ国だなあ、おい」

相手は2人。たった2人。しかし銃と言う武器を持つだけで、組織の人間が動けなくなるほどの力を持つてる。

貫禄のある男

「早く天使とやらを出せ」

威勢のいい男

「また爆破させちまうか？」

男たちはリアンと違い、チンピラ又は組織の人間と言う印象を受ける。どちらにしても外殻の人間で間違い無いようだ。

ジーク

「彼奴らの要求は天使だ。恐らく先日行方不明になった見張りを捕まえて聞き出したんだろう」

リシア

「相手はあの2人か？」

ジーク

「今のところはな。まだ居るかもしれない」

リシア

「なら作戦がある。協力してくれ」

ジーク

「聞こう」

威勢のいい男

「何をちんたらしてんだよ。本当に町爆破すつぞ?」

貫禄のある男

「よせ。手榴弾は最終手段だ。とりあえずこの国の城に行つて見るか」

威勢のいい男

「じゃあこいつら皆殺しだな。死にたくない奴は帰つて震えてな」

腐食金鎖の男

「ボス!もう我慢ならねえ。このままだとこいつらに好き放題されちまう」

オズ

「黙れ!ボスの言う事を聞け!」

腐食金鎖の男

「いくらボスやオズさんの言葉でも俺たちの国や組織をぶっ壊そうとしてる奴はほっとねえ!!」

ジーク

「おい!待て!」

ジークの言葉も聞かず、その男は正面から威勢のいい男へ向かつて行つた。その時、直ぐ側の人間も同時に風のように駆け出した。フイオネだった。

腐食金鎖の男と距離を離れたまま並んで走る。威勢のいい男は銃口の向きを定める事が出来ずに迷う。その状況下で判断したのは近寄る男へ発砲する事だった。

爆発音と共に男が叫び声をあげる

それに怯むことなく、フィオネはそのまま威勢のいい男に突進する。男がフィオネに銃口を向けようとした時にはもう遅く、フィオネの剣が相手の身体を裂いていた。そして2つ目の叫び声が轟く。

その一撃は生死は不明だが、戦力としては削ぎ落とすことを成功させた。だか2つ目の銃口を、貫禄のある男がフィオネに向ける。フィオネは怯むことなく、その銃口へ向かって行った。

貫禄のある男

「この野郎……」

パンツ

音の直後、フィオネは倒れ込む。

フィオネ

「くっ……」

それでも立ち向かおうとするフィオネに、男は更に銃口を向けて発砲の構えを取る。

貫禄のある男

「ぐっ…クソ」

男の顔面に石が直撃する。それはエリスの放ったものだった。男が怯んだ隙にリアンはフィオネの元に駆け寄り、フィオネを担いで壁の陰へ走る。男は額から血を流しながらも、リアン達に発砲する。それは当たることなく、リアンとフィオネは無事に陰まで隠れることが出来た。

貫禄のある男

「おい、誰だ！石を投げた奴。それとさっきの女を出せ」

男は辛うじて冷静を保ちながら威圧する。

エリス

「貴方何やってるの？銃の恐ろしさは貴方の方が知っているんですよ！」

エリスは血を流し倒れるフィオネに厳しく批判する。

フィオネ

「はあ、はあ…あの武器には…捨て身で無ければ勝てない」
リアン

「それより傷は!？」

フィオネの腹部から赤く染まっている。エリスは直ぐに服を破り、出血状態を確認する。

エリス

「恐らく臓器は傷つけてはいないわ。ただ出血が酷い」
フィオネ

「まだ…戦える…」

エリス

「馬鹿なこと言わないで。痛みで意識が朦朧としてるはずよ」
リアン

「エリス、フィオネを頼む」

そう言つてリアンは再び吠える男の方へ行つた。その後を追おうとフィオネも立ち上がろうとするが、鋭い痛みで力が抜けてしまう。

エリス

「動かないで。救急道具は一式もつてきてあるから直ぐ止血できるわ」

フィオネ

「エリス殿…頼みがある…」

第三十五章

不協和音

第三十五章

不協和音

威勢のいい男は動かなくなっていた。生きているか定かではないが、意識がないと言うことは非常に大きい。何故ならこの外殻大地の間は、指一つ動かすだけで人を殺せるのだから。

残った貫禄のある男は落ち着きを取り戻していた。額から流れた血を拭い、隙を見せることなく銃口を向けて威嚇する。倒れている男のように銃を乱射していれば隙も出来るが、この男はそんなことはない。

暗闇の中、狙撃するには厳しい。それはリアンにとっても敵にとっても同じだった。ある程度フィオネのように間合いに入らなければ当たらない。

貫禄のある男

「大人しく道を開けるか天使を連れてこい」

リアン

「お前は何者だ」

貫禄のある男

「銃もない国に名乗っても分かるまい。道を開けないなら、先ほどの爆破で皆殺す」

少し離れた所には手榴弾を使った後があり、その周辺には2人ほど転がっている。見せしめだろう。だが1人になったこの男は、状況から手榴弾を使ってもおかしくはない。

コレット

「私が聖女イレヌ、天使です」

突然、コレットが前に進み出た。暗闇の中、銃口を彷徨わせていた男はピタリとコレットへ向けた。

貫禄のある男

「お前が天使だと？証拠は？」

コレット

「証拠なんてありません。信心のない貴方には分かりません」

貫禄のある男

「ふざけやがって…」

コレット

「貴方の目的はなんですか？私に何の用ですか？」

威勢のいい男

「先ずはお前が天使である事をはっきりさせる」

男が銃口を向けたまま、コレットに2歩近づく。しかし、男は何かが近づく気配を察知し、それ以上は近づかなかった。

リシア

「動くな」

男に近づいた者はリシアだった。しっかりと銃を男に向けて構えていた。

リシア

「少しでも動いたら撃つ」

貫禄のある男

「まさかこの国に銃があるとはな…」

リシアは男に、男はコレットにそれぞれ銃を向けていた。三竦みの緊張状態は他の者も動けなくしていた。

貫禄のある男

「お前は本当に天使なのか？」

コレット

「自分で見極めなさい」

貫禄のある男

「おい、あんまり調子にのると…」

リシア

「お前も無駄な抵抗は辞めろ。大人しく降伏しろ」

貫禄のある男

「お前か？この都市の人間で無い者は？」

リアンは陰から男を狙っていた。しかし暗闇により狙いが定まら

ない。コレットやリシアに当たることだけは避けなくてはならない。狙いを定めるだけで時間が流れて行く。やはり近づかなければならない。射程圏内に入るにはどうしても男に気づかれてしまう。フィオネのような捨て身も一つの策だが、この状況下では刺激してコレットを射つ可能性もある。

もっとも危険なのは相手にリシアが銃の扱いに慣れていないと言う事が知られる事である。直ぐにコレットは人質になり、リシアは殺される。その最悪の想定には時間が経つほど近づいて行く。機会を待つか…いや、待っても機会は来るのだろうか。

ぎゃああああ…

バンッバンッ

悲鳴、そして数秒後に銃声。スポットライトを浴びている三人から発されたものでは無かった。皆、突然の絶叫と凶器の咆哮で固まる。それは貫禄のある男も例外ではなかった。

リアンは他の者よりも僅かに早く我に帰る事が出来た。そして次の動作に移る事ができた。それはフィオネに見た捨て身の覚悟、それと機会を伺っていた2つの状況から生まれた行動だった。保身に走っているのは、この状況の分からない中で動く事は出来なかっただろう。

陰から真っ直ぐ貫禄のある男へ走る。貫禄のある男がこちらに気

づく瞬間とリアンの銃を構える時は同じだった。男も銃口をリアンに向けようとしたが、その時は既にリアンは狙いを定めていた。

パシュパシュ

もつとも的の大きい胸に向かって発砲する。リアンの二発の銃弾は全て男の胸に収まり、男から絶叫があがる。男は明後日の方角へ一発銃弾をはなつが、それは全く意味もなさずに音と共に消えた。

コレット

「リアンさん！」

リアン

「上手くいったみたいだね…それよりさっきの叫び声と銃声は？」

リシア

「あちらからしたようだが…」

リアンがリシアの方を振り返ると、リシアの先に影が見えた。そこに銃の存在を認めると、リシアの身体を引っ張り、影から少しでも離れた。その瞬間だった。

バンッ

その銃声から生まれた弾丸はリアンの身体を貫いた。リアンは銃を落とし、身体を丸めて倒れ込んだ。

第三十六章

戦略

第三十六章

戦略

突然現れた茶髪の男は、直ぐにコレット、リシア、リアンの3人に向かつて走って来た。慣れた手付きでコレットの身体を抑えると、リアンとリシアが持っていた銃を回収した。そして人質としてコレットを確保し、茶髪の男は貫禄のある男の身体を蹴った。

茶髪の男

「けっ！死んでやがる」

男の生死を確認すると、コレットを無理矢理引きずりながら壁に背を向けられる位置へ移動する。

茶髪の男

「ずいぶんふざけた事をしやがるな。そこにもいるんだろ！出てこい！」

突然、何も無い所に向かつて叫んだと思うと、そこから血塗れのジークが出て来た。

ジーク

「てめえ…殺したのか？」

茶髪の男

「そこに転がってる男は知らねえ。俺を襲ってきた奴は確実に仕留めた。てめえこそ仲間、殺したか？」

ジーク

「…」

全てはリシアの計画だった。リシアはこの場の状況を把握すると直ぐにジークに敵の人数を炙り出す作戦を提案した。敵の数が2人とは考えにくい。陰に潜んで伺って居る者がいてもおかしくはない。そうリシアは判断した。

リシアは自ら囿になり、目の前の男と銃を向け合うように仕向ける。互いに銃を向ける緊張状態。そうなれば当然身を潜めて居る敵の仲間にも動かざるを得ない。その動きをジークと少数の部下が発見し、抑えると言ったものだ。

コレットが囿になった事はリシアの想定外だったが、三竦みと言う形で緊張状態を形成出来た。そして案の定、敵の仲間もリシアを射程距離にいれようと近づき、銃を向けようとした。

その瞬間を狙ってジークが炙り出した敵を殺した。勿論、リシアの作戦の中には殺害と言うものは入っていなかったが。

作戦としては成功し、隠れていた2人を発見する事が出来た。1人はジークがマークし、もう1人はジークの部下が発見していた。しかしジークは大きなミスを犯してしまった。それが敵の悲鳴だった。敵に悲鳴をあげられれば、同様に潜んで伺っている部下やリシアにも危険が及んでしまう。ジークもそれは理解し、後ろからじつくりと忍びよっていた。声を出されないよう、相手の口を塞ぎ、確実に胸にナイフを差し込む。組織の頭になる前には当たり前のようにやっていた暗殺だった。しかし敵に近づく最中、足元の瓦礫を蹴つて音を立ててしまった。敵に見つかったジークは最早直ぐに敵を殺すしか道は無かった。後は部下が上手く仕留めること、リシア・コレットが助かる事を祈るだけとなった。

結果、リシアは無事になったものの、部下は殺されコレットは人質にされてしまった。更には2人を助けに入ったリアンまで撃たれてしまった。

たった一つの小さなミスだった。リシアの作戦通りに行けば貫禄のある男は孤立無援になり、背後から仕留める事もできた。最善の状況になるはずが、最悪の状況になっていった。

茶髪の男

「これだけ状況で顔を出さないと言う事は殺したか…まあ、いい。まずは女とその男以外、全員散れ！」

ジーク

「彼女は巫女だ。天使じゃない。離せ」

茶髪の男

「お前がこの組織の頭か？さっさと部下を下げろ！！全員ブツ殺すぞ！」

ジーク

「確かに俺が頭だ。俺だけ残ればいいだろ」

茶髪の男

「またこれを使われたいのか？」

茶髪の男はちらりと丸みの物体を見せつける。さつきジークの部下を2人殺したものだ。2人で済んだのは良かった方だった。今、腐蝕金鎖の構成員の中に放り込まれれば殆どが死ぬだろう。相手は1人。多勢に無勢。ならば少しでも命残せる選択をしなければならぬ。

ジーク

「分かった。部下を下げる。代わりに俺を人質にしろ」

茶髪の男

「何交換条件だしてんだ？立場分かっているのか？」

ジーク

「さつきも言ったが、彼女は巫女だ。この国では聖女として天使と話せる貴重な人間だ。お前みたいな穢れた手で触ると罰を受けることになる」

茶髪の男

「ふざけやがって。なら見せしめに1人殺してやる」

ジーク

「やめておけ。銃の話は聞いている。そういう小型じゃ連続で5 / 6発しか撃てないんだろ？俺の分入れても2発。もったいない」

茶髪の男

「煩い！1人殺す！」

ジーク

「落ち着け。部下は下げさせる。ちょっと待ってる」

ジークは銃を持つ敵に背を向ける。ジークには撃たれないという確信があつてのわざとの行為である。その場で声を張り上げる。

ジーク

「お前ら！ここは俺に任せておけ。構成員の半分は民間人の護衛、半分は城を守れ！絶対に命を落とすな！オズ！後は頼んだ」

構成員の中からは命令に抵抗しようとする者も多く見られたが、直ぐにオズが黙らせた。2、3、オズはドスの効いた声をあげ、直ぐに部下に指示を出す。そして黙ってジークに向かい、頭を深く下げて場から退場する。

そして残る者はジーク、コレット、リシア、エリス、傷つき倒れたフィオネとリアン、そして茶髪の男だけとなった。

第三十七章

意志

第三十七章

意志

まだ陽は登っていない。しかし数時間で直ぐに陽射しが届く。そうなれば銃の驚異は更に高くなる。その前にこの侵入者を片付けなければならぬ。時間はある。だが、焦りも生まれる。そんな緊張状態のはずだった。

しかし、それらを全て知った上でもジークは落ち着いていた。自分の呼吸に乱れはない。それと反比例し、茶髪の男に苛立ちを募らせる。

ジーク

「しかし、いきなり攻め入るとは随分単純だな」

茶髪の男

「こんな低水準の文化国相手なら銃で充分だ！」

ジーク

「充分？切羽詰まってるように見えるが？」

茶髪の男

「お前こそ状況が分かってないようだな。こっちは一分もかからず全員殺せんぞぞ？」

ジーク

「殺してどうなる？ たった1人で命保つと思うか？ めでたい奴だ」

茶髪の男

「まずはお前を黙らそうか」

銃をコレットのこめかみから引き離し、真っ直ぐジークに向けた。

リシア

「やめろ！ 私はこの国の王だ！ これ以上、民に手を出すな」

茶髪の男

「王？ 笑わせるな。 ガキの王様がこんなところにいるかよ」

リシア

「本当だ！ 証拠なら後で見せる。 今は引いてくれないか？ 国として話し合いの場を設ける。 だからこれ以上は…」

ジーク

「黙れ！ リシア！ こっちは部下を、お前の民が殺されてるんだぞ？ このまま帰らせるか」

リシア

「これ以上、犠牲者は出してはならない！」

茶髪の男

「…少なくとも組織のボスと対等に話せる器らしいな。 こっちの条件を飲めば考えなくはない」

リシア

「条件とはなんだ？」

ジーク

「聞く耳を持つな。 この状況で平和主義は一番馬鹿をみる」

茶髪の男

「平和、結構じゃねえか。 今から3時間後、天使とお前が王である証拠を持って来い。 続きはそれからだ」

リシア

「…分かった。まず人質を開放しろ」

ジーク

「するはずがないだろ」

茶髪の男

「そういうことだ。この自称、天使は預かる」

コレット

「私の命は構いません。しかし天使様をこんな不浄な人間に近づけてはなりません」

茶髪の男

「あまり苛立たせるな！」

不意に影が動く。暗がりの中からふらふらと茶髪の男へ近いたと思ったら、また誰もいない方向へ歩いて行く。エリスだった。

茶髪の男

「おい、女！何勝手に動いてる！」

男に向かう訳でもなく、ジーク達に歩み寄る訳でもない。ただ歩いている。そして場の空気に削ぐわなない雰囲気で、エリスは男を見る。

エリス

「私の命だもん。私の勝手でしょ」

茶髪の男

「勝手だ？死にてえのか？」

エリス

「別に」

リシア

「エリス！動くな」

エリス

「嫌よ。私は自由なの。カイクにそう教えられたわ」

茶髪の男

「イかれてるだけか。消えろ」

エリス

「嫌」

コレット

「エリスさん！逃げてください！」

エリス

「リアンが言ってたわ。この国の魅力。それは全力で生きてるからだ。だから命をかけても私は勝手にするわ」

茶髪の男

「このクソ女…」

怒りで無意識に銃をエリスに向ける。エリスはそれでも微笑んだままで、恐怖に色褪せ無い。

その動きを見計らってたか。ジークは懷から銃を取り出す。殺した相手から奪ったものだった。コレットに当たらないよう、ジークは茶髪の男に近づき、発砲の構えをとった。

しかし男の動きの方が早かった。向けた銃口を直ぐにエリスからジークへ変え、迷わずに発砲した。そしてその凶弾はジークの腹部に入り込む。ジークは凶弾の反動を受けながらも、発砲する。その銃

弾は茶髪の男のやや上へ逸れた。

茶髪の男としては一番厄介な存在が崩れる瞬間だった。そしてそれは安堵へと繋がる。同時にジークの銃弾は逸れたとはいえ、男に恐怖させるには充分だった。恐怖と安堵、それが混ぜ合わさった感情は次の対応を確実に遅らせた。

エリス、ジークとは別の角度からフィオネが向かって来ていた。足下はふらつき、いつもの凜とした剣術とは程遠い。その勢いのまま、倒れ込むように茶髪の男に剣を突き立てた。男は声をあげる余裕もなく、血飛沫をあげる。男表情には更に苦痛が混じる。フィオネはそのまま男と共に、倒れ込んでしまった。

コレット

「フィオネさん！」

返り血で染まった聖女は、形振り構わずフィオネを抱き抱え、少しでも男から離れようと引つ張る。鮮血の2人が疚しい男から距離をとる。

エリスの陽動、ジークの銃弾、そしてフィオネの決死の行動の全てがあつての勝利だった。

穢れた血に染まる2人にエリスが駆け寄ってくる。

エリス

「フィオネ、意識ある？」

フィオネ

「はぁ…だ、大丈夫だ」

エリス

「痛み止めは治療じゃないの。これ以上、出血したら死ぬわ。コレット、この布でフィオネの傷口を抑えて」

そしてエリスはジークの元へ向かう。そしてジークの傷、呼吸などを診る。

リシア

「ジークは！」

エリスは首を振って言う。

エリス

「リシア、来て」

ジーク

「おい、まさか…」

驚きで蒼白になりながらもリシアはジークとエリスの下へ向かう。

エリス

「残念ながら死んで無いわ。今のところ気を失ってるだけ。出血は酷いから貴方が抑えてて」

そう言つて消毒液で濡れた綺麗な布をリシアに押し付け、最後の患者リアンの下へ向かう。ジークと同じようにリアンの傷、呼吸を確認する。そして無言のまま、救急道具から様々のものを取り出し、治療にあたる。

リシア

「エリス…リアンは…」

エリスは何も答えない。ただ機械的に素早く医療道具を操る。

不意に茶髪の男が声を搾り出す。

茶髪の男

「ど…し…こない」

途切れ途切れの言霊を発する男から守るようにコレットはフィオネを強く抱く。しかしそれ以後、男が動く事はなかった。

フィオネ

「今、なんて…」

コレット

「分かりません…こない？」

ここに居るものがこの言葉を理解するのは先のことだった。離れに動く影の存在に気づくのも…

第三十八章 二つの罰

第三十八章 二つの罰

どの位の時間が経ったのだろうか。カイルとティア、そして神らしき存在は沈黙のままずっと対峙していた。もつとも神の姿は光によってほとんど見えないが。

これも一つの地獄だろう。ずっと『白』が続く無限地獄。時間感覚もなくなり、果てが見えない。コレットが以前やっていた不断の祈りもこれと同じようなものだったんだろう。時間は比較にならないが。

突然、神らしき存在が口を開く。

???

「お前達の答えは受け取った。ならば私も相応の答えを返そう」

無音によって神経がやられていた耳に重く、響くように言い放つ。

???

「…人間如きの祈りが聞こえるとは。この人間に免じて答えをだそう」

そして神らしき存在は重々しく答えを言い放った。

~~~~~  
~~~~~

ラヴィリアはずっと城の屋上の扉の前で祈りを捧げていた。最初は屋上の扉を開けようと思ったが、開けてはいけない『確信』があった。同時に人智を超える存在、恐らく神と言われるものがこの先にいると分かった。その状況でラヴィリアがとった行動は祈りだった。心を無に、しかし確かに神へ想いを祈った。様々なものが過ったが、多くは感謝だった。

カームやコレット、御子達との出会いを感謝し、この都市を無事に降ろしてくださったことに感謝し、今日の食事にも感謝した。感謝するものは限りがなく多く、心は無になりながらも、その感謝に抗うことはせずに、自然の自分のまま祈り続けていた。

そして神々しい気配が消えたと感じると、直ぐに扉が開いた。

そこには数時間前に別れたカイルとティアが、変わらない姿で居た。ラヴィリアは喜びで思わずカイルの手を握る。

ラヴィリア

「ご無事だったんですね！良かった…」

カイル

「ラ、ラヴィ！どうしてここに？」

ティア

「あの長い時間、ずっと待っていてくれたんですか！？」

ラヴィリア

「いえ、私は30分ほど前から祈りを捧げていただけです」

ティア

「30分ですか？何年も経ってる気がするんですが…」

カイル

「よくは分からないが、神となると時間の流れも違うんだろう。それよりラヴィ、手を…」

ラヴィリア

「あっ！！す、すみません」

ラヴィリアは直ぐに赤くなって手を引っ込める。

ティア

「でもラヴィさんはどうしてここにいるんですか？」

ラヴィリア

「あっ！申し遅れました。今都市に、恐らく外の人間と思われる方が侵入しているようです！」

カイル

「外と言うと、リアンと同じ外殻大地の人間か？」

ラヴィ

「リアン様自身がそう、仰っていました」
ティア

「カイルさん、どうしましょう…私には…」

カイル

「心配ない。なんとかする。それよりみんな無事なのか？」

ラヴィリア

「私は直ぐにカイル様にお伝えしようと参りましたので状況は分かりません。しかし皆さん轟音のする方へ向かわれました」

カイル

「轟音…敵意はあるのか？」

ラヴィリア

「恐らくですが…」

ティア

「カイルさん、私達も行きましょう！」

ラヴィリア

「御子様は駄目です。危険です」

カイル

「確かに今のティアでは足で纏いだな」

ティア

「ですが…」

カイル

「行くか？」

ティア

「はい！」

ラヴィリア

「では、私も一緒にさせて頂けませんか？御子様は必ずお護りします！お願いです！」

カイル

「分かった。ただティアはもう御子じゃない。ラヴィも自身をしっかり守れ。いいな？」

ラヴィリア

「御子様ではないとは…はい。分かりました」
カイル

「場所は分かるか？」

ラヴィリア

「音が牢獄の方からした事しか分かっていません」

カイル

「よし、とりあえず関所へ行こう。ティア、動けるか？」

ティア

「私は大丈夫です。カイルさんこそ大丈夫ですか？ずっと身体動かしていなかったの…」

カイル

「もう慣れた。問題ない。いくぞ」

ティアとラヴィリアは『はい！』と返事をしてカイルの後ろをついてくる。

神はカイルとティアに2つの罰を与えていた。1つは無限の白の世界である。

数年にも感じる時間をカイルとティアは感じていた。空腹感はないが、視覚、嗅覚、触覚といった感覚全てを失ったような状況に何年も身を置かれたのだ。人は感覚を失った状況では数日で狂う。カイルもティアも本来ならば、発狂して訳も分からずに自分を見失う所であった。しかしそうならなかったのは神の問いかけに対する答えがはつきりと出ていたからである。

神の問いは『大切な存在を捧げる』と言うことだった。カイクとティアには直ぐにお互いの存在、エリス、フィオネ、リシア、ラヴィ、コレット、ジーク等頭に浮かんだ。勿論それ以外にもリアンやオズ、リリウム3人娘やメルトも浮かんだ。その中の1人の名前を出せば少なくともこの無限地獄からは直ぐに抜け出せたのだろう。

だが2人が出した答えは沈黙だった。優劣つける事はかなわず、例え会って間もないリアンの名前を出す事にも躊躇われた。躊躇う時点でそれは答えではないとカイクは気づいた。カイクが沈黙という答えに辿りついた時には、ティアは既にその答えに到達していた。2人は一切の言葉を交える事なく、その答え『沈黙』を時間という形で神に提示した。

その答えを神が受け取ったきつかけはラヴィリアの祈りだった。本来人間の声は神には届かない。例え命尽きる瞬間の祈りであつても。それは神にとって人間は飼っている虫と同様の存在価値しかないのだから。それが奇跡的に神に届いた。その祈りを機にカイクとティアの沈黙という答えを受け取り、判決を降した。

その判決が2つ目の罰である。もつともこの2つ目の罰はカイクとティアだけのものに留まるものではないが。今、この罰を受け止めているのは世界で、カイクとティアのみだった。

第三十九章 赤い花

第三十九章 赤い花

城内にはいつも通りの雰囲気か漂っていた。屋上から階を降りる時もほとんど人を見ていない。見回りの1人のとすれ違ったとき、状況を尋ねた。

カイル

「聞きたいんだが、今夜リシアから命令が出ていなかったか？」

顎の出た兵士

「はっ！確かに先ほどリシア様から兵士全員に勅命を受けました」

カイル

「どんな命だ？」

顎の出た兵士

「私のような城内見回り予定の者以外は全兵士市中の見回りになるよう、指示がありました。市民の安全を第一に行動せよ、とのことでした。リシア様も出ていかれましたが、カイルさんはご存知ないのですか？」

カイル

「いや、分かった」

簡単に話を打ち切って再び階下へ向かう。

ラヴィリア

「リシア様は外の世界からの侵入については皆さんにお話していな

いのでしょうか？」

カーム

「いきなり銃や外殻の人間について話しても混乱するだけだ。敢えて話さなかったのだろう」

ラヴィリア

「確かにリシア様にお会いした時はお一人でした。兵士の皆様全員を市中の見回りにしたのですね」

カーム

「リシアらしい」

ティア

「そうですね。いつも国民を第一に考えてくれますよね」

カーム

「だが城が落とされかねない。考えは甘いな」

ティア

「優しい国王様ならみんなついて行きますよ」

ラヴィリア

「私もリシア様の治世は好きです」

カームは何も答えない。今までのように一つの国のみの上での政治なら上手くいっただろう。

だがこれからは外政が加わる。『国民の為』という言葉の元、甘く優しい政治をしていれば外から喰われる。まさに今がその初めの外交だ。敵襲と言う名の外交。

自国の者に不平を言われるような事をして、それが結果国民の為になる事もある。例えば一般人の徴兵。家柄や希望者から兵士を集っては間に合わない。国が国である為に国民に戦わせる必要がある。もつともこういうやり方が人間の愚かさであって、神に憎まれた一因だろう。必然から生まれた結果。人が人である以上、避けられない。神に見捨てられて当然だ。

城の扉を開け、庭に出る。以前はヴァリアスが稽古をしていたが、今は誰もいない。涼しく心地よい風が吹いた。その風はまるで産まれたばかりのような新鮮さが伴っていた。過去と未来の区切り目を通り過ぎたのかもしれない。メルトやヴァリアスが居たのも随分昔のような気がした。

感傷に浸りながらもカイムは庭を急いで横切ろうとした。だが、城から庭を中央に差し掛かる前にその男はいた。草花の影からゆるりと無言で現れ、カイムに銃を突きつけていた。

カイム

「お前が外の人間か」

鋭い眼の男

「そうだ。この意味は分かるな」

ティア

「カイムさん、もうここに…皆さんは…」

カイム

「この国の人間に手をだしたのか」

鋭い眼の男

「兵士ではないな。貴族か？」

ラヴィリア

「コレットは…皆さんはどうしたのですか?!」

カイムはラヴィリアの前に手を出して制する。そして愛用のナイフを取り出す。その様子を見ても男は反応しない。

カイル

「今は答える気はないらしい。ティアとラヴィは下がってくれ。…吐かせる」

鋭い眼の男

「身分を聞いている。少なくともお前は貴族に見えないが？」

カイル

「ただの何でも屋だ」

鋭い眼の男

「そうか。ではその2人は？」

カイル

「ただの清楚な女だ」

男は表情を変えずに引鉄を引く。鋭い弾道はカイルの足元に伸び、地面から火花を散らして消えた。リアンも最初は見せしめとしてカイルを撃った。それはあくまで銃の脅威を効率的に伝える為、あくまで話し合いを前提とした威嚇だった。

この男は最初のカイルの反応で、カイルが銃の脅威を知っている事を知った。さらにカイルがナイフを出しても無反応であった。つまり話し合いを前提にした射撃ではない。足元を撃ったのは事実を聞き出してから殺す為。聞き出せなければ直ぐに殺して終いにするだろう。

鋭い眼の男

「天使を捜してる。知っているか？」

ラヴィリア

「カイク様！直ぐに城の兵士を…」

ラヴィリアも尋常ではない人間である事を感じ、直ぐに助けを呼ぼうと城へ引き返す。カイクが制止の言葉を叫ぶ前に轟音が響く。ラヴィリアは2歩程歩いた所で座りこんでしまった。

カイク

「ラヴィ！」

ティアは急いでラヴィリアの下へ駆け寄る。そしてカイクの方を向いて叫ぶ。

ティア

「大丈夫です！怪我はありません」

鋭い眼の男

「女は殺すつもりはない。男、意味は解るな？」

カイク

「事実を言う。ここに天使はいない。そしてそれを証明する術はない」

鋭い眼の男

「ほう…確かに。ではこの国の兵士が天使がいると吐いたことはどう説明する」

カイク

「この都市が降りた時はいた。だが今はいない。それが事実だ」

鋭い眼の男

「都合がいいな」

真っ直ぐカイクの胸に向かって銃を向ける。
直感で分かった。威嚇ではない。

鋭い眼の男

「お前は信用ならない。もっと頭の柔らかい奴に聞けさ」

殺される確信があった。カイムは男の言葉が終わる前に横の草花の中に身を投げようと走った。しかし眼の端にその動きをゆっくりと追跡する銃が見えた。

音が響く。

男は躊躇なく撃った。

カイムの抵抗も虚しく、一瞬血がパツと花の様に咲いた。

しかしその血はカイムのものではなかった。眼の前に腕を広げてたったティアのものだった。

カイムの眼の端に最後に映ったのは小柄な少女のピンクの頭だった。

カイム

「ティアーーーー！」

カイムは男のこと忘れ、血に濡れたティアの下へ駆け寄る。

カーム

「ティア…どうして…ティア！」

ティア

「こっやって…血塗れになってカームさんに…抱かれるのは…3回目ですね…」

カーム

「なにやってんだよ！お前はもう、天使じゃないんだ…傷も治らないんだよ！」

ティア

「そんなことは…関係…ない…です…これからは…」

カーム

「どうして…」

そしてティアは意識を失う。まだ命はあるものの、呼吸の弱々しさが時間がないことを告げる。胸に空いた傷からの出血は、時間と共に増える。もうあの天使の輝きは帯びる事はない。一刻も早く医者に見せなくてはならない。カームは自身が悲しみに埋めれる余裕が無いことは分かっていた。

第四十章 朝日

第四十章 朝日

カームは立ち上がり、相手よりも鋭い眼で睨みつける。あの、ティアを一度失った時。その時と同様若しくはそれ以上の焦りと危機感を感じていた。しかしあの時と違うのは、相手の冷酷さが伝わったのか、冷静さをなんとか保っていたことだった。

カーム

「お前……」

鋭い眼の男

「女は撃つつもりはなかった。お前と違い、人質として価値がある。もう1人いるからいいが」

鋭い眼の男はチラリとラヴィリアを見る。ラヴィリアは蒼白な顔をして固まっていた。男とカームの実際の距離はそう離れてはいない。しかしナイフの間合いとしては問題外だった。相手にカームを殺す躊躇はない。

鋭い眼の男

「予定がある。死んでくれ」

また先刻の銃を撃ち放った雰囲気醸し出す。男の表情に変化はない。しかし確かにカームはその空気を感じ取れていた。

だが男から『死』という言葉が出た瞬間、ラヴィリアは城の扉に走っていた。男は先ほどのような威嚇射撃をすることなく、舌打ちをしてラヴィリアの先へ回り込もうと走り出した。殺せない最後の人質の行動は、初めて男の想定を越えたものだった。

カームはその隙は逃さなかった。ナイフを手際良く納め、直ぐに懷にいれて持ち歩いていた火酒と発煙筒を取り出す。

カームはリアンに手榴弾について聞いていた。その時簡易的火炎瓶としてリアンが作ってくれたものがこの火酒だ。作りは非常に簡単で、持ち運べる大きさほどの割れやすい瓶にライターを取り付けただけである。勿論、アルコールが燃えることくらい、カームも知っていたが、ライターという簡易的に火を扱えるものがあつて始めて生まれたものだ。威嚇程度のものしかないが、火矢よりも素早く、何より携帯に便利だった。

カームは火酒の瓶に取り付けたライターに火をつけ、発煙筒の導線に点火する。火酒を男に投げつけ、直ぐに利き手に持ち替えて発煙筒を男の側に転がす。

火酒は見事男の背に当たり、瓶は割れる。破片が刺さり、男の服に火酒が染み込む。と、同時に直ぐにライターの火が男の服を燃やす。

鋭い眼の男は絞り出すような声をあげながら熱さで転がる。大した効果は期待していなかったが、男の背ということもあり、消火の為には地に背をつけるしかなかった。そしてそうこうしているうちに発煙筒の煙に包まれる。

ラヴィリアはその光景に驚き、足を止めてしまったが、カームは直ぐに動いた。ナイフを再度取り出しながらやや回り込むように男

に駆け寄る。男は直ぐに背中 of 火を消したが、その時には煙が近くを充滿していた。そして案の定、男は煙に視界を奪われながらもカムのいた所へ向かって銃を乱射した。

パンッ！
パンッ！
パンッ！
パンッ！

闇雲に放たれた銃弾は一発カムの左腕に当たった。痛みを感じる事も躊躇もなく、男へ走り寄る。大きく息を吸い込み、煙の中へ入る。

鋭い眼の男もナイフを構えていた。銃からナイフへの切り替え。明らかに戦闘経験がある行動だ。

ナイフとナイフ。剣以上に相手の攻撃を捌くのは難しい。その上、剣は捌け隙が出来るが、ナイフは直ぐに次の一閃を放てる。なので本来は、相手のナイフを避ける事が非常に重要になり、互いにぎりぎりの間合いでの攻防となる。

男のナイフの技術は優れていたが、そう言った基本の上に積み重ねたものだ。カムの勿論そうだった。だがティアを考えると時間をかけられなかった。左腕腕の怪我也有。

勝負は一瞬だった。

煙の中にカイムは入り込むと、そのまま間合いに深く入り、一閃を放つ。その一閃を男は捌き、代わりにカイムに一閃を返す。本来、この一閃は捌くものだった。しかしカイムはその一撃を敢えて身体で受け、相手の急所にナイフを突き立てた。

鋭い眼の男

「がはっあ」

男は声をあげる。そして這うようにして煙の中から逃げる。それをカイムは追う。カイムの受けた傷は即死にはなら無いものの、相当深手のものだった。

カイム

「…はあ…もう…神は…いない」

そう言つて再度這った男の背にナイフを突き立てる。男からまた悲鳴が聞こえ、直ぐに動かなくなった。そしてカイムもその場に倒れた。

ラヴィリア

「カイム様！」

ラヴィリアが駆け寄ってくる。そのラヴィリアに向かって最後の力

を振り絞って意識の隅から言葉を残す。

カイル

「俺より…ティア…を」

そして煙は霧散し、朝日が城の庭を照らした。この日、世界は変わった。煙の中から抜け出して

最終章

最終章

たかが人生。死がどのようなものか、それは生きている人には分からない。死が楽なものだと誰が決めた？ そんなもの、分かる筈がない。ただ分かるのは生きる苦しみ。生きる苦しみが分かるから死を安易に選ぶ。そう、たかが溢れる人間のつまらないシナリオの一つ。それが人生。たかが人生。

生きている時に感じる幸せと言うのはただのクスリだ。ごまかしであり、まやかし。生きる事に意味なんてない。

ただ人はそのクスリを与える他人を、かけがえのないものとして大切に守る。人は自分と言うものが如何に些末なものと分かっている。分かりながらも、この苦痛の生からひとときでも逃してくれる他人はその些末な自分という存在の全てになる。小さな人間という存在でも、それぞれの世界がある。ちっぽけな世界でも、クスリを与えてくれる存在は『全て』と言える。人はそれに自分を捧げる。その捧げる相手も人間だと言うのに。

~~~~~

ティア、フィオネ、エリス、コレット、リシア、ラヴィリア…

何時の間にか意識を取り戻していたようだ。いつ気がついたか自分でも分からない。暫くは目を覚ましたまま動けなかった。無意識にボーツとしていた。そのうち意識を取り戻した事に気づいたカイルは、身体を動かそうとする。痛みが走り、つい小さなうめき声をあげてしまう。

リアン

「カイル！気がついたか！」

カイル

「ここは…ティアは？みんなは？」

リアン

「ちょっと待ってて！直ぐにエリスを…みんなを呼んでくるから！」

そう言いながらリアンは直ぐに視界から消え、扉が開く音がした。

ここは治癒院らしい。周りを見渡すと、自分とリアンがいたと思われるベッドが二つある。そして側には綺麗な花があった。花の名前は分らないが、ピンク、黄色、ブラウン、少し薄いブラウン、水色、紫。誰が飾ってくれたのだろうか。どれも一つずつしかないが、一番を得られないほど綺麗な花達だ。ずっとみんな、傍にいてくれたんだろう。

子どもの笑い声がする。いつか泊まった牢屋だと思うが、前にあった血の跡はもうない。形こそ牢であるものの、それ以外はとても牢には見えない。少なくとも牢獄の家よりかは心地良い環境だ。

扉が開くと同時にもっとも求めていた声が聞こえる。

ティア

「カイルさん！」

カイル

「ティア！みんな…無事か！」

コレット

「無事かではないですよ！」

コレットと傍のラヴィリアが微笑む。エリスは緊張した表情でカイルに駆け寄り、脈や瞳孔、胸部などをサッと検診し始める。緊張した表情は次第に緩んでいき、皆が待っていた一言を発する。

エリス

「大丈夫よ。安静は必要だけだね」  
フィオネ

「良かった…カイル…」

涙を滲ませながらフィオネはつぶやく。隣のラヴィリアも涙目になっている。

カイル

「俺は…確か城で男に刺されて…みんな無事なのか？」

エリス

「人の心配をしてる身ではないわ。カイルが一番重傷よ」

コレット

「もう、あの日から一ヶ月近くになるんですよ」

カイル

「一ヶ月！？俺はそんなに寝てたのか？」

エリス

「カイルとティアは最初、命も危なかったわ。けどティアは意識を取り戻して順調に回復。カイルは命の危険を乗り越えてもそのまま意識を取り戻すか分からない状態だったのよ」

ティア

「私は必ずカイルさんは帰ってくるって信じてました」

エリス

「黙れ、小動物」

ノックがしてリアンが顔を出す。

リアン

「でも良かったねえ。みんな隣の僕をほっという意識ないカイルばかり看病するんだよ」

ラヴィリア

「ちゃんとリアン様も看病しましたよ」

リアン

「そうだったけ？あゝ、そうそう。城の兵士にリシアちゃんに報告する様に伝えたから。すぐに来ると思うよ」

フィオネ

「リシア様もお忙しい中、時間を見つけて看病してくださったのだ」  
カイル

「そうか…心配かけたな」

コレット

「本当ですよ」

カイル

「ところで、フィオネもリアンも怪我してるようだが、大丈夫なのか？ティアもどうなんだ？」

ラヴィリア

「カイル様はすぐに人の心配をなさりますね」

ラヴィリアはくすりと笑う。

フィオネ

「私はもう少々、治療が必要だ。ジークも銃で撃たれたが、もう完治している」

ティア

「私ももう少し入院みたいです」

リアン

「僕は全治一ヶ月って言われてるからもう退院」

エリス

「大丈夫よ。カイルが一番死にかけ」

カイル

「そうか、良かった。それにしても一ヶ月も経っていたとはな」

コレット

「皆さん、カイクさんからお話を聞くのを待っていたんですよ」  
カイク

「話？なんの事だ」

エリス

「その小動物に聞いて」

ティアは申し訳なさそうにしている。

ティア

「皆さんごめんなさい。でももう、お話します。カイクさん、あの日神様に言われたこと、まだ皆さんに言っていないんです」

カイク

「まだ？もう一ヶ月も経ってるのにか？」

フィオネ

「ティアがカイクは必ず目を覚ますから待つて欲しいって言ってな」  
ラヴィリア

「ティア様は信じて待ちたかったですよ」

リアン

「みんなカイクの口から聞きたいんだってさ。死んじゃってたらどうしたんだろ」

リアンも子どものように笑う。見た目通りの幼さが映る。カイクが目を覚ましたからこそその軽口だった。

ティア

「もう少し待つてください。きっとすぐにリシア様もジークさんも来ますから」

エリス

「最後まで勿体つけるわね」

カイル

「ならその間、あの日の事を教えてくれ」

その言葉でコレットを中心としてあの日の事を話してくれた。他国の組織の者が侵入し、5人が天使を奪い、国を乗っ取ろうと企てた。しかしここにいる全てが恥ない、互いを誇れる行動をした。その結果今がある。

4人まではフィオネ達が抑えることが出来た。しかしリシアの炙り出し戦略にかからなかった者がいた。それがカイルが殺した男だった。その男は仲間の一切を見捨て、真っ直ぐに城へ向かっていた。そして城へ侵入し、待ち伏せをして居たところにカイルが現れたようだった。

話が落ち着いたところで、焦りの混じるノックが響く。そしてすぐに扉が開く。リシアとジークだった。

リシア

「意識を取り戻したか!」

ジーク

「やっぱりカイルはしぶといねえ」

カイル

「心配かけたようだな」

ジーク

「いや、全然」

リシア

「全く…お前はいつも心配かけおって…」

リシアはそう呟いて泣き崩れてしまった。まだ幼さを感じることが出来る。王ではないリシアは優しく、情に脆い。こういう王ではない時のリシアがいれる場所が必要なのだ。今はその場所はカイクしかない。

ジークはリシアと全く正反対の反応。だがそれも男同士の信頼があつてのこと。ジークは分かっている。自分の祈りなどではカイクの生死に変わりはないことを。意識を取り戻したらまた親友として過ごせばそれでいい。そう考えるだけだった。

ジーク

「んで、話は聞いたんだろ？」

カイク

「ああ。律儀に俺を待ってたらしいな」

ジーク

「その嬢ちゃんの我儘でな」

ティア

「ご、ごめんなさい…」

カイク

「リシアもいい加減泣きやめ」

リシア

「うつ…す、すまない…ぐすっ」

涙に濡れたリシアにフィオネがハンカチを手渡す。涙を拭くと直ぐに王へと切り替えた。

リシア

「取り乱してすまない。カイク、話してくれ」

カイク

「ああ。その前に一つ確認したいんだが、羽根付きはどうなった？」  
ティア

「羽根付きさんなら無事です。皆さん羽根が無くなって、普通の生活に戻ってます」

ティアは嬉しいそうに言う。

コレット

「そうです。御子は理由をご存知のようですが、私達には不思議で…」

カイム

「そうか。いい方向へ羽根付きは消えたようだな」

ジーク

「やっぱりカイムも分かるのか。早く話せ」

カイムは無言で頷き、あの日の事を語った。

神は2つの罰を与えた。1つはカイムとティアへ無限地獄。そこから抜け出ることが出来たのはラヴィリアの祈りだった。細やかなきっかけかもしれない。しかしそれが無ければ本当に限りが無かつたかもしれない。

2つ目の罰は世界に向けてだった。それは神が消えること。神は天使と共に一切関与しないと告げた。世界を管理せず、放棄し、今後世界に終わりが訪れても、人間同士が醜く殺し合っても救いを与えない。それが神の降した罰だった。その影響で、今まで神の実験体であった羽根付きの人間は消えた。神はもう、人間を知る必要がないから。そしてティアから天使の力を奪い、ただの人間とした。

一見、神の世界の放棄は罰には見えない。しかし今までは神の恐怖という抑止力で国が複数ありながらも、互いに争わずに保つことが出来た。しかしその抑止力はない。人々が人類の滅亡まで争ってもそこには一切の救いがない。そして人間という生き物はそこまで争ってもおかしくはない。

今はいいだろう。しかし神がないという事実が根強いた時、世界はどこへ向かうのだろうか。それは全く分からない。神には見えていたのだろうか。

カーム

「だからもう神はいない」

コレット

「そんな…」

カームの話を静かに聞いていたラヴィリアがゆっくりとコレットに言う。

ラヴィリア

「コレット。神様がいなくなっても私達が祈る事の意味が無くなつたわけではありません。今までと同様、生きている事に感謝する、それでいいのです」

コレット

「ラヴィ…そうですね。今までも神様からの恵を求めて祈っていた訳ではありませんね。これからも感謝の気持ちで祈る、そうですね。ラヴィ」

ラヴィリアは微笑む。やはりこの2人は姉妹のようだ。

エリス

「だから小動物が治らなかったのね。検査して天使の力が無くなっていたことは知ってたけど」

リシア

「だがこれでティアの力を頼れなくなっただな」

ティア

「すいません…」

リシア

「ティアが謝る事ではない。今が本当に政務が重要な時と改めて思っただけだ」

リアン

「けど天使がいるって公表しちゃったからなあ」

カイル

「公表？自分の国に伝えたのか！？」

リアン

「うん。けどリシアちゃんにもジークにも許可とったよ」

リアンには帰国予定時間があつた。それを過ぎればリアンは死んだ事にされ、また新たな調査隊がやって来ることになる。それを知ったリシアの判断は天使に守られた国という情報を敢えて流すことだった。そうしなければこの一ヶ月という時間は作られなかっただろう。

リアン

「でも国の面子があるからいきなり植民地はないかな。武力行使しなければなんとかなるよ」

カイル

「面子？」

リアン

「野蛮な国って他国に思われ無いようにするって事。国自体もそういう仮面被ってるから」

エリス

「政治の話なら外でやってちょうだい。神が消えても気にすることもないわ」

ジーク

「サラッとすごいこというな」

エリス

「私はただの医者。早くフィオネとリアン、小動物は治して消えてカイムはもう少し長引かせるわ」

カイム

「おい…」

確かにエリスの言うとおりだった。リアンの国など、外の国は今までノーヴァス・アイテルという見せしめの浮遊国を見て恐怖していた。ノーヴァス・アイテルは少なくとも神による見せしめは無かった。それが今後の唯一の力かもしれない。

エリス

「じゃあ話は終わりね。カイムはもう少し寝てて」

エリスはそう言って強引にお開きにした。カイムの体調を気遣っているのだろう。みんなエリスの気遣いにも気付いていた。そして皆出て行った。

…一人を除いて

皆と共に部屋から出たと思ったが、ジークはひょっこりと戻ってきた。しかも火酒を片手に

ジーク

「見つかるこここの女達はうるさいからなあ。まあ、飲め」

そう言つてグラスを取り出し、注ぐ。

カイル

「俺はさっき意識取り戻したんだが」

ジーク

「硬いこというな。お前らしくない」

カイル

「そうだな、頂こう」

カチャンとグラスをぶつけ、2人で盃を叩る。ジークは一口で半分は飲んだが、カイルは口にふくむ程度だった。

カイル

「火酒がこんなに強いとはな…」

ジーク

「久々の娑婆の酒だ、効くだろ」

カイル

「娑婆か。違うない」

カイルはチビチビと、ジークは再び酒を継ぎ足して酒を減らしていく。少しの間、黙つてそうした時間を流す。そうした余韻を味わい終わったところでジークが切り出す。

ジーク

「それでどうするんだ？」

カイル

「どうもない。またなんでも屋を続けるだけだ。お得意様がいい仕事くれるのを願うだけだ」

ジーク

「違う。相変わらず味気ないやつだ。女だよ。やっぱり嬢ちゃんか？」

カイル

「そんな話をしにきたのか…」

ジーク

「そんなって大事なことだろう！まあ、お前の周りにいい女がいて迷うのは分かる。けどさっさとやることやつちやえよ」

ニタニタとジークは笑う。こいつは冷やかに来たただけだ。

カイル

「一ヶ月振りに目を覚ましてそんな気になれるか」

ジーク

「俺は意識取り戻した次の日やったぜ。流石に傷が痛かったが、こう…生死を別つ道を通るとまた…」

カイル

「分かった、分かった。お前は遅しいよ」

ジーク

「…不能野郎」

カイル

「やめろ、アイリスの真似」

ジーク

「まあ、やる前にとりあえず女は決めたんだろ？それとももう少し

遊びたいか？」

カイル

「…少し考える」

ジーク

「その考えた答えを聞きたかったのにな」

ノックもされず、突然扉が開かれる。そこにはチラリと怒りが目に映りながらも、無表情のエリスがいた。

エリス

「やっぱりここにいた…野良犬」

ジーク

「おっ！性病から犬まで昇格した！」

エリス

「煩い。早く出ていけ」

こうして牢獄の王は一介の医者によって強制的に退場させられた。カイルも酒が見つかり、叱責を受けながら寝かされた。久々の目覚めに酒も入り、直ぐに眠りに就くことが出来た。

~~~~~  
~~~~~

カイルが目覚めて3日経った日。カイルは久しぶりに自身の足で治療院をまわった。目が覚めても身体が怠く、手洗いにしか歩くことが無かった。

治療院の雰囲気は更に大きく変わっていた。話を聞くと、ここは病院としての機能と子どもの遊び場としての機能、2つがあるらしい。羽根付きが消え、少なくとも牢屋としての必要性は無くなった。それにより、コレットの進言とリシアの承諾で公共的なものとなった。ただエリスの診療所としての機能の重要性も考え、2つの側面を持った治療院が生まれることになった。

診療所として、エリスだけでなく、他の医者もここで働いている。病や怪我をした者は大抵ここにくるようだ。子どもとの遊び場も完全に隔離されている訳ではないが、あまり目にする事がない子ども達の楽しそうな姿は、患者にもプラスになっていると聞く。真に国民の為の施設となったのは始めてとも言えるのではないだろうか。

扉を開けると、子ども達と遊ぶティアがいた。ティアはカイルを認めると少し心配そうな顔で言う。

ティア

「カイルさん、もう動いて大丈夫なんですか？」

カイル

「ああ。傷は塞がってるからな。身体動かさないと逆に治らない。ティアこそ大丈夫か？」

ティア

「そうですね。私も同じです。子ども達と遊ぶこと位しかお役にたてませんから」

カーム

「そう、自分を卑下するのはいい加減やめろ。同じ子ども同士で丁度いいだろ」

ティア

「ひどいです」

そう言ってティアは頬を膨らませる。子どもに『お姉ちゃん怒ってる』と笑われながら頬を突つかれている。

カーム

「少し外の風に当たりたい。付き合ってくれないか？」

ティア

「は、はい！」

ティアは大きく返事をし、子ども達に謝る。子ども達は残念がるが、また遊ぶ約束をしてティアを解放した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

治癒院近くの牧場に来ていた。治癒院に近いとは言え、床に伏せて弱った身体でここまで来るのは大変だった。自分の身体ではない不思議な感覚。おかげで途中、ティアに手を引いてもらった。

天使の加護を失い、草木に以前ほどの実りはないが、気持ちの良い風が吹いている。牛や馬、羊なども遠くに見える。のどかな光景だった。

ティア

「カイルさん、お身体大丈夫ですか？」

カイル

「何回目だ？問題ない」

ティア

「でも…心配ですから…」

カイル

「なら帰るか？」

ティア

「えっ！いえ、その…折角ここまで来たんですから休んでいきましようっ！」

同じ気持ちだった。この心地良い時間を共有したい。本当に心地良いのは風ではなくこの時間だった。何も面白い会話も要らない。ただ居てくれるだけでいい。

カイル

「ティアは随分子どもに懷かれてたな。楽しいか？」

ティア

「はい！みんな元気で大変ですが、元気もらっちゃってます」

カイル

「あのままあそこで働くのもいいかもな。リシアが仕事にしてくれるだろ」

ティア

「そうですね。でもお料理もしたいですし…やりたいこといっぱいです」

カイル

「お互い生きて何よりだな」

ティア

「そうですね…」

風が変わった。遠くに見えていた馬や牛も見えなくなっていた。ティアの表情が僅かだが、曇った気がした。

ティア

「カイルさん。カイルさんは、神様の前に居た時、何を考えてましたか？」

カイル

「ん…いろいろと」

ティア

「私もいろいろ考えました。大切な人の事。カイルさんもフィオネさんもラヴィさんもコレットさんもエリスさんもリシア様もジークさんもクローディアさんも…いっぱい大切な人が居て、みんな素敵な人だなんて思いました」

そうか…

ティア

「私、みんな大好きです。すごくいい人ばかりです」

カイル

「俺もジークも最初は殺そうとしたけどな」

ティア

「それは意味があつたじゃないですか。今、私の事も大切に考えてくれてる。それで充分です」

カイル

「心が広いな」

ティア

「そうでもないです…」

鳥が風につて消えていく。

ティア

「私はカイルさんが大好きです。誰よりも。ずっとずっと一緒に居たいです」

カイル

「ティア…」

カイル

「本当に好きだから…だから選んでください」

あの時間の中で俺もティアも自分が大切に想っている存在を改めて感じた。ティアも、誰もが魅力的で、命を懸けるに値した。俺の辿り着いた答えにティアは気付いたんだろう。

カイク

「ティア…ありがとう」

ティア

「私は本当にカイクさんの事が好きなんです！けど…」

カイク

「分かってる。だからありがとう」

ティア

「カイクさんは幸せ者です。凄い素敵な人に囲まれてるんですから」

カイク

「そうだな。ジークにも言われたよ」

真っ直ぐティアを見て言葉を伝える。

カイク

「もう一度、俺は周りの人間を見ようと思う。相手の心まで。そしてその時選ぶのはティアかもしれないし、違うかもしれない。だけど相手の為にも時間が欲しい」

ティアはポロポロと涙が出て頬を伝う。

ティア

「はい。私もカイルさんに振り向いてもらえるように頑張ります」
カイル

「泣くな、ティア。お前も大事な奴だ。俺が求めた時、お前はもつ
といい奴に出会えてるかもしれないが、その時は全力で追う」
ティア

「そんなこと…そんなこと…」

涙を止めようと必死のティアの頭を胸に抱える。そのままティア
は声をあげて泣き崩れてしまった。

自分の心が醜い。自分の贅沢さと大切な人を感じながらそう、思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3688u/>

機翼のユースティア その後

2011年8月31日12時14分発行